令和７年度　研究紀要

しらかみ

第　３２　号

児童生徒の学びが「見える」授業づくり２

～学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントと

「指導と評価の一体化」のシステムを活用して～

（１年次／２か年計画）

秋 田 県 立 能 代 支 援 学 校

発刊に当たって

現在、中央教育審議会教育課程企画特別部会において、次期学習指導要領の改訂に向けた議論が展開され、先般、その論点が整理されました。それによると、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方として、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」という三つの方向性が示されたところです。これらは多様な子供たちの学びを確かなものにするための「方法」であり、目指すところは「資質・能力の育成」であることに変わりはありません。

本校では、令和５年度から、研究主題を『児童生徒の学びが「見える」授業づくり』として、学習指導要領に示す「生きる力」、すなわち各教科等で目指す資質・能力をもれなく、確かに育むことを目指した実践研究に取り組んでまいりました。本年度は、第２期の研究の１年目に当たります。

本研究における要点の一つ目は、「指導と評価の一体化」であります。これは、観点別学習評価表を基にして、既に日常的に実施し、「学びの可視化」を図っています。二つ目の要点は、「参加と学びの促進」であります。第１期の研究で「参加」を促す効果的な指導方法を共有し実践してきましたので、第２期においては「学び」を促す手立てを明確にしたいと考えています。具体的には、各教科の見方・考え方を働かせることで深い学びの実現を目指しています。三つ目の要点は、「学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメント」であります。12年間の学びで、学習指導要領に示す各教科等の目標や内容を網羅する教育課程の編成と実施を「効率よく実現する仕組み」をつくります。その際、重要視していることがあります。それは「持続可能な仕組み」として仕上げることです。私たちは、本研究の「ゴール」として、研究で得た知見や技術、構築したシステムなどを、普段使いできるよう平易な形にまとめ、日々の営みである授業において、誰でも、無理なく、当たり前に活用していくことを目指しています。

令和７年12月19日に開催した研究発表会には、来校者とオンデマンドでの視聴者を合わせ、県内外から80名を超える御参加をいただきました。多くの皆様と本研究に係る協議を深め、貴重な示唆を得られましたことに、改めて感謝申し上げます。

本紀要に研究１年目の研究実践を集約しました。全国の先進校による優れた取組には遠く及びませんが、本校の身の丈に合った実践の一端を記したものです。拙い実践でありますが、御一読の上、皆様からの御指導や御助言を賜りますようお願いいたします。

結びになりますが、本研究に対し、丁寧な御指導をいただきました国立特別支援教育総合研究所　上席総括研究員　丹野　哲也　氏に心より感謝申し上げます。

校　長　　佐 藤　　圭 吾

目　次

発刊に当たって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

全校研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

教科別グループ研究・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

○生活科　○国語科　○理　科　○社会科
○体育科・保健体育科　○福祉科　○職業科
○道徳科

寄宿舎研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37

研究発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　47

・開催要項
・研究発表会の概要
・講演・講評＜助言の要点＞
・実践発表学習指導案・発表資料
　小学部１・２年日常生活の指導「朝の活動・朝の会」
　小学部５年　生活科「調べよう～ゴムのひみつ～」
　高等部３年　社会科「我が国の地理」
・ポスター発表
・参加者アンケート（抜粋）

各資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　86

・資料１　観点別学習評価表（学びの履歴シート）（様式）
・資料２　個別の指導計画（記入例）
・資料３　年間指導計画　（様式）
・資料４　学習指導案　　（様式）
・資料５　秋田県立能代支援学校「能代スタンダード」
・資料６　標準年間指導計画（案）一部

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　97

研究同人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　98

全校研究

令和７年度　秋田県立能代支援学校　全校研究

研究主題　　児童生徒の学びが「見える」授業づくり２
～学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントと
「指導と評価の一体化」のシステムを活用して～　　（１年次／２か年計画）

Ⅰ　研究主題設定の理由

１　これまでの研究から

本校では、令和５年度と６年度の２年間、児童生徒一人一人の学習状況を評価基準に基づいて的確に捉え、資質・能力を育むための授業づくりの在り方や効果的な指導方法を見いだすことを目的とし、「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」（※１）の活用、児童生徒の「参加」と「学び」を促す指導方法の整理（能代スタンダード）（※２）、教科等の資質・能力を踏まえた授業改善などに取り組んできた。昨年度までの研究の成果と課題は表１のとおりである。

※1「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」自校作成
各教科における内容のまとまりごとの評価規準であり、在学中に育成する資質・能力を網羅したもの。併せて、「学びの履歴シート」として、学習の履歴と評価を蓄積することで、児童生徒一人一人の「学びの連続性」を確保する。

※2「能代スタンダード」自校作成
ユニバーサルデザインの考えを基に、児童生徒の「参加」と「学び」を促す指導方法を集約したもの。「指導の方法」として一覧化し、各指導計画における評価や授業づくりの参考として活用している。

表１　昨年度までの研究の成果と課題

成果	・「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」の活用による、育成する資質・能力の明確化 ・資質・能力の育成に迫るための、単元計画の検討や改善の充実 ・授業づくりの仕組みの考案による指導と評価の一体化と「能代スタンダード」の推進
課題	・学校の全体的な指導計画に基づく、授業づくりの仕組みの確立 ・各教科等の「見方・考え方」を働かせた授業に係る理解と実践の推進

これまでの研究から、「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」の活用や、年間指導計画、学習指導案の様式の改訂等により、単元や本時で育成する資質・能力が明確になり、学習指導要領に基づいた目標設定と授業改善が進んだ。また、授業づくりの仕組みを日常的に活用することで、指導と評価の一体化が進み、授業実践において、効果的な指導方法を集約した「能代スタンダード」の活用が広がった。

一方で、令和６年度の全国公開研究会において、文部科学省の加藤調査官より、学校の教育目標や教育課程の中で、各教科等の授業の位置付けを明確にした上で授業を行う必要性や特別支援学校における 12 年間を見通した学びを進めていくためには、各教科等の全体的な指導計画を作成する必要があるとの助言を受けた（表２参照）。本校の課題は、12 年間の学びを確実

に保障するための各教科等の指導計画が十分に整備されていない点が明らかになった。小学部３段階、中学部２段階、高等部２段階に整理された各教科等の指導目標及び内容に基づき、どのように指導し、学びを深めていくかという具体的な計画の作成が必要であることが浮き彫りになった。この課題の解決に向けて、学校の全体的な指導計画に基づき、資質・能力をより計画的に育成するために、各教科等の「標準年間指導計画（案）」（資料３）の作成に着手した。全校での教科別のワーキンググループを設定し、12 年間で育成する資質・能力の指導順や時数、指導の形態等についての検討を進めた。

また、作成した指導計画を活用して体系的な授業づくりを行う仕組みを確立することや、各教科の「見方・考え方」を踏まえ、「深い学び」につながる授業実践を具現化することも重要な課題である。

表２　令和６年度全国公開研究会における助言の内容（抜粋）

文部科学省初等中等教育局　特別支援教育課　特別支援教育調査官　加藤宏昭　氏
□教育課程の編成 ・学習指導要領上の内容を確認せずに指導することは、公立学校としては偏った指導となる。学校の教育目標があり、教育課程があり、授業がどこに位置付いているかを把握して授業を行う必要がある。 ・学習指導要領に示されている各教科等の内容はきちんと取り扱う。安易に、先生方が独自の判断で取り扱わないことがあると、子どもは学ぶ機会を失ってしまうことになる。
□単元目標 ・各教科等を合わせた指導は指導の形態であり、目標や内容を有しているものではない。「単元目標」と示す場合、学習指導要領における各教科等の目標と、活動上の目標を区別すること。活動目標では評価ができないことを理解する。各教科等の目標が必ず必要となる。
□学習評価 ・学習評価については、日々の授業の中での児童生徒の学習状況を把握し指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、評価をして終わりではない。評価をするということは、それを次の指導に生かしていくということ。能代支援学校でも、どのように評価をしていくのか、計画を立てることが非常に重要となる。 ・12 年間を通して「本校ではこのような学びを進めていく」という特別支援学校版の各教科等の指導計画を作成する必要がある。学校としての全体的な指導計画に基づき、学年や学習グループでの各教科等の指導計画を作成・評価を行う。各自の授業や学年の指導計画が、学校としての指導計画のどの部分に当たるのかを説明できるようにする必要がある。

２　学校の現状から（令和５年度～令和９年度秋田県立能代支援学校教育プランより）

本校には発達障害や肢体不自由のある児童生徒が在籍しており、一人一人の実態に応じた指導と指導方法の共有が必須である。児童生徒の学習履歴を踏まえ、入学から卒業まで一貫した指導を行えるよう、教育計画や体制の整備を進めている。さらに、全ての児童生徒が安全・安心の基で主体的に学べる学校を目指し、「生きる力」を育てる教育課程及び授業の改善・実施を今年度の重点として位置付けている。

上記の内容を踏まえ、児童生徒一人一人の学びの連続性を保障し、育成する資質・能力を日々の授業で確実に育むためには、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容を計画的に指導し、学びの過程を可視化して指導と評価の一体化を図る授業づくりの仕組みを確立することが必要であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の目的

児童生徒の学びの連続性を確保しながら、知的障害教育校の学習指導要領に示す、各教科等で育成する資質・能力を、日々の授業において確実に育むための授業づくりの仕組みをつくるとともに、授業改善の要点を見いだす。

Ⅲ　研究内容・方法

１　研究対象

各教科、道徳科、自立活動、各教科を合わせた指導等、全ての授業を研究対象とする。

２　研究内容・方法

（１）研究の概要

日々の授業において、学習指導要領に示す各教科等で育成を目指す資質・能力を確実に育むため、本校で作成した「標準年間指導計画（案）」と「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」をツールとして、「授業づくりの仕組み」（※４）を構築する。併せて、これまで取りまとめた、児童生徒の「参加」と「学び」を促す効果的な指導方法である「能代スタンダード」の充実を図る。

１年次前半は、「標準年間指導計画（案）」を活用して年間指導計画を作成し、各教科別研究グループにおいて授業の検討を行う。授業研究を通して、各教科等の資質・能力を確実に育む授業づくりの要点を集約する。

１年次の後半から２年次にかけて、授業研究を通して得た知見をもとに「授業づくりの仕組み」を見直し、「標準年間指導計画（案）」の正案化を図る。

授業研究会や研究協議会を通して、学校全体で研究成果を共有し、日々の授業に活用する。

※3「標準年間指導計画（案）」自校作成

学習指導要領に基づき、本校の児童生徒に 12 年間で育成する資質・能力について、指導の順序や指導時数、指導の形態などを検討し、体系的に整理・作成したもの。学習指導要領に示す内容を本校の教育課程として具体化する際の規準として位置付け、年間指導計画の作成に活用する。令和7年度より運用し、改善を図っている。

※4 授業づくりの仕組み

①学校教育目標の達成を目指し、教育課程の編成・実施の一環として作成する各教科等の年間指導計画において、「標準年間指導計画（案）」を規準として活用する。

②指導と評価の一体化を図り、学びの連続性を確保するため、個別の指導計画を立案する際の規準として、「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」を活用する。これは、評価の集約にも位置付けられる。

③全ての児童生徒の「参加」と「学び」を促す効果的な指導方法「能代スタンダード」を用いて、効果的な指導方法を共有しながら、日々の指導を進める。

本研究では、これらの各教育計画等をツールとして位置付け、①～③の一連を「授業づくりの仕組み」としている（図１ 授業づくりの仕組み 参照）。

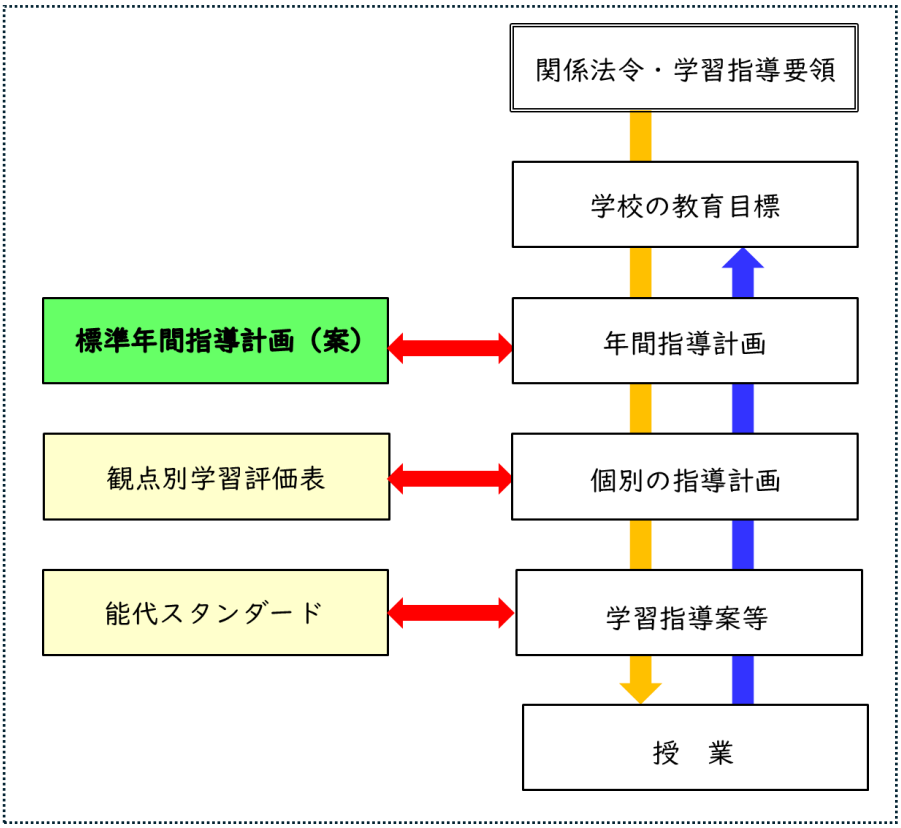


図１　授業づくりの仕組み

（２）１年次の研究

①「標準年間指導計画（案）」の活用による年間指導計画の作成

・各教科等における年間の指導内容を明確にし、内容の配列を検討するとともに、指導の形態を整理する。

②日々の授業を対象とした授業研究の実施

・各教科別研究グループにおいて、対象となる授業を、年間指導計画や「観点別学習評価表に基づいて検証しながら、資質・能力の育成に向けた授業改善の要点を検討する。

・児童生徒の「参加」と「学び」を促すための指導方法「能代スタンダード」を検証し、より効果的な授業展開の在り方を含めた指導方法の改善を図る。

・全校授業研究会を通して、資質・能力の育成に向けた授業改善の要点を集約する。

③「標準年間指導計画（案）」及び年間指導計画の妥当性の検証・改善

・「標準年間指導計画（案）」から日々の授業までの過程や、授業研究の成果・課題から、「標準年間指導計画（案）」及び年間指導計画の妥当性を検証し、改善を図る。

（「標準年間指導計画（改訂案）」の作成）

（３）２年次の研究

①「標準年間指導計画（改訂案）」に基づく、年間指導計画の立案・実施

・１年次の成果と課題を踏まえて整理した「標準年間指導計画（改訂案）」を活用し、年間計画を作成し、授業実践に生かす。

②授業実践による「標準年間指導計画（改訂案）」の検証・修正・正案化

・授業実践から得られた成果や課題をもとに、指導内容や配当時数を再検討し、「標準年間指導計画（改訂案）」を正案化する。

③資質・能力を確実に育む「授業づくりの仕組み」の検証と改善

・「授業づくりの仕組み」を活用した授業実践を通して、有効性や持続可能性を検証し、普段使いできる仕組みとして確立する。

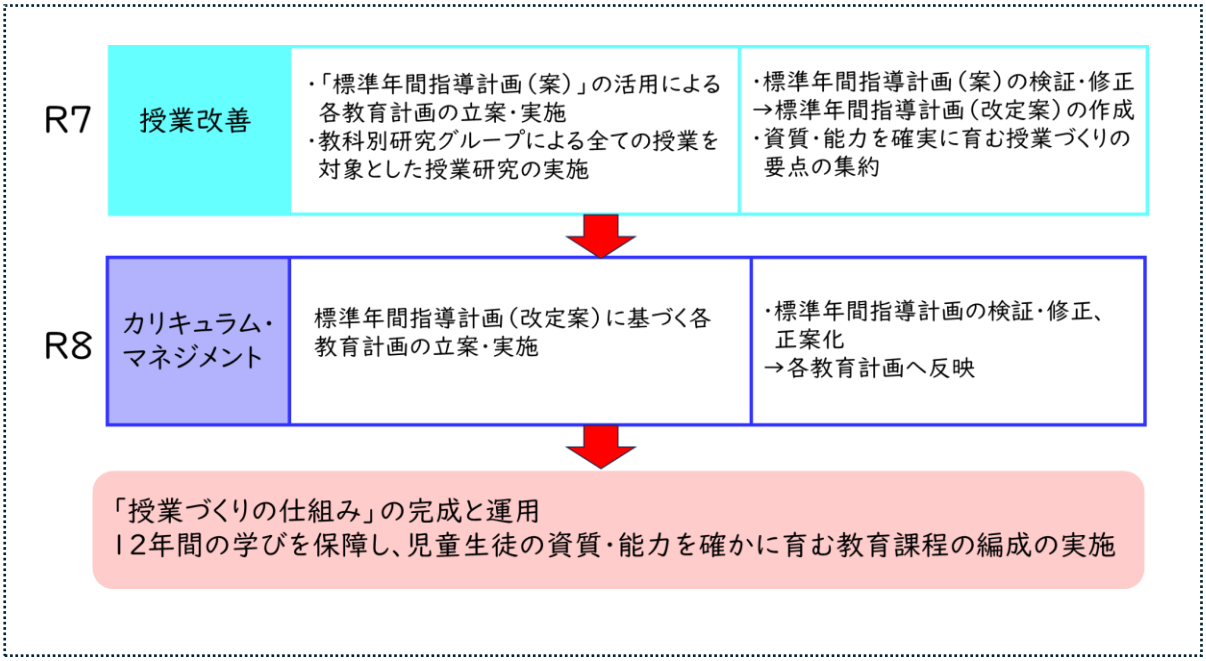


図２　研究のロードマップ

Ⅳ　１年次の研究

１　年間計画

以下の研究年間計画により研究を進める（表２）。研究全体会は年３回、全校授業研究会３回教科別研究グループ研究会（以降、グループ研とする）は月１回を基本とし、学部や全校で内容を共有しながら実践を進める。年次研修対象者である 12 名の授業を基に、研究グループを編成し授業づくり及び授業研究会を実施し、日々の実践に生かす。

表２　令和７年度　研究年間計画

月	全校研究	研究日	授業研究会 （全校授業研会・年次研修）
4	14 日　研究研修会		
5	2 日　研究全体会① 16 日　指導主事計画訪問	2 日　能代スタンダード研修会 30 日　学部研究会 20 日　グループリーダー打合せ 25 日　グループ研①	27 日　８年目研修 研究授業 （作業学習 高１～３） 28 日　８年目研修 研究授業（社会科 高３） 5 日　８年目研修 研究授業(国語科 小１) 18 日　８年目研修 研究授業 （保健体育科 高１） 23 日　８年目研修 研究授業　（理科 中１）
6			
7	22 日　研究推進委員会① 29 日　研究全体会②	29 日　グループ研②	9 日　初任者研修 研究授業（国語科 高３） 15 日　初任者研修 研究授業（数学科 高１） ２年目研修　研究授業 （生活単元学習 小６） 17 日　中堅研修 研究授業　（国語科 小５）
8		4 日　ポスター発表研修会① 標準年計 WG① 21 日　グループ研③ 標準年計 WG②	
9		8 日　グループ研④	9 日　２年目研修 研究授業 （体育科 小１～３） 10 日　５年目研修 研究授業（国語科 高３） 11 日　５年目研修 研究授業（福祉科 高２） 22 日　全校授業研究会① （日常生活の指導 小１・２）
10		6 日　グループ研⑤ 8 日　ポスター研修会②	7 日　初任者研修 研究授業（国語科 高１） ５年目研修 研究授業 （道徳科 小５・６） 10 日　授業づくりプロジェクト 研究授業 （国語科 中３） 15 日　５年目研修 研究授業 （日常生活の指導 小１・２） 22 日　初任者研修 研究授業(社会科　高３) 27 日　全校授業研究会②　（生活科　小５）
11	26 日　校内ポスター 発表会①	5 日　グループ研⑥	13 日　全校授業研究会③　（社会科　高３） 25 日　初任者研修 研究授業 （生活単元学習 高３）
12	5 日　校内ポスター 発表会② 8 日　実践発表報告会 17 日　研究報告会 19 日　研究発表会 26 日～1/19 日 オンデマンド配信	8 日　グループ研⑦	3 日　初任者研修 研究授業 （生活単元学習 高２）
1		21 日　グループ研⑧	
2	20 日　研究推進委員会②	12 日　グループ研⑨	10 日　中堅研 研究報告会
3	13 日　研究全体会③ 下旬　研究紀要発行	10 日　標準年計 WG③	

２　１年次の研究経過

１年次は、授業改善の要点を見いだすことを目的に、各教科別研究グループで授業改善に取り組んだ。全ての授業を研究対象とするが、研究グループを各年次研対象者 12 名の授業を基に編成したため、生活科、国語科、社会科、体育科/保健体育科、道徳科、福祉科、職業科の８教科に分かれて検討を進めた。

（１）「標準年間指導計画（案）」の活用による年間指導計画の作成

「標準年間指導計画（案）」に基づき、各教科等の年間指導計画を作成した。各学年で取り扱う指導内容を「標準年間指導計画（案）」で確認し、学習集団の実態や習得状況に応じて、取り扱う指導内容を精選し、指導の形態や学習活動を計画した。また、学部や教科別研究グループにおいて、指導の形態や具体的な学習活動について検討し、育成する資質・能力をどのように育んでいくのか、授業実践を通して内容の妥当性を検証し、必要に応じて見直しや修正を行いながら改善を重ねた。

（２）日々の授業を対象とした授業研究の実施

教科別研究グループにおいて、年間指導計画や「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」を基に授業づくりを進めた。授業改善の核となる「主体的・対話的で深い学び」「習得・活用・探究」「各教科の見方・考え方」の三つの概念を相互に関連付け、資質・能力の育成を目指すことを共有した。また、提示授業を通して、単元構成においてどの場面で目指す資質・能力を育むのかを明確にして授業づくりを行うことや児童生徒が各教科等の「見方・考え方」を意識できるように、教師が計画的に学習場面に位置付けることの重要性を確認した。これらの共有を踏まえ、授業実践において具体的な指導場面の改善に取り組んだ。さらに、児童生徒の「参加」と「学び」を促すための指導方法「能代スタンダード」について検証し、より効果的な指導方法を検討し、日々の授業で活用することにつながった。

（３）「標準年間指導計画（案）」及び年間指導計画の妥当性の検証・改善

「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の立案から、授業実践までの一連の過程を通して、指導内容や単元構成等の妥当性を検証した。これまで、合わせた指導において、曖昧であった指導内容について、どの教科の内容を指導するのかを明確にし、各教科等の系統性を踏まえた指導の検討が行われた。また、指導内容に応じて教科用図書や副読本、教材等を効果的な活用の仕方についての検討も行われた。さらに、育成すべき資質・能力を、年間を通して計画的に指導を行えるように、単元のまとまりを意識した配列や時数の検討が進められている。各教科別研究グループにおいて、「教師も児童も迷わず行える学習を」という意識のもと、「標準年間指導計画（改訂案）」の作成が進められている。

３　研究発表会の実施

12 月に、全国を対象とした研究発表会を開催した。各教科等で育成を目指す資質・能力を確かに育む授業改善の要点の理解や、本校の研究及び授業に対する改善点を明らかにすることを目的とした。具体的な内容については、「研究発表会＜記録＞」の頁に示す。

講評・講演の講師として、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　情報・支援部　上席総括研究員　丹野哲也氏を招聘した。御指導をいただいた助言の内容の一部について以下に示す（表３）。

表３　研究発表会における講評及び助言の内容（抜粋）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　情報・支援部　上席総括研究員　丹野哲也　氏
□教育課程 ・子どもたちがどのような場面で学習していくのかが指導の形態に表れる。教科別の指導で行った方がいいのか、各教科を合わせた指導で行った方がいいのか、それぞれの特徴を捉えて、そのよさを踏まえた効果的な指導の形態を工夫していくことが大事である。生活単元学習の中でやりきれなかった教科の深まりを、教科別の指導で行う。あるいは逆もある。教科別の中で学んだことを、生活単元学習の中で応用、活用させていくというような変換を工夫していくことが教育課程の中でできる。
□授業づくりの仕組み ・能代支援学校では、関係法令・学習指導要領を踏まえ、学校の教育目標から年間指導計画へとつながる授業をよくしていく仕組みづくりに取り組み、システム化している。今年度は、年間指導計画のベースとなるもの（「標準年間指導計画」）を「案」から正案化していく取組が進められている。また、個別の指導計画を支える「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」、さらに「能代スタンダード」を授業づくりの重要なツールとして位置付け、新しく来た先生でも具体的なヒントを得られる体制が整えられており、いろいろな学校で参考になる。学習指導案の評価や反省を年間指導計画に反映させていくサイクルを意識し、年間指導計画と「個別の指導計画」を核として教育課程を編成している点は、特別支援学校の授業づくりの肝を押さえた取組である。
□年間指導計画 ・子どもたち一人一人の実態を踏まえて、年間指導計画が作成されている。年間指導計画をベースにしながら、さらに子どもたち一人一人の実態等に応じて個別の指導計画で具体化していくという手続きが特別支援学校の専門性である。一人一人の実態に応じた丁寧な具体的な指導をしていくことが特別支援教育であり、その考え方が１時間ごとの授業に反映されていく。
□授業の位置付け ・授業は、学校の教育目標を達成するために、法律に基づいて定められた時間的な基準がある。この基準のもと、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容に基づいて行われる教育活動である。１回45分あるいは50分の１単位の授業というのは、単元計画の中の１単位時間であることが大事である。単元を通してどのような資質・能力を子どもたちが身に付けていくのかを明確にした上で、授業は、単元目標を達成するための１時間であるといった見方が大事になる。
□各教科の「見方・考え方」 ・教科フィルターを通すことで、広範囲な生活にかかる様々な事象や出来事について、学びが焦点化・深化していく。事象の背景に気付くことが子どもたちの学びの深まりにつながっていく。知識の概念的理解や本質的な共通点や違いに気付くことで学びが深まる。教科フィルターを通すと、学びによりシャープにアプローチできる。
□次期学習指導要領の審議動向より ・「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」、これらを三位一体で具体化していくことが次期学習指導要領のコンセプトである。深い学びの部分をどのように考えていくかというところが、能代支援学校でこれまで取り組んできた研究成果を大いに生かせる内容である。 ・「好きを育み、得意を伸ばす」ことと、「当事者意識をもって自分の意見を形成し、対話と合意ができる」この二つを大事にしながら、各教科の学びを進める視点が重要である。その実現には、子ども一人一人の興味・関心やよさに着目し、「学び」をデザインする高度専門職としての教師の専門性が鍵となる。 ・現行の学習指導要領に基づく能代支援学校におけるこれまでの実践を着実に積み重ねていくことが、次期学習指導要領への確かな備えとなる。

４　成果と課題

（１）成果

①「標準年間指導計画（案）」に基づいた授業の実施による学びの連続性の保障

「標準年間指導計画（案）」に基づき年間指導計画を作成し、日々の授業実践で活用した。前期の評価を踏まえ、年間指導計画の見直しや修正を行い、後期の計画に反映することで、学びの連続性を保障した授業づくりが進んだ。また、児童生徒の実態に応じて指導内容を追加したり、単元のまとまりに応じて時数を調整したりするなど、児童生徒の実態に応じた柔軟な授業づくりが進められた。

教科別研究グループでは、「標準年間指導計画（案）」を活用する過程で、各教科の系統性を確認しながら指導内容を精査する機会が増えた。指導の段階に応じた内容のスモールステップ化等の検討が行われ、教師が学習内容を構造的に捉える力が高まった。さらに、年間指導計画を基に単元で育てたい力が明確になり、指導のねらいに沿って焦点化された学習内容を組み立てることにつながった。その結果、児童生徒にとって、「何をするのか」「何を考えるのか」が分かりやすくなり、めあての達成や成功体験が増えた。学習意欲の向上にもつながり、学びの質が高まった。

また、教科用図書を参照する機会が増え、単元のねらいに沿った意図的な教材の選択や、教材を使用するタイミングや順序の明確化による授業の流れの整理など、教科用図書を中心に据えた教材研究が進められるようになった。単元のねらいが明確になることで評価もしやすくなり、より児童生徒に応じた指導の充実につながった。

②各教科の「見方・考え方」を働かせ、「深い学び」につながる要点の共有を通した授業改善

研究全体会では、各教科の「見方・考え方」について共通理解を図り、教科別研究グループにおいて、それらを意識した授業づくりが進められた。合わせた指導においても、１時間ごとの授業において、どの教科のどの指導内容を扱うのかを意識した授業づくりの検討が進められた。

また、授業の中で、「見方・考え方」を働かせる場面を明確にすることで、育成を目指す資質・能力とともに、問いを立てる姿など、児童生徒の変容が見られるようになった。学校の教育活動全体において、教師も各教科の「見方・考え方」を意識して児童生徒と関わることで、児童生徒の視野が広がり、日常の会話のやりとりにおいても、授業での学びが活用される場面が見られつつある。

（２）次年度に向けて

①「標準年間指導計画（案）」の正案化に向けた検証と改善

今年度の実践を通して、「標準年間指導計画（案）」の検証と改善を継続し、学びの連続性の保障に向けて「標準年間指導計画（案）」の改訂を進めていく。年間指導計画の作成にあたっては、前向きな意見があった一方、実施時数の検討や、教科の指導を行う上での教材不足、より生活に結びついた指導につなげるための他教科との関連などの課題もある。これらを全体で共有し、各学部や教務部と連携しながら、指導時期や時数配当の見直し、単元構成の調整など「標準年間指導計画（案）」の正案化に向けた改善に取り組む。

②「標準年間指導計画（案）」を基にした授業実践の蓄積と共有

各教科・学年での実践資料は蓄積されつつあるが、提示授業に限らず、全教師が日常的に

授業改善に取り組める仕組みづくりが課題である。特に、学習指導案の共有が個人にとどまり、校内全体で活用されにくいことや教材・教具が個人の所有で蓄積されにくいこと、各教科の「見方・考え方」を働かせる場面設定の工夫が学部や教科間でばらつきがあることなどが課題として挙げられる。

加えて、授業づくりの仕組みそのものを十分に活用しきれていない点も課題である。「標準年間指導計画（案）」を基盤とした授業づくりのプロセスは定着してきてはいるものの、全教師の共通実践として定着しておらず、授業改善が個々の教師の工夫に依存しやすい状況がある。

今後は、学習指導案や教材・教具、単元の工夫、授業動画などを共有できる仕組みを整え、効果的な実践事例を全教師で蓄積・共有していくことが必要である。これにより、授業改善が個々の力量に依存するのでなく、学校全体の財産として蓄積され、全教師が日常的に活用できる体制を構築していく。

教科別グループ研究

生活科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・小学部１・２年日常生活の指導、小学部５年生活科、小学部６年生活単元学習の授業づくりに取り組んだ。

・研究グループは、小学部７名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）。

表１　生活科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換 ・小学部６年（生活単元学習）の授業検討　①
６月	・グループ研究の内容と進め方の確認 ・年間指導計画の作成 ・小学部６年（生活単元学習）の授業検討②
７月	・小学部６年（生活単元学習）の授業研究会 ・小学部６年（生活単元学習）の授業づくりの要点の整理
８月	・小学部１・２年（日常生活の指導）の指導案検討①②
９月	・全校授業研究会（小学部１・２年日常生活の指導） ・小学部５年（生活科）の指導案検討
10 月	・全校授業研究会（小学部５年生活科） ・小学部１・２年（日常生活の指導)、小学部５年（生活科）の授業づくりの要点の整理
11 月	・実践発表とポスター発表の検討
12 月	・実践報告の内容の検討 ・研究発表会　実践発表（小学部１・２年日常生活の指導、小学部５年生活科） ポスター発表（小学部６年生活単元学習）
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・標準年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案)」を基にした年間指導計画の作成と活用

「観点別学習評価表」を基に育成を目指す資質・能力を整理し、年間指導計画を作成した。「標準年間指導計画（案)」を参照し、生活科や日常生活の指導、生活単元学習で扱う内容と時数の関連を確認し、系統的な育成が図れるよう計画した。しかし、当初の年間指導計画では、生活科と日常生活の指導、生活単元学習の間で育成する資質・能力が重複したり、逆に扱いが不足したりする単元が見られ、児童の実態に応じた系統性が十分に確保されていないという課題が明らかになった。こうした改善の必要性から、授業検討の過程で児童のつまずきや学習の広がりを確認し、必要に応じて年間指導計画の見直しを行った。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

授業検討においては、単元で育成を目指す資質・能力とその段階を確認し、ねらいの達成に向けた指導となっているかを検討した。単元の資質・能力を明確にしたことで、指導内容の過不足や重複を見直すことが可能となり、児童の実態に応じて重点化すべき内容を絞り込むこと

ができた。また、学習活動の適切性や活動の配列についても、資質・能力の育成につながるかどうかの観点から再検討を行い、より効果的な学習過程となるよう改善した。これらの一連の検討を通して、単元のねらいと学習活動が一貫した授業づくりを進めることができた。

３　生活科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

生活科の「ものの仕組みと働き」の内容について、中学部の理科の「物質・エネルギー」につながる内容が含まれていることから、「比較する」「関連付ける」といった量的・関係的な見方を促す活動を取り入れた。児童が自ら条件を変えて試し、その違いを見いだすことで、対象への働きかけと考察が深まるようにした。

また、生活科の「社会の仕組みと公共施設」の内容については、中学部の社会科の「産業と生活」につながる内容が含まれていることから、地域の特産品である白神ねぎを題材とし、生産から消費までの流れを自分の生活と結び付けて考えられるように工夫した。地域の人々の営みや生活とのつながりを意識することで、「生活や地域と結び付けて考える」見方が働くようにした。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会
【実践発表】
小学部１年　日常生活の指導　単元名「朝の活動・朝の会をしよう」
小学部５年　生活科　単元名「調べよう～ゴムの力～」
【ポスター発表】
小学部６年　生活単元学習「地域の特産品から学ぶ社会の仕組みと公共施設」

※詳細については、研究発表会［実践発表］［ポスター発表］に示す。

１　単元の検討

小学部１年	児童の日常生活に最も近い題材として「朝の活動・朝の会」を単元化し、毎日繰り返す生活の中で資質・能力を育むことにした。挨拶や持ち物の準備、日課の確認など、基本的生活習慣の育成に向け、活動の流れを明確にし、児童が主体的に取り組めるように構成した。また、生活科の内容のまとまりが多いことから、年間指導計画を見直し、一定期間に焦点科して扱う内容を整理することが効果的であることに気付き、内容のまとまりを意識して年間指導計画の修正を行った。
小学部５年	生活科の「ものの仕組みと働き」の内容を扱う「ゴムのちから」を単元に、ゴムの条件を変えて試す楽しさを起点として、物の仕組みへの関心を高める学習を構成した。内容のまとまりが中学部の理科につながる内容であることから、理科の「見方・考え方」を生かすことができる活動内容を検討し、ゴムの伸ばし方や取り付け方による動きの違いを比較することで、「量的・関係的な視点」を働かせることをねらいとした。また、学んだことを表現する場面として、結果や児童の気付きを表現する場面の設定についても検討し、児童の考えたことを共有できる活動を取り入れた。
小学部６年	地域社会への理解を深めるため、「地域の特産品（白神ねぎ）」を題材とした単元を構成した。生産・流通・販売・消費の流れを調べる活動を通して、地域の働く人々の工夫や公共施設（市役所等）の役割に気付くことをねらいとした。生活科の内容が中学部の社会科につながる内容であることから、「生活や地域と結び付けて考える」という社会的な「見方・考え方」を働かせる学習活動を検討し、児童が自分の生活と地域の産業を関連付けて捉えられるように単元を構成した。また、調べたことを整理し、他者に伝える表現活動を位置付けることで、学びを自分の言葉で伝える力を育てることも重視した。

２　本時の検討

小学部１年	児童が自分の行動を振り返り、必要な準備や行動を自ら判断できるよう、めあてを具体的に示した。活動の順序を視覚的に確認できるカードや写真を用い、見通しをもって行動できるようにした。また、教師の支援を段階的に減らし、児童自身が「できたこと」を実感できる場面を意図的に設定することで、主体的な参加を促した。
小学部５年	児童が自ら条件を設定し、試行錯誤しながらおもちゃの動きを比較できるように、めあてを明確に示した。動きの違いを捉えやすくするために、「どうすればもっと遠くまで動くか」といった予測を立て、ゴムを引く強さや進んだ距離を色分けした目盛りで示すなど視覚的な手掛かりを用い、結果を整理しやすい環境を整えた。また、活動中に友達と結果を共有し合う時間を設けたり、自分の考えを友達に伝える機会を設定したりした。
小学部６年	白神ねぎがどのような過程を経て自分たちの食卓に届くのかを調べ、地域の人々の働きや工夫に目を向けることをめあてとした。ＰＲ動画の視聴や市役所職員とのテレビ電話によるインタビューなど、ＩＣＴや地域資源を活用して情報を集め、整理する活動を設定した。また、調べた情報を図や表に整理し、生活とのつながりを視覚的に捉えられるようにした。さらに、地域の人や施設との関わりを自分事として考えられるよう、気付いたことを友達と共有し合う場面を設定した。

３　児童の変容

小学部１年	活動の見通しをもって行動できる児童が増え、挨拶や準備などの基本的生活習慣が安定してきた。自分の行動を振り返り、「次はこうしたい」と考える姿が見られるようになり、生活科の「生活をよりよくする」見方・考え方の基礎が育ち始めた。また、活動の流れを理解し、自分で行動を選び取る力が高まったことで、日常生活の中での自立が進んだ。
小学部５年	予測を立てて結果を可視化する活動を重ねる中で、児童は動きの違いに着目し、その理由を自分なりに考えようとする姿が増えた。「ゴムを弱く引っ張ると近くに止まる」といった力の大きさと動きを関連付けた発言が見られるようになり、比較した結果を言葉や使用した用具を用いて表現するようになった。また、試行の過程を振り返る中で、「太いゴムを使ったらどうなるだろう」と新たな条件を自ら設定するなど、理科的な「見方・考え方」が芽生え始めた。
小学部６年	白神ねぎが自分たちのもとへ届くまでの流れを、動画や写真、地図を使って順に理解し、地域の産業と自分の生活とのつながりに気付いた。能代市内だけでなく東京や台湾にも運ばれていることを知り、輸送方法について「近いところはトラック」「遠いところは船や飛行機」と予想を立て、後日の市役所職員へのインタビューで確かめようとする姿も見られた。野菜を育てる人や運ぶ人など多くの仕事に支えられて自分たちの生活が成り立っていることを実感し、地域の産業に関心をもって学習に取り組むようになった。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

生活科で扱う内容のまとまりを、生活科や日常生活の指導、生活単元学習で扱う内容と時数の関連を整理し、生活科の「見方・考え方」を軸に授業づくりを進めたことで、育成を目指す資質・能力を効果的に育むことができた。また、１・２年生の基本的生活習慣等の自立、５・６年生の理科や社会科の「見方・考え方」の芽生えを系統的に育成することにつながった。特に、１・２年生では、生活科の内容のまとまりを焦点化し、２か月ごとに扱う内容を整理したこと、５・６年生では、理科や社会科の「見方・考え方」を取り入れ年間指導計画を修正し、指導内容の改善を図ったことが、児童の変容につながった。さらに、学びを表現する活動を位置付けたことで、児童が学びを自分の生活に結び付けて考える機会が増えた。

国語科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・小学部１年、中学部３年、高等部３年（１グループ、２グループ）の授業検討や授業分析に取り組んだ。

・研究グループは、小学部３名、中学部１名、高等部２名、計６名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである（表１）。

表１　国語科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換
６月	・グループ研究の内容と進め方の確認 ・年間指導計画の作成 ・国語科の指導内容と「見方・考え方」の共有 ・小学部１年、高等部３年２グループの授業検討① ・授業研究会（小学部１年） ・小学部１年、高等部３年２グループの授業検討②(Google classroom)
７月	・授業研究会（高等部３年２グループ）
８月	・高等部３年１グループの授業検討① ・各段階で育成する資質・能力の検討 （年間指導計画、「標準年間指導計画（案）」の検討）
９月	・中学部３年、高等部３年１グループの授業検討② ・授業研究会（高等部３年２グループ）
10 月	・中学部３年授業検討②
11 月	・授業研究会及び日々の国語科の授業づくりの振り返り
12 月	・研究発表会　ポスター発表（小学部１年、高等部３年１グループ）
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

※各授業検討において、授業の目標や手立ての検討と共有、授業の評価と改善策の検討、資質・能力を育むための単元及び学習内容の検討を実施した。

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

「標準年間指導計画（案））を基に年間指導計画の作成と活用を進めた。６月に指導内容や「見方・考え方」を共有し、年間を通して育成を目指す資質・能力の方向性を共有した。８月には、各段階で育成する資質・能力を整理し、「標準年間指導計画（案）」を参照しながら学習内容の系統性や学年ごとにどのような学習内容が扱われているかを検討し、指導内容や配列の見直しを行った。

授業検討を通して、年間指導計画に基づく授業実践を振り返り、目標設定や手立ての妥当性を検証した。授業研究会や日々の授業の振り返りを通して、授業改善による年間指導計画の修正や指導内容を確認し、資質・能力の育成につながる単元構成や学習内容の扱いを見直した。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

６月から11月にかけて、日々の授業を対象とした授業研究を行った。６月には、小学部１年と高等部３年の授業検討や授業研究会を実施し、授業の目標設定や手立ての妥当性を共有した。７月には高等部３年の授業研究会を行い、授業の評価と改善点を整理した。

８月には、高等部３年の授業検討を通して、育成を目指す資質・能力について確認し、生徒が何を学ぶのか」「教師は何を教えるのか」を再確認し、授業内容の修正を図った。９月から10月に中学部３年と高等部３年の授業検討を行い､授業の流れや指導の工夫を振り返り、改善につなげた。

11月には、授業研究会に加え、国語科の授業づくりの振り返りを行い、授業の積み重ねが資質・能力の育成にどのように結びついているかを検証した。

３　国語科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

国語科の指導内容と「見方・考え方」を共有し、日々の授業で言葉の特徴や働きに着目した授業づくりを進めた。その後、各学部の授業検討を通して、発問の工夫や活動の組み立て方を確認し、「見方・考え方」を働かせるための手立てを具体的に検討した。

８月以降は、育成する資質・能力と「見方・考え方」の関連を整理し、「標準年間指導計画（案)」を基に学習内容の焦点化や、言葉の意味・使い方に気付く場面づくりを検討した。日常の授業を振り返りながら、発問や活動の流れ、教材の扱い方を改善し、「見方・考え方」を児童生徒がどんな場面で働かせているのか、エピソードを基に共有した。

研究発表会において、これまでの授業実践を基に、国語科の見方・考え方を働かせた授業づくりについてポスターにまとめて発表し、成果を共有した。

授業研究会や日々の授業づくりの振り返りを行い、「見方・考え方」を意識した授業づくりについてのポイントを整理した。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【ポスター発表】
小学部１年　国語科　単元名「みて・きいて・やってみよう～おべんとうばす　しゅっぱつ！」
高等部３年　国語科　単元名「好きな本の魅力を伝えよう～【能代版】ビブリオバトルに挑戦！

※詳細については、研究発表会［ポスター発表］に示す。

１　単元の検討

小学部１年	小学部国語科１段階で育てたい資質・能力を育むために、単元の検討を重ねた。対象児童の障害特性に応じ、絵本の読み聞かせを通した語彙の理解と言葉によるやりとりを目的とし、繰り返しのある絵本を選定した。学習の流れを一定にすることや絵本のストーリーに関連したやりとりのパターン化、児童の興味・関心を維持し、主体的な学びを引き出せるように、絵本の世界観に入り込めるような学習活動を設定した。
高等部３年	高等部国語科２段階の資質・能力の育成を目指し、読書を通して得た知識や感想を自分の言葉で表現し、他者に伝える力を育てる活動として、書評合戦（ビブリオバトル）の形式を活用した単元を設定した。対象生徒への事前アンケートの結果、読書時間が少ないことから、読書への関心を高められるよう、生徒同士の発表を通して、互いに助言し合いながら内容を深めるプロセスを取り入れた。自分の思いを言葉にする楽しさや、仲間の紹介から新しい本に出会う喜びを実感できるような学習活動の検討を行った。

２　本時の検討

小学部１年	本時は、習得した知識・技能を「活用」する段階である。絵本に登場する食べ物の名前を識別し、各児童が担当する食べ物の名前が呼ばれたら、返事ができる姿を目指して、授業づくりを進めた。児童が最も好む「バスに乗り込む」場面を評価の場として設定し、呼び掛けに対して自発的に返事ができるかを確認できるよう計画した。また、文字学習への展開として、イラストと名前（平仮名）のマッチングを取り入れた。
高等部３年	本時は、これまでの推敲を経て完成した原稿を、集団の前で発表する「活用」の段階である。 各グループの代表者の原稿を全員で精読し、３つのポイント（問い掛け・説明・主張）がどこに表れているかを見付ける活動を設定した。また、付箋を用いて、よかった点やもっと知りたいことを共有する機会をもち、他者からのフィードバッグを原稿の推敲に生かすことにつなげるようにした。

３　児童生徒の変容

小学部１年	読み聞かせが始まると、児童は絵本の流れを理解し、自分が持っている食べ物のイラストカードの名前が呼ばれることに期待をもって待つ姿が見られた。名前を呼ばれると「はい」と返事をして前に出ることができ、本時の目標は十分に達成された。 また、この学びは国語の時間だけでなく、朝の会や帰りの会、道徳科の時間など、学校生活の様々な場面での呼名に対しても「はい」と返事をする姿へとつながっており、習得した知識・技能が生活場面で活用されるようになった。
高等部３年	単元を通して、生徒は自分の思いや考えを自身の言葉で表現しようとする意欲が高まった。特に、内容を深く理解するために自発的に語句の意味を調べる姿が見られるようになった。 発表原稿の作成においては、「問い掛け」が聞き手の関心を引く有効な手段であることに気付き、積極的に取り入れる工夫が見られた。また、仲間からの助言を受けて要点を絞るなど構成力が向上し、発表時にはメリハリのある話し方で自信を持って話す生徒が増加した。ＩＣＴの活用は文章構成の効率化だけでなく、自然な形での協働的な学びの形成にも寄与した。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

「標準年間指導計画（案）」に基づき、各段階で育成を目指す資質・能力や国語科の「見方・考え方」を教員間で共有した。これらを踏まえ、言葉の特徴や働きに着目した授業づくりを進めたことで、児童生徒が自発的に語句の意味を調べたり、相手を意識して「問い掛け」を工夫したりするなどの児童生徒の変容につながった。また、国語科の時間に留まらず、日常生活や他教科の学習においても、習得した力を活用する場面が広がった。

理科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・中学部１年８名を対象に、理科１段階の内容を中心に授業づくりに取り組んだ。
・研究グループは、小学部１名、中学部３名、高等部３名、計７名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）。

表１　理科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換
６月	・グループ研究の内容と進め方の確認 ・年間指導計画の作成 ・提示授業①
７月	・提示授業①の事後検討会 ・ポスター発表についての検討①
８月	・提示授業②の検討
９月	・提示授業②の手立ての検討
10 月	・提示授業①、②後の生徒の変容について共有
11 月	・ポスター発表についての検討②
12 月	・研究発表会　ポスター発表
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

「標準年間指導計画（案）」を参照し、年間指導計画を作成した。生徒の実態から、主に中学部理科１段階の内容を取り扱うことにした。生徒の学習しやすさを考慮し、小学部の生活科の内容も取り入れて指導を行うことにした。主に「理科☆☆☆☆」の教科書の内容に沿って計画を立てた。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

単元を計画する際には、「理科 ☆☆☆☆」の教科書の内容を参照した。１時間ごとの目標を明確にしたうえで、生徒が見通しをもてるように、「単元計画表」を提示し、生徒と共有してから学習を進めた。

理科を学習することが初めての生徒が多かったため、実験や観察といった操作的な活動を中心に学習を進めた。

３　理科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

理科の「見方・考え方」として、時間の経過による変化を観察し、比較できるよう、鉢植えの写真を継続的に撮影し、それらの写真を学習に活用した。

また、授業の流れが生徒にとって分かりやすくなるよう、導入で見通しをもつ、課題をつかむ、予想する、実験や観察を行う、考察する、まとめるという一連の展開をパターン化し

て構成した。

授業での話合い活動が活発になるように、グループ学習を取り入れ、メンバーの組合せを検討した。

Ⅲ　授業づくりの実際

提示授業①
中学部　理科　単元名「植物を育てよう」

※詳細については、研究発表会［ポスター発表］に示す。

１　単元の検討

本単元は植物の生長について学習する単元である。観察する植物については生徒に希望を募り、３種類の植物を設定した。植物は実際に学級の生徒が鉢植えで育てたものを観察した。予想や話合い活動の中で観察する観点について、学習指導要領解説や教科書等を参考に「葉の枚数」、「草たけの高さ」、「葉の形や大きさ」とした。

２　本時の検討

本時は総時数 11 時間のうちの第９時として位置付け、目標を「植物の観察を通して、３種類の植物の姿がどのように変化したかに気付き、成長を記録する」とした。生徒が観察の観点を理解して活動できるよう、導入では前時に予想した成長のイラストを提示し、観察の順序を意識させ、植物の生長に気付けるよう、複数の角度から撮影した写真を示して比較できるようにした。また、観点ごとの手立てとして、「葉の枚数」は、教師が事前に付箋を貼って数える、「草たけの高さ」は紙テープで計り取って長さを比較する、「葉の形や大きさ」は、子葉との違いに気付けるよう教科書のヒントを活用するなど、観察の質を高める工夫を行った。

３　生徒の変容

「単元計画表」のまとめ欄に、観察結果を記入する活動を継続して行ったことで、生徒は「今日はどんな変化を書けばよいか」「前回との違いは何か」と自分の言葉を意識しながら観察内容を整理し、発言する姿が見られるようになった。また、観察を重ねる中で、教師が示した観点（葉の枚数・草たけ・葉の形）だけでなく、「葉の色が濃くなってきた」「触ると少し硬くなった」「香りが前より強い」など、植物の微細な変化に自ら気付くなど、観察の視点が広がり、より主体的に対象を捉える姿が育っていった。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

年間を通して、前時の写真や異なる種類の植物を比較して提示したことは、観察の深まりに有効であった。また、授業ごとの記録や「単元計画表」への記入も学習の振り返りに役立った。さらに、教科書の写真や関連動画を活用することで、実際の植物との比較が容易になり、学びを深めることにつながった。

一方で、植物の生長の過程を継続的に観察する計画であったため、生長を待つ期間があり、計画を修正する必要があった。他の単元との並行実施などの工夫や実験器具や教材など備品の必要性も明らかになった。このことから、次年度に向け、理科の観察・実験が数学科の数・測定・グラフ作成と密接に関連することを踏まえ、教科間の連携を図ることでより効果的な学びにつなげていく必要がある。

社会科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・高等部３年１グループ（社会科２段階の内容を中心に学習）の授業づくりに取り組んだ。
・研究グループは小学部２名、中学部３名、高等部１名、計６名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）。

表１　社会科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換 ・グループ研究の内容と進め方の確認 ・授業提示①に向けた授業検討 ・授業提示①
６月	・年間指導計画の作成 ・授業提示①の事後研究会、授業づくりの要点の整理
７月	・提示授業②及び実践発表に向けたグループ研究の日程の確認 ・年間指導計画の見直し ・提示授業②の単元の検討
８月	・提示授業②に向けた授業検討
９月	・提示授業②の指導案検討
10 月	・提示授業②の指導案検討 ・提示授業②の模擬授業、授業改善
11 月	・全校授業研究会 ・実践発表の内容の検討
12 月	・研究発表会　実践発表
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

「標準年間指導計画（案）」を参照し、年間指導計画を作成した。実態把握から、高等部３年生の対象グループは、主に高等部２段階の目標を取り扱い、授業づくりを進めることにした。生徒のこれまでの体験と関連付けた指導計画を作成するために、４月から５月は避難訓練、９月から 10 月は、修学旅行での万博と世界の地理を関連付けた単元設定を行った。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

知識として教師が教えることと、生徒が資料の読み取りや調べ学習から気付くことを意識して、学習活動を設定した。また、学習内容のイメージがもちやすいようにＩＣＴを活用しながら写真等視覚情報を提示した。その際に、生徒の様子から、写真とイラストのどちらが有効かを検討し、生徒の思考が複雑にならないように提示する情報の整理や提示の仕方を工夫した。授業ごとのまとめにおいて、生徒が主体的に授業を振り返えることができるように、板書や資料から生徒が自分でキーワードを見付けて、ワークシートに記入できるようにした。

３　社会科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

単元を計画する際には、社会科の「見方・考え方」を働かせ、自分の生活と関連付けて学習することができるよう留意した。また、既習事項をそれ以降の単元の内容と関連させ、そのつながりに生徒自身が気付き、総合的に考えることができるように単元計画を検討した。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【実践発表】
高等部３年　社会科　単元名「我が国の地理」

※詳細については、研究発表会［実践発表］に示す。

１　単元の検討

単元の目標は以下の通りである（表２）。単元の内容を検討する際は、生徒の理解に応じた指導を行うために、小学部段階からの地理分野における学習内容のつながりを確認し、構成した。また、既習事項と国の位置関係に気付き、結びつけることができるよう、前単元で扱った国も取り上げて指導を行った。

表２　「我が国の地理」単元目標

内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
我が国の国土の様子と国民生活、歴史	世界における我が国の国土の位置、国土の構成、領土の範囲など大まかに理解する。	世界の大陸と主な海洋、主な国の位置、海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して、我が国の国土の様子を捉え、その特色を考え、表現する。	世界における我が国の国土や領土について関心をもち、積極的に学習に取り組む。

２　本時の検討

本時は、全５時間で構成される単元の第１時にあたる。目標は「世界地図や地球儀を使って示された国を探したり、国の位置を説明したりする活動を通して、大陸名や海洋名を知り、世界地図上における日本の位置を理解する」と設定した。この目標の達成に向けて、複数回の模擬授業を通して、指導の流れや手立てを検討した。導入では、学習の基盤となる「大陸名」「海洋名」「方角」といったキーワードを知識として押さえ、展開ではそれらを繰り返し活用する活動を位置付けた。また、修学旅行で訪れた万博のパビリオンに関連する国の位置を調べる活動や、地球儀を用いた操作的な学習など、生徒の学習意欲を高める工夫を取り入れた。さらに、提示する世界地図については必要な情報に焦点化できるよう、必要な情報のみを記入できる地図を使用し、学習内容への集中を促した。

３　生徒の変容

学習の開始段階では、国の位置を上手く伝えられなかった生徒が、大陸名や海洋名、方角といった基礎知識を身に付け、それらを用いて国の位置を的確に説明できるようになった。またグループワークでは、より分かりやすい説明をするために、生徒同士での気付きを共有して推敲する姿が見られた。単元の学習が進むにつれて、知識が確実に定着し、学習への興味・関心の高まりも感じられた。「同じ緯度でも気温に違いがあるのはなぜか」、「日本の地形や気候は、他の国に比べて過ごしやすいのだろうか」「赤道付近で降水量が多いのはなぜか」など、自ら問いを立てて学習を深めようとする姿が見られた。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

年間指導計画を生徒の体験や行事と関連付けて構成したことや、学びのつながりを意識して目標を設定したことは社会科の「見方・考え方」を働かせるうえで有効であった。また、「標準年間指導計画（案)」に基づき、目標が明確であったことで、指導の手立てを深めることができた。

また、研究グループでは、教材作成を分担するなど、各学部の視点を用いた主体的な授業づくりを行うことができた。一方で、時数の確保や１段階と２段階の目標を同一単元で扱うことに難しさがあった。中学校での学習経験の違いによる知識量の差が見られた。学習グループを構成する際には履修状況の確認が必要であったことなどが課題として挙げられた。

さらに、評価についてはチェックテストなどの客観的な方法を取り入れ、継続的していくことが必要であり、障害の重い児童生徒に対する教科指導の在り方についても検討が必要である。

次年度に向け、教科指導に必要な教科書・指導書・教材の整備を進めるとともに、教科の専門性を確保するために、専科教員の配置など指導体制の工夫が必要である。

体育科・保健体育科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・小学部 1～３年、高等部１年の授業づくりに取り組んだ。

・研究グループは、小学部２名、中学部２名、高等部２名、計６名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）

表１　体育科・保健体育科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換 ・グループ研究の内容と進め方、指導案の書き方の確認 ・高等部１年（保健体育）の指導案検討 ・高等部１年（保健体育）の単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫
６月	・年間指導計画の作成 ・高等部１年授業研究会
７～８月	・小学部１～３年の指導案検討 ・小学部１～３年の単元目標の達成に向けた授業展開及び手立ての工夫
９月	・小学部１～３年授業研究会 ・ポスター発表に向けての内容の検討①
10～11 月	・ポスター制作に向けての内容の検討②
12 月	・研究発表会　ポスター発表
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

「標準年間指導計画（案））を基に年間指導計画の作成と活用を進めた。

小学部１～３年	小学部１～３年の学習集団では、児童の実態を踏まえ、１、２、３段階の内容を含んだ計画を作成する必要があった。特に、今年度からの転入児童の中には、前籍校で基礎的な泳法を習得している児童がおり、「水の中での基本的な運動」を中心とした活動と併せて、どのように指導内容を構成していくのかについて難しさがあった。児童の多様な実態に応じた指導のねらいの共有や学習の到達度の把握、活動内容の調整について、各段階の目指す姿を「標準年間指導計画（案）」で繰り返し確認しながら検討した。
高等部１年	高等部の年間指導計画の作成においては、「体育理論」は３年間で 10 時間の履修が必要なことから、各学年で３～４時間扱うこととし、高等部１年生は、３時間で実施することにした。指導内容は、高等部の１段階の目標で取り扱うことにした。指導内容の選定は、「標準年間指導計画（案）」を参照し、学習内容の重複や不足が生じないように検討した。また、体育理論の内容が実技と結びつくよう、単元構成や扱う題材の順序を見直すなど、計画の改善を図った。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

小学部１～３年	体育科の「見方・考え方」を踏まえた単元計画の検討を行った。運動やスポーツを経験することで、楽しさや喜びとともに体力向上を図れるように、教師間で児童の気付きや学びのプロセスを共有し、具体的な発問の工夫や段階に応じた学習活動の設定を行った。授業の中で児童が、「できた」ことを実感できるように単元計画の検討を行った。
高等部１年	限られた時数の中で、指導内容を精選し、体育科の「見方・考え方」をどのように働かせるのかについて検討した。生徒が卒業後も運動やスポーツに関わることができるように、具体的な関わり方を知ることを重視した。生徒の理解に応じて、発問や提示する資料の精選、資料提示の工夫などの授業改善を行った。

３　体育科・保健体育科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

小学部１～３年	「能代スタンダード」の観点を教師間で共有し、各観点についてチェックを行いながら、授業づくりを進めた。各単元において、児童が自分や友達の動きを確かめながら学びを深める場面の設定や友達との関わりに気付けるような発問の工夫を行った。また、学習の見通しや達成感につながるように、まとめや振り返りにおいて、児童が「できたこと」や気付きを言葉やカードで表現する活動を設定した。
高等部１年	生徒が運動やスポーツの価値や特性に気付き、自分との関わり方を主体的に考えられるように、学習環境と学習活動の構成を検討した。体育科の「見方・考え方」を働かせるために、「する」「見る」「支える」「知る」の多様な関わり方を可視化し、生徒が理解を深められるように教材と活動の工夫を行った。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【ポスター発表】
小学部１～３年　体育科　単元名「ピン倒しゲームをしよう」
高等部１年　　保健体育科（体育理論）
単元名「運動やスポーツの多様な関わり方～運動やスポーツの色々な楽しみ方を見つけよう～」

１　単元の検討

小学部１～３年	ボール運動の単元では、遊びの流れから多様なボールを扱う活動や、的に当たると音が鳴る教材など、児童の興味を引きつける導入を設定した。基本的な動きの習得から簡単なゲームへの発展を見通し、「どうしたら相手に届くかな」「どこに投げるとキャッチしやすいかな」といった発問を通して、児童がボールの動きや友達との関わりに気付けるようにした。こうした活動を段階的に組み合わせることで、児童が「できた」と実感できる場面を意図的に位置付けながら単元を構成した。
高等部１年	育成すべき資質・能力と体育科の４つの視点「する」「見る」「支える」「知る」を軸に、生徒がスポーツの多様な価値に気付き、自分との関わり方を主体的に考えられるように、授業の構成を検討した。 生徒が運動やスポーツの価値や特性に気付き、自分との関わり方を主体的に考えられるように、単元全体の流れと手立てを見直した。

２　本時の検討

小学部１～３年	児童が安心して取り組めるよう、ボールや用具の大きさ、重さ、活動スペースや動線を整え、教師の支援やペア、小グループでの協力を生かした人的支援を工夫した。学習活動は、ボールに慣れる動きから簡単なゲームへと段階的に構成し、「どうしたら相手に届くかな」などの発問やＩＣＴによる動きの可視化を通して、体育科の「見方・考え方」を働かせる場面を意図的に位置付けた。さらに、児童が「できたこと」や気付きを言葉やカードで表現できるよう、学習の見通しや達成感につながる振り返りの方法を検討した。
高等部１年	運動やスポーツの４つの関わり方のうち、生徒の意見が出にくいと予想された「知る」をどのように提示するかを中心に検討し、能代のバスケットボール文化や漫画「スラムダンク」との関連など、生徒が身近に感じられる題材を取り上げることにした。学習活動では、視覚的・体験的に理解を深められるように、多様な種目の写真カードに競技名や役割を書き込める欄を設け、模造紙を使った分類活動と組み合わせることにした。また、ワークシートを活用して自分の経験と結び付けて考えられる場をつくり、グループでの対話を通して４つの視点を整理できるようにした。　　生徒がスポーツの価値や特性に気付き、自分との関わり方を主体的に考えられる授業構成を検討した。

３　児童生徒の変容

小学部１～３年	１段階の児童においては、数種類のボールを準備したことで、自らボールに手を伸ばし、教師の支援がなくても繰り返しボールを転がして楽しむ姿が見られた。２段階の児童においては、投球時間を計測したことで、２回目の方がピンを速く倒すことができたことに気付き、達成感を感じて活動に取り組むようになった。また、動画で自分の動きを確認することで、「強く投げたら２本倒せた」という成功の理由を言語化し、次の挑戦を自ら考える姿につながった。
高等部１年	運動能力に関わらず、生徒がスポーツに関心をもつきっかけが生まれた。実技に消極的な生徒が、写真カードから、競技には、プレイヤーだけでなく、審判や応援者などの様々な人が関わって成り立っていることに気付き、自分なりの関わり方を積極的に発言する姿が見られた。また、別の生徒は、模造紙での分類活動を通して「支える」役割についての理解を深めるなど、４つの関わり方の多様性を具体的に捉えられるようになった。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

「標準年間指導計画（案）」を活用して年間指導計画を作成し、体育科の「見方・考え方」を働かせることを軸に授業づくりを進めたことで、児童生徒の主体性や探求心を引き出す授業改善が進んだ。一方で、実態に応じた指導の段階が多様である場合の学習活動の設定や、設定した時数の中での指導内容の精選、指導時数の調整など、検討すべき課題も明確になった。

これらを踏まえ、次年度は年間指導計画と単元構成の一貫性をさらに高め、発達段階に応じた学習環境づくりと教材の工夫の検討が必要である。また、体育科の「見方・考え方」を実技や日常の運動場面に結び付け、生涯にわたるスポーツとの関わりを育む学びへと発展させていきたい。

福祉科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・高等部２年の授業づくりに取り組んだ。

・研究グループは、高等部４名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）

表１　福祉科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換
６月	・グループ研究の内容と進め方の確認 ・「標準年間指導計画（案）」の確認 ・年間指導計画の作成
７～８月	・年間指導計画の見直し・修正① ・授業検討①（単元計画）
９月	・授業検討②（指導案） ・授業研究会
10～11 月	・「標準年間指導計画（案）」の確認②（年間指導計画の評価） ・年間指導計画の見直し②（単元の配列） ・ポスター発表の内容の検討
12 月	・研究発表会　ポスター発表
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

介護職員初任者研修の資格取得に必要な定められた単位と標準年間指導計画を相互に確認しながら、学習指導要領に示された目標・内容を網羅できるよう、学習活動の検討と整理を進めた。併せて、介護実習の事前・事後学習における指導内容の整理と共有を行った。事前学習では、高齢者の理解や身体の仕組み、介護技術に関する学習を設定し、事後学習では、職務理解や介護サービスの仕組みを扱うことを共通理解とした。これらの内容を踏まえ、習得した知識を実習や学習活動で活用できるよう、指導内容や指導時期の見直しを行った。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

通年で実施する「こころとからだのしくみと生活支援技術」を対象に、日々の授業改善につながる単元計画の検討を進めた。介護サービス利用者と介護者の双方が安心・安全に介助できるよう、学習活動の内容や扱い方を検討した。特に、ベッド上での水平移動から車椅子への移乗までの一連の介助を、「水平移動」「側臥位から端座位」「端座位から車椅子移乗」といった小

単元に整理したことで、単元全体で育成を目指す資質・能力に応じた指導方法や評価の視点を明確にすることができた。これらの検討を通して、日々の授業における指導の重点化や学習過程の改善につながる具体的な手立てを見いだすことができた。

３　福祉科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

９月の指導案作成や授業研究会を通して、学習の振り返り方について検討した。介助を行う際に注意すべき点を可視化することや学習の記録方法を工夫することなど、どのように指導するのかを具体的に検討することで、学習活動や手立てが整理された。これにより、生徒が「見方・考え方」を働かせながら、学びを深める授業展開につながった。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【ポスター発表】
高等部２年　福祉科　単元名「こころとからだのしくみと生活支援技術」

※詳細については、研究発表会［ポスター発表］に示す。

１　単元の検討

「こころとからだのしくみと生活支援技術」について、授業づくりを進めた。「標準年間指導計画（案）」を基に、本単元で育成を目指す資質・能力を踏まえた指導内容を検討した。特に、移動・移乗に関連する「こころとからだのしくみ」については「ボディメカニクスの基本原理」を、自立に向けた介護の視点では、「言葉掛け」を重点として扱うこととし、単元内での学習の焦点を明確にした。

２　本時の検討

介護サービス利用者と介護者の双方が安心・安全に介助できるようにするためには、ボディメカニクスの基本原理を理解し身に付けること、「〇〇することはできますか」などの適切な言葉掛けが利用者の残存能力の活用につながることを理解し実践することが重要である。これらを踏まえ、本時のめあてを「安全で自立できるような、①移動と移乗をしよう②言葉掛けをしよう」と設定し、授業づくりを進めた。

また、生徒が自分の動きを客観的に振り返られるように、介助の様子をタブレット型端末で動画撮影し、停止やスロー再生を用いて確認できるようにした。さらに、「残存能力」という言葉の意味を改めて確認する場面を設け、自立につながる言葉掛けの必要性を意識できるよう工夫した。

３　生徒の変容

授業研究会及び単元全体を通して見られた生徒の変容は以下のとおりである。

・ボディメカニクスの基本原理を理解し、安全な介助のために必要であると認識して活用しようとする姿が見られた。基本原理を全て覚え、介助の根拠として意識的に用いようとする態度が育った。

・自分や友達の介助の様子を、ボディメカニクスの視点から客観的に捉えられるようになった。「足の向きが真っ直ぐになっていない」「腰の位置が高い」「支持基底面積が狭い（肩幅に脚

を開いていない)」など、具体的な改善点に気付き、次の実践で修正しようとする姿が見られた。

・「安全」というめあての視点を、介助動作に限らず、周囲の環境にも広げて考えられるようになった。車椅子の不具合やベッドのストッパーの有無など、危険につながる要因に自ら気付き、学びを深める姿が見られた。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

「標準年間指導計画（案)」と学習指導要領を基に行った学習活動の検討と整理、単元全体で育成を目指す資質・能力についての指導方法や評価の確認は、生徒が自ら気付き、学びを深めようとする姿につながった。また、授業づくりの手立ての検討は、教科横断的に活用でき、福祉科の授業のみならず他教科の学習場面でも、生徒が主体的に活用する姿につながった。

一方で「標準年間指導計画（案)」の活用においては、介助に関する学習を実習前に多く配分する必要があることや、前期に知識の習得の機会を多く設け、後期に知識を活用する学習を設定するなど、学習の時期の調整が必要であった。単位取得に必要な時数を確保しつつ、学習内容の系統性と実習との連動を図るためには、年間指導計画のさらなる改善が必要である。

これらの成果と課題を踏まえ、年間指導計画の改善と授業づくりの工夫を重ね、生徒の学びをより確かなものにしていきたい。

職業科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ

・高等部１～３年、作業学習（総合サービス班）の授業づくりに取り組んだ。
・研究グループは、中学部３名、高等部４名、計７名の教員で取り組んだ。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである。（表１）

表１　職業科研究グループの取組内容と実施時期

時期	内容
５月	・研究内容や取組に関する意見交換 ・グループ研究の内容と進め方の確認 ・授業検討（単元計画、指導案等）
６月	・「標準年間指導計画（案）」の確認① ・年間指導計画の作成
７～８月	・年間指導計画の見直し・修正①
９月	・ポスター発表の内容の検討①
10～11 月	・「標準年間指導計画（案）」の確認②（年間指導計画の評価） ・年間指導計画の見直し②（単元の配列） ・ポスター発表の内容の検討②
12 月	・研究発表会　ポスター発表
１～２月	・研究のまとめ（成果と課題の整理） ・「標準年間指導計画（案）」と年間指導計画の見直し

Ⅱ　グループ研究の経過

１　「標準年間指導計画（案）」を基にした年間指導計画の作成と活用

「観点別学習評価表」から抜粋した「高等部段階で育成する資質・能力の一覧」と、「標準年間指導計画（案）」を相互に確認しながら、学習活動の整理と指導内容の検討を行った。

「職業科」の指導で実施する内容と「生活単元学習」や「作業学習」で実施する内容を整理し、「標準年間指導計画（案）を基に、年間指導計画の作成を行うことを共有した。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

指導段階及び育成を目指す資質・能力を踏まえ、「観点別学習評価表」と「標準年間指導計画（案）」を基に、通年で実施する「ビルクリーニングの基礎」を対象に単元計画を検討した。校内での窓清掃を題材に、資質・能力の育成や職業的態度の習得につながる学習活動になるよう検討を重ねた。検討を進める過程で、周囲から感謝の言葉を掛けられたり、清掃を依頼されたりする経験を通して、仕事のやりがいや自己有用感の育成につながることを教員間で共有し、校外の清掃活動を見据えた学習内容も加えて単元を展開することとした。

３　職業科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

５月の指導案作成や授業研究会を通して、「観点別学習評価表」と「能代スタンダード」を基に、本時のめあて及び指導の方法について検討した。「作業手順を比較し、より効率的な方法を選択する」「安全に作業するために必要な判断を行う」などの職業科の見方・考え方を働かせる場面を明確にし、本時の目標に沿っためあての設定を行った。また、めあての達成につながるように、作業環境の配置、道具の選択肢の提示、観察・振り返りの視点カードの活用など、学習者が自ら考えて判断できる環境設定を検討したことで、学習活動の流れや具体的な手立てがより明確になった。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【ポスター発表】
高等部１～３年　作業学習　単元名「ビルクリーニングの基礎」

１　単元の検討

「ビルクリーニングの基礎」の授業づくりに取り組んだ。「標準年間指導計画（案）」と「観点別学習評価表」を基に、本単元で資質・能力を育むための指導内容を検討した。今までの学習で、窓清掃に必要な資機材や用途や扱い方を習得し、正しく窓清掃で活用する一連の流れを習得しているものの道具を効果的に扱うことに課題があったため、窓清掃における自分の成長や課題について振り返る内容を取り上げることにした。

２　本時の検討

窓清掃における自分の成長や課題について考え、それを生徒同士で伝えあって清掃技術の向上を図ることをねらいに、生徒が二人組で活動する場面を設定した。お互いの清掃の様子をタブレット型端末で撮影し、動画で振り返る活動を設けた。主体的・対話的で深い学びを促すため、「きれいな仕上がり」をキーワードに、お互いの良かった点や改善点を具体的に伝え合う場を設ける工夫を行った。また、知識や技術面のねらいを達成するため、授業後に清掃会社から外部講師を招き、専門的な作業手順や所作の確認、質問をする場を設定し、学習内容の理解を深めた。

３　生徒の変容

授業研究会及び単元全体を通して、次のような生徒の変容が見られた。

・撮影した動画を見て振り返る活動を重ねることで、友達のスクイジーの動かし方を見て、最後に下から上へ持ち上げるような動きがあることに気付いて言葉で伝えるなどの場面が見られるようになった。「きれいな仕上がり」は抽象的な表現で伝わりにくさがあったが、映像で動作の違いに注目することで具体的に伝えられるようになり、その気付きが自分の作業を見直す視点へとつながった。
・友達から「水切りのスピードが速いと水が残りやすい」などのフィードバックを受けて、自分の課題に気付いて改善点を考え、次の清掃活動で意識して取り組もうとする姿が見られるようになった。
・ペアでの活動や意見交換を通して、お互いのよさを認め合いながら学び合う姿が育まれ、協働的に技術を高めようとする態度が見られるようになった。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

「観点別学習評価表」と「標準年間指導計画（案）」を基に行った単元計画の検討、「能代スタンダード」を踏まえて行った本時のめあてや指導方法の検討が、生徒が自ら気付いて伝えあう姿につながった。授業では、生徒が「問い」をもって主体的に活動できるように、教師がどの場面でどのような働き掛けを行うのかを意識して指導を行うようになり、生徒同士の対話が活性した。

一方で「標準年間指導計画（案）」の活用において、資質・能力の育成を目指し、効果的な指導を行うために、職業科で行う内容と「作業学習」で行う内容の整理や各作業班で身に付ける資質・能力にばらつきがないかについて、「標準年間指導計画（案）」を基にした実践と検証がさらに必要である。

道徳科グループの研究

Ⅰ　グループ研究の概要

１　研究対象と研究グループ検討

・小学部５・６年の児童１０名、高等部３年の生徒１９名を対象に授業づくりに取り組んだ

・研究グループは、小学部２名、中学部２名、高等部３名、合計７名の教員で検討した。

２　年間計画

今年度の取組内容と実施時期は以下のとおりである（表１）。

表１　道徳科グループの取組内容と実施時期

時期	内容
６月	・学習指導要領および道徳科の内容項目についての確認 ・各学部、学年の年間指導計画作成の方法の共有
７月	・授業の目標と扱う内容項目の共有 ・授業計画、題材、手立ての検討（略案作成）
８月	・授業のねらいと指導案の検討
９月	・授業参観と授業検討
10 月	・研究授業と事後検討会
11 月	・ポスターセッション準備
12 月	・ポスターセッション発表
１～２月	・授業づくりの要点の確認と共有 ・年間指導計画作成についての課題と今後の課題についての話し合い

Ⅱ　グループ研究の経過

１　年間指導計画の作成と活用

今年度より、全学部で道徳教育の中核となる「道徳科」を時間割に位置付け、実践を開始した。年間指導計画を作成するにあたっては、「内容項目の指導の観点」を基準とし、知的障害の特性や発達段階に応じて内容と時数の関連を整理し、年間指導計画を作成した。

小１～高３までの年間指導計画を一覧にまとめ、各内容項目がどの学部、学年で取り扱われているかが一目で分かるようにした。授業実践を通して、年間指導計画の見直しや改善を継続的に行った。

２　日々の授業を対象とした授業研究の実施

日々の授業を対象に授業研究を行い、児童生徒の実態に応じた指導内容や手立ての改善を行った。授業後には、児童生徒の反応や発言の様子を記録し、発言が出にくかった場面の手立ての改善などを行い、次時の授業に反映させた。内容項目によっては、２つ以上を合わせることで効果的な指導につながる授業もあった。

また、生徒一人一人の心理的安全性を保障することを重視し、安心して発言したり意見を交わしたりできる環境づくりに取り組んだ。

３　道徳科の「見方・考え方」を働かせた授業展開や手立ての検討

道徳科の「見方・考え方」は、「様々な事象を道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考えること」を共有し、授業づくりに取り組んだ。

「道徳的価値」を多面的・多角的に捉える「見方・考え方」を働かせるため、以下のように授業展開や手立ての工夫を検討した。

・視覚教材やＩＣＴ機器を活用し、場面理解や価値の捉え方を支える環境を整えた。

・道徳的価値の理解を促す啓発ポスターや、他者の立場を想像することを促す「空の皿とスプーンのポスター」などを提示し、児童生徒が多角的に考えるきっかけづくりを行った。

・協議（対話）を中心とした学びを重視し、互いの考えを聞き合いながら気付きや思考を深められるよう、問いの構成や話合いの流れを工夫した。

Ⅲ　授業づくりの実際

研究発表会　【ポスター発表】 **小学部４～６年　道徳科　単元名「ぼく、わたしのよいところ」** **高等部３年　　道徳科　単元名「フードロスラに立ち向かえ」**

※詳細については、研究発表会［ポスター発表］に示す。

１　単元の検討

高等部３年の授業において、内容項目は「自分自身に関すること～節度、節制」を設定した。生徒にとって身近な食品ロスをテーマにすることで、自分事として捉えられる学習になるよう検討した。単元構成を協議する中で、以下の点について共通理解を図った。

①１単元につき、中心となる内容項目は、１つに絞ることが望ましいこと

「道徳的価値」の焦点化により、学習のねらいが明確になり、生徒の理解が深まると考えた。

②小学部は低学年（１・２年)、中学年（３・４年)、高学年（５・６年）の２学年で内容項目を網羅し、中学部と高等部は、学年ごとに年間指導計画を作成すること。

ただし、学びの履歴シート同様、扱った項目を記録し、各学部３年間で全ての内容項目を網羅するよう計画することを確認した。

③合わせた指導や学校行事で扱う内容も、内容項目と関連付けて計画すること

行事を道徳科の学びと関連付けることで、「道徳的価値」の理解を生活場面へ広げることをねらいとした。

２　本時の検討

本時のねらいを「食品ロスとその原因について知り、自分にできることを考える」と設定した。指導にあたっては、生徒の発言をすべて肯定的に受け止め、必要に応じて教師が価値付けて言語化することを大切にした。また、「答えは一つではない」という姿勢を徹底し、さまざまな考えを尊重しながら納得解を見いだす過程を重視した。生徒が安心して意見を述べられる心理的安全性を確保することで、主体的な発言や協議が生まれ、価値について多面的に考える学びにつながるよう配慮した

３　児童生徒の変容

学習を通して、児童生徒には次のような変容が見られた。

・食品ロスを自分の生活と結び付けて捉える姿が表れ、「これまで食べ残しについて考えたことがなかったが、これからは自分でできることをやりたい」といった主体的な意見が聞かれた。

・「家族と相談したい」「賞味期限を確認して買いたい」など、学んだことを日常生活に生かそうとする具体的な行動への意欲が高まった。

・話合い活動では他者の発表に耳を傾け、互いの考えを認め合いながら学びを深める姿が見られ、協働的に価値を考える態度が育ち始めた。

Ⅳ　グループ研究のまとめ

道徳科は児童生徒の「内面の成長」を扱う教科であり、評価においては、「道徳的価値」の理解や考え方の深まり、自己の生き方についての考察などの言動を見取ることが重要である。 グループでの授業づくりを通して、系統性を踏まえた学習構成、視覚的支援や個別性への配慮、対話を通し、学びの深まりを意識した授業づくりを行うことで、児童生徒の内面の成長を促す授業につながることを共有した。また、年間指導計画については、道徳科の内容項目を基に作成する方針を明確にし、学部ごとの発達段階に応じた計画の在り方を共有することができた。

一方で、指導と評価の一体化をさらに進めるためには、道徳科の評価を授業内の発言や行動だけにとどめず、他教科や教育活動全体で、児童生徒の道徳性に関わる成長をどのように把握し、どのように評価していくのかを検討していく必要がある。また、小学部段階の指導において、内容項目をどのように指導していくのかについても検討が必要である。

寄宿舎研究

寄宿舎の研究

研究主題

児童生徒の育ちが見える生活指導　－寄宿舎における参加と学びを促すための指導方法の実践－

（１年次／２か年計画）

Ⅰ　研究目的

児童生徒の実態を的確に捉え、自分から進んで取り組んだり、考えや気持ちを伝えたりする力を育てる生活指導の在り方について、効果的な生活指導方法を活用し、統一した指導や検証により見いだす。

※効果的な生活指導方法…寄宿舎において参加と学びを促す効果的な生活指導方法をまとめたもの

Ⅱ　研究仮説

児童生徒が自分から進んで取り組んだり、考えや気持ちを伝えたりする力を高めるために、的確な実態把握と指導方法を共有しながら実践し、生活指導の改善を図る。

このことについて、寄宿舎の生活指導で効果的な生活指導方法を作成、活用し、統一した指導を行い、検証することで、児童生徒が様々な場面で自分から進んで取り組んだり、考えや気持ちを伝えたりする姿を引き出すことができるであろう。

Ⅲ　研究内容・方法

１　「能代スタンダード」を基にした効果的な生活指導方法の作成

・寄宿舎生活における参加と学びについての捉えの確認、共有

・「能代スタンダード」の共通理解と、効果的な生活指導方法の作成と共有

※「能代スタンダード」…参加と学びを促すための効果的な指導方法をまとめたもの

２　児童生徒の参加と学びを促すための生活指導

・様々な生活場面における実態把握、課題や改善点の明確化

・効果的な生活指導方法を活用した手立ての検討と共通理解

・統一した指導による児童生徒の変容の共有や手立ての改善、実践の検証、見直し

３　生活指導における職員の専門性の向上

・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックの実施

・専門性の向上を目的とした研修会等の実施

※上記１から３の内容について、日々の指導や研究日を通して実践や検証を行う。

Ⅳ　年間計画

月	内容
５月	・今年度の研究についての共有 ・今年度の研究主題についての共有
６月	・今年度の研究内容・方法についての共有 ・「能代スタンダード」についての共通理解 ・寄宿舎生活における参加と学びの捉えの確認と共有 ・効果的な生活指導方法の作成
７月	・効果的な生活指導方法の提示 ・効果的な生活指導方法を活用した実践①（寄宿舎集会での実態把握について共有） ・効果的な生活指導方法を活用した実践②（寄宿舎集会での実態把握）

８月	・効果的な生活指導方法を活用した実践③（寄宿舎集会で実践する手立ての検討）
９月	・効果的な生活指導方法を活用した実践④（寄宿舎集会で実践する手立ての検討、共有）
１０月	・効果的な生活指導方法を活用した実践⑤（寄宿舎集会での実践） ・効果的な生活指導方法の見直し ・効果的な生活指導方法を活用した実践⑥（寄宿舎集会での実践の評価） ・見直しした効果的な生活指導方法の共有 ・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックについての共有
１１月	・効果的な生活指導方法の見直し ・効果的な生活指導方法を活用した実践⑦（コミュニケーションの力を育てるための実践） ・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックの実施
１２月	・効果的な生活指導方法を活用した実践⑧（寄宿舎集会での実践の評価の共有） ・効果的な生活指導方法を活用した実践⑨（コミュニケーションの力を育てるための実践） ・効果的な生活指導方法の見直し ・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックの実施
１月	・効果的な生活指導方法（完成版）の共有 ・効果的な生活指導方法を活用した実践⑩（コミュニケーションの力を育てるための実践） ・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックの実施 ・研究のまとめ（成果と課題）
２月	・効果的な生活指導方法の活用を確認するセルフチェックの実施 ・研究のまとめ（成果と課題の共有）

Ⅴ　研究経過

１　「能代スタンダード」を基にした効果的な生活指導方法の作成

能代スタンダードを基に、寄宿舎における参加と学びを促すための指導方法を作成、活用することで、児童生徒の目指す姿の実現につながると考え、効果的な生活指導方法を作成することとした。

寄宿舎生活における参加と学びについての捉えを、職員で検討し意見を集約した上で、以下のように定義し、共有した。

寄宿舎生活における参加：自分から行動すること　自分の意思で行動すること
寄宿舎生活における学び：繰り返し行い、知識や技術を身に付けること

「能代スタンダード」について共通理解を図った。児童生徒の参加と学びを促すために効果的な指導方法をまとめたものであること、児童生徒が授業に参加できるための環境づくりや、学びを深める支援について、効果的な手立てをリストアップしたものであることなど、目的や内容について共通理解した。

効果的な生活指導方法の作成では、最初に、「能代スタンダード」の中で、寄宿舎での生活指導全般と生徒指導の場面で活用できる手立てについて、意見を出し合った。手立てを物理的支援、人的支援、指導内容や場面設定の３つに分類し、写真や動画の活用、適切な説明内容と量が有効な手立てであるなど、多くの意見が出た。続いて意見を基に手立てを厳選した上で、効果的な生活指導方法としてまとめた。※資料①

具体的にイメージして実践できるように、手立てを講じる際に意識する視点として、それぞれの手立てに指導ポイントを設けた。

２　児童生徒の参加と学びを促すための生活指導

全体での指導や個別の指導で、効果的な生活指導方法を活用し、手立ての工夫や指導体制の見直しなど、指導方法の改善を図ることとした。

（１）　寄宿舎集会での実践

全体での指導では、寄宿舎集会で効果的な生活指導方法を活用することとし、７月の寄宿舎集会における実態の把握を行うこととした。観察するポイントを職員間で共有するためシートを作成し、実態、課題や改善点を記入した。（※１）

※１　７月の寄宿舎集会の様子と観察するポイント、集会における実態

観察するポイント

（児童生徒）座り方　話の聞き方　発言　集中力　積極性

（職員）　立ち位置　役割分担　働き掛け　説明内容の量　活動内容や場面設定

実態

（児童生徒）集中力が続かない
私語がある
話している人を見ていない

（職員）　児童生徒の後ろに職員を配置している
パワーポイントの内容が少し多い
児童生徒が活動する場面がほとんどない

児童生徒や職員の課題、改善点から、効果的な生活指導方法から活用できる手立てを検討した。１０月の寄宿舎集会では以下の手立てを講じることを共通理解した。

効果的な生活指導方法から活用する手立て	具体的な手立て
安全で動きやすい空間（いすなどの位置、人との距離）	・話す人やスライドに注目して話を聞くことができるように、児童生徒の座席を半円形の配置とする。
時刻や時間の提示	・開始時刻、終了時刻を提示する。
適切な説明内容と量	・話すことやスライドの内容を精選する。
職員の立ち位置	・職員の役割分担を明確にする。 ・配慮が必要な児童生徒のそばに職員を配置する。
子どもが〇〇する場面の設定 児童生徒が活動する場面の設定	・生徒がボードを使って、話合いのルールなどを皆に伝える場面を設定する。 ・得意なことを発揮できるように、児童生徒に役割を分担する。
印やマークの使用	・発表する生徒の立ち位置を示す。

※２　１０月の寄宿舎集会の様子

１０月の寄宿舎集会（※２）の実践後、検証を行い、児童生徒の変容、課題や改善点を次のようにまとめ、共有した。

ア　児童生徒の変容

職員が伝えたいことをまとめ、短く話したり、児童生徒が前後に並ばないように座席を配置し､話す人やスライドを見やすくしたりなどしたことで､集会中に周囲を見回したり、隣の生徒と話したりしていた児童生徒が、集中して話を聞いたり、話す人やスライドに注目したりするようになった。

児童生徒のそばに配置した職員が集会中に適宜、話の内容を補い説明することで、職員の話を聞き取れなかったり、理解できなかったりした児童生徒が、話の内容を理解して、集会に参加することができた。

児童生徒が活動する場面を取り入れたことで、集会への参加が消極的な児童生徒が、集会に関心をもって参加したり、意欲をもって自分の役割を果たそうとしたりする姿が見られた。

イ　課題、改善点

・児童生徒同士でのやりとりがあると、参加意識が高まるのではないか。
・まとめとして、話の内容を再確認する場面があってもよい。
・内容を掘り下げて考える必要があった。

児童生徒の変容、課題や改善点を踏まえて、その後の寄宿舎集会でも効果的な生活指導方法を活用した実践を行うこととした。

（２）　効果的な生活指導方法の見直し（１回目）

寄宿舎集会の実践で活用した後、様々な生活指導で活用しやすいようにすることを目的とし、効果的な生活指導方法の見直しを行った。手立ての分類について見直し、手立てを物理的支援、人的支援、指導内容や場面設定にそれぞれ分類していたが、物理的支援と人的支援の２つとし、それぞれに該当する手立てを分けて整理した。見直しした効果的な生活指導方法について共有した上で、寄宿舎集会以外の実践にも活用していくこととした。

（３）　個別の指導での実践

児童生徒の目指す姿にある、考えや気持ちを伝える力が育つように、コミュニケーション面の実践において、効果的な生活指導方法を活用することとした。

目標や手立てについて、児童生徒の実態や効果的な生活指導方法を基に、週の始めに行っている週ミーティングで意見を出し合い、まとめたものを共有した。また、目標、手立てなどを共有するツールとして、日々の生活指導実践検証シート※資料②を作成した。目標、手

立て、児童生徒の変容、今後の方向性を記入する様式とし、常時内容を確認できるように、毎日の生活記録を綴じるファイルに添付した。実践後に検証を行い、児童生徒の変容や今後の指導の方向性について週ミーティングで意見を出し合い、集約したものを共有した。

事例紹介

高等部３年　女子	
実態	自分から積極的に話し掛けることが苦手である。自分から挨拶することは少ない。声が小さく、うつむきがちである。
目標	自分から挨拶をする。
手立て	・本人から挨拶があるまで声掛けしないで待ってみる。 ・本人から挨拶があってから挨拶を返し、その場でほめる。
変容	・実践の２週目から効果が出てきた。自分から伝えられる場面が増え、笑顔が見られるようになり、声も大きくなった。目を見てくれるようになった。 ・挨拶に限らず、様々な場面で能動的な言動が見られるようになった。係の仕事に自分から進んで取り組んだり、言葉にして気持ちを表出したりすることが多くなった。
今後の方向性	・継続して実践していく。 ・よかった場面では、即時評価をしていく。

（４）　**生活指導における職員の専門性の向上**

効果的な生活指導方法を日常の生活指導で活用できているか確認するため、効果的な生活指導方法を基に作成した自己チェックリストを活用し、セルフチェックを毎月行っていいる研究会の中で実施した。※資料③

定期的にセルフチェックを実施することで、効果的な生活指導方法の活用の意識付けにつながり、日々の指導に生かすことができたとともに、指導を振り返ることにも役に立った。

（５）　**効果的な生活指導方法の見直し（２回目）**

寄宿舎集会での実践や、個別の指導（コミュニケーション面の実践）での活用を通し、学習会などの全体指導、コミュニケーション面以外での個別の指導、個別の生活指導計画などでも、効果的な生活指導方法を幅広く、日常的に活用できるよう、指導ポイントについて整理した。具体的で分かりやすいものに改善することを押さえた上で、１２月と１月の研究会で見直しを行い、意見を集約し整理したものを効果的な生活指導方法の完成版とし、共通理解した。※資料④

３　成果、課題と今後の方向性

（１）　成果

効果的な生活指導方法の作成、活用により、以下の成果が得られた。

寄宿舎集会の実践では、座席配置などの環境設定、説明量の調整などといった人的支援、活動場面の設定により、児童生徒が話を集中して聞き、内容を理解して活動に参加したり、進んで自分の役割を果たしたりすることにつながった。

個別の指導（コミュニケーション面）の実践では、問い掛けや評価、称賛の工夫、職員間で支援方法や指導内容の共有を図ったことで、児童生徒が進んで挨拶をしたり、丁寧な言葉遣いで話したりなどするようになった。

日々において効果的な生活指導方法を活用しているか、定期的にセルフチェックをしたことで、効果的な生活指導方法の意識付けや、日々の指導の振り返りにつながり、実践の改善に役立てることができた。

（２）　課題・今後の方向性

今年度は、効果的な生活指導方法を活用した実践をする場面が限定的であった。今後は部屋会や役員会での少人数での話合いの場や、個別の生活課題についての指導など、日常での生活指導全般における効果的な生活指導方法の手立ての実践と、定期的なセルフチェックを継続し、児童生徒が様々な場面で進んで取り組んだり、考えや気持ちを伝えたりすることが育つように、職員のスキルや専門性の向上を図っていきたい。

また、寄宿舎における学びとして定義した生活に必要な知識や技術を身に付けるための指導の実践、検証を行い、児童生徒の目指す姿に到達できるようにしていきたい。

資料①

効果的な生活指導方法

◆各手立て･指導のポイントを共有･統一し、生活指導を進めていく

分類	参加と学びを促すための手立て			
	手立て	指導ポイント	手立て	指導ポイント
環境の設定　物的支援	時刻や時間の提示 (本時の流れの提示)	見通しをもたせる工夫	用具･道具類の工夫	実態に合ったものの準備
		終了時間の提示		用具･道具類の配置
	見本･実物の提示と活用	見て分かりやすい提示	安全で動きやすい空間 (椅子等の配置や人との距離)	見える位置の配慮
		イメージのしやすさ		動きやすい配置(人も物も)
	写真･動画の活用	見やすさ、分かりやすさ		
		イメージのしやすさ		
	ワークシートの工夫	実態に合った様式の工夫		
		書きやすさ(図、イラストなど)		
	印やマークの使用	重要な部分のみ強調する		
		印やマークの精選		
環境の設定　人的支援	適切な説明内容と量	分かりやすさ、伝わりやすさ	ポイントをしぼり、コンパクトに伝える	
		声を掛けすぎない		
	評価の方法 (即時評価･称賛方法の工夫)	評価のタイミングの工夫	具体的に評価、称賛する	
		実態に合った称賛方法の工夫	ポジティブな終わり方を意識(怒って終わらない)	
	○○を促す問い掛け (気付き、思考、思いを引き出す)	待つ(話し出す、答えを出すまで)	気付けるような工夫(タイミングやヒントの提示)	
		話を最後まで聞く		
	教師の立ち位置	役割分担(勤務上の動き)		
		適切な人数		
	支援方法･内容の共有	生活記録を忘れずに記録する		
		確実、適切な引き継ぎの実施		
活動内容や場面設定	写真や演示を取り入れた説明	見やすさ、分かりやすさ	環境に合わせた掲示 (舎内、舎室、個人)	場面にあった掲示の意識 (見直しや精選も含む)
	子どもが○○する場面の設定(活躍や体験)	ロールモデル、見本の設定	学習成果を見合う場面の設定	各検定、生活自立体験
				全体や部屋で見合う
	くり返しの場面の設定	定着するまで行う		
	自力思考の時間確保	待つ(話し出す、答えを出すまで)		
		助言をしすぎない		
	得意やよさを生かした役割分担	一人一役の役割分担		
		ロールモデル、見本の設定		

資料②　【日々の生活指導での実践・検証シート】

効果的な生活指導方法の実践　10/28～11/7

日々の生活指導での実践・検証シート

生徒名：

伸ばしたいところ	自分から　あいさつをする。
手立て	職員は先に　あいさつをせず　待つ。（不自然にならないよう） 心さんから あいさつが あってから、あいさつを かえし その場で ほめる。「評価のタイミングの工夫」をやりたいのです。
児童生徒の変容等	・2w目から効果でてくる。慣れてきて、自分から伝えられる場面が増えた。 ・あいさつに限らず、能動的な言動が見られるようになった。 ↳ 11/5（木）の生活記録を参照下さい。 気もちの表出ができるようになった。
今後の指導の方向性	・せっかくできるようになってきたので、継続して 取り組みたい。 いい場面では即時評価お願いします。 （2w目の良かったところも本人に伝えていきます。）

コミュニケーション面で伸ばしたいところを記入

効果的な生活指導方法を活用して設定した手立てを記入

変容などを記入

今後の指導の方向性を記入

資料③【効果的な生活指導方法　自己チェックリスト】

効果的な生活指導方法　自己チェックリスト　氏名

月　日（　）～　月　日（　）

■人的支援

手立て	指導のポイント	チェック	自己評価		
適切な説明内容の量	・要点を押さえ、短く伝える ・実態や理解度に合わせた伝え方をする	□	3	2	1
適切な指導の言葉掛け	・本人が自分で気付くような言葉掛けをする ・場面や状況を見て言葉掛けする	□	3	2	1
○○を促す問い掛け（気付き、思考、思いを引き出す）	・待つ（一言言葉がでるまで待ってみる） ・本人の考え、言葉を引き出す	□	3	2	1
評価・称賛	・評価、称賛の方法を工夫する ・具体的な評価、即時評価をする	□	3	2	1
職員間の連携（支援方法・内容の共有も含む）	・ポイントを押さえた引き継ぎ、情報共有をする ・物事の大小関係なく、素早く報告・連絡・相談する	□	3	2	1

■物的支援

手立て	指導のポイント	チェック	自己評価		
時間・流れの提示（見通しをもたせる）	・時間を提示する（開始、終了時間） ・内容を提示する（どんな内容をやるかなど）	□	3	2	1
場面に合わせた掲示物の作成と掲示（見本・写真の活用も含む）	・分かりやすさ、見やすさを考え、作成する ・見やすい場所へ掲示する ・見直しや更新を定期的に行う	□	3	2	1
ワークシートの活用	・シンプルで分かりやすい内容にする ・様式の表現方法を考える	□	3	2	1
人や物の配置と環境の設定（事前）	・座席の配置やレイアウトを考える ・用具、道具の準備や配置を工夫する ・流れや役割分担などを職員間で事前に共有する	□	3	2	1
子どもが○○する場面設定	・ロールモデル、見本（生徒の活用） ・得意を生かした役割分担をする	□	3	2	1
くり返しの場面の設定	・定着するまで指導、取組等を継続する	□	3	2	1
事前準備と共有	・職員間で共有する ・複数人で補助する	□	3	2	1

■振り返り

◆自己チェックについて
- １ヵ月ごとにチェック、振り返りを行う
- チェックする項は、各自で選択する

自己評価を３段階に設定
３…十分に実践した
２…実践した
１…あまり実践しなかった

取り組む手立てにチェックを入れる

自己評価後に自身の指導の振り返りを記入する

資料④

【寄宿舎】 効果的な生活指導方法

生徒一人一人の実態に合わせた生活指導

■人的支援

手立て	指導ポイント	ﾁｪｯｸ
適切な説明内容の量	・要点を押さえ、短く伝える ・実態や理解度に合わせた伝え方をする	□
適切な指導の言葉掛け	・本人が自分で気付くような言葉掛けをする ・場面や状況を見て言葉掛けする （同じことを何度も言わない、重ねて言わないようにする）	□
○○を促す問い掛け （気付き、思考、思いを引き出す）	・待つ（一言目が出るまで待ってみる） ・本人の考え、言葉を引き出す（ヒント、答えをすぐに言わない）	□
評価・称賛	・評価、称賛の方法を工夫する ・具体的な評価、即時評価をする	□
職員間の連携 （支援方法・内容の共有も含む）	・ポイントを押さえた引き継ぎ、情報共有をする ・物事の大小関係なく、素早く報告・連絡・相談する	□

■物的支援

手立て	指導ポイント	ﾁｪｯｸ
時間・流れの提示（見通しをもたせる）	・時間を提示する（開始、終了時間） ・内容を提示する（どんな内容をやるかなど）	□
場面に合わせた掲示物の作成と掲示 （見本・写真の活用も含む）	・分かりやすさ、見やすさを考え、作成する ・見やすい場所へ掲示する（目線、動線、掲示の量など） ・見直しや更新を定期的に行う（掲示物の精選も含む）	□
ワークシートの活用	・シンプルで分かりやすい内容にする ・様式の表現方法を考える（文章・○×・キーワードなど）	□
人や物の配置と環境の設定（事前）	・座席の配置やレイアウトを考える（生徒・職員） ・用具、道具の準備や配置を工夫する ・流れや役割分担などを職員間で事前に共有する	□
子どもが○○する場面設定	・ロールモデル、見本（生徒の活用） ・得意を生かした役割分担をする	□
くり返しの場面の設定	・定着するまで指導、取組等を継続する	□
事前準備と共有	・職員間で共有する ・複数人で確認する	□

研究発表会＜記録＞

令和７年度　研究発表会　開催要項

秋田県立能代支援学校

１　開催主旨

本校では、児童生徒一人一人の学習状況を的確に捉え、学習指導要領に示す資質・能力を確実に育むための授業と、12 年間の学びの連続性を保障する教育課程の在り方を検討しています。

本研究会では、研究１年目の取組から、各教科等、道徳科、各教科等合わせた指導等、複数の授業実践の研究報告を行います。本校で作成した「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」や今般作成した「標準年間指導計画」の紹介を交えて、各教科等で育成を目指す資質・能力を確かに育む授業改善の要点について、協議を深めたいと考えています。

多くの皆様から御指導や御助言を賜りますよう、お願い申し上げます。

２　研究主題　　児童生徒の学びが「見える」授業づくり２
ー学びの連続性を踏まえたカリキュラム・マネジメントと「指導と評価の一体化」のシステムを活用してー　（１年次／２か年計画）

３　日　　時　　令和７年 12 月 19 日（金）午前９時 50 分から午後４時まで（受付９時 30 分から）

４　会　　場　　秋田県立能代支援学校
〒016-0005 秋田県能代市真壁地字トトメキ沢 135 番地
℡ 0185-55-0691　　https://noshiroshien.ed.jp

５　開催方法　　参集及びオンデマンド配信

６　対　　象　　全国の特別支援教育に携わる教員
・全国の特別支援学校
・秋田県内特別支援学校、能代・山本地区の小学校・中学校・高等学校

７　講演講師
独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部　上席総括研究員　丹野　哲也　氏

８　日 程 等

9:30～9:50	10:00～10:30	10:40～11:00	11:10～12:20	12:20～13:20	13:20～14:00	14:10～15:40	15:45～16:00
受付	開会行事 ・挨拶 ・研究概要説明 ・研究報告	授業見学	・実践発表 ・研究協議	昼食	ポスター セッション	全体講評・講演	閉会行事

令和７年度　秋田県立能代支援学校　研究発表会　＜概要＞

参加者　　来校による参加：１６名　　オンデマンド配信の視聴による参加：６５件

講評・講演

演　題　「育成を目指す資質・能力と授業デザイン
～ 中教審の動向を踏まえて ～ 」

講　師　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部　上席総括研究員　　丹野　哲也　　氏

実践発表

日常生活の指導　小学部１・２年　「朝の活動・朝の会」
授業者：渡部大樹、大髙聡美、中川朋美

生活科　　小学部５年　　「調べよう～ゴムのひみつ～」
授業者：田村夏菜、黒木良介、杉森利津子

社会科　　高等部３年　　「我が国の地理」
授業者：大山崇彦

研究協議会

協議テーマ　　「知的障害の特性に応じた各教科等の見方・考え方を働かせた授業づくり
及び学びの連続性を踏まえた資質・能力の育成を図る指導計画の在り方」

ポスター発表

番号	教科	学部	発表テーマ	発表者
1	生活科	小学部	地域の特産物から学ぶ社会の仕組みと公共施設	嶽石　　涼
2	国語科	小学部	みて・きいて・やってみよう ～おべんとうばす　しゅっぱつ！～	菊地　直枝
3	国語科	高等部	好きな本の魅力を伝えよう ～【能代版】ビブリオバトルに挑戦！～	成田　彩瑛
4	理　科	中学部	植物の栽培と観察 ～育てて気付く！比べて分かる！植物の成長～	諏訪　寿昭
5	体育科	小学部	安心・意欲・協働を育む体育授業のデザイン ～ピン倒しボールゲームの実践から～	大髙　聡美
6	保健体育科	高等部	運動やスポーツの関わり方を広げる体育理論の授業づくり	市川　　尭
7	道徳科	高等部	知的障害特別支援学校における道徳科の授業づくり	堀江奈美子 鈴木　亜希
8	福祉科	高等部	介護の基本を体験から学ぶ ～移動と移乗と言葉掛け～	佐藤　　尊
9	職業科	高等部	作業学習清掃ビルクリーニングにおける基本的な技能や態度を主体的・共同的に学ぶ授業づくり	今井　　理
10	寄宿舎研究		寄宿舎における参加と学びを促すための指導方法の実践	髙橋　雅俊

講演・講評　＜助言の要点＞

□研究テーマ

・能代支援学校の教育目標を具体化していくために校内の研究が行われている。研究主題の「指導と評価の一体化」は、評価のための評価ではなく、指導あっての評価で、指導と評価の一体化が大事ということを表している。どのように具体化していけばいいのかというところがひとつの研究テーマの柱。研究主題を達成するための目的も目指す教師像ともつながっている。

□授業づくりの仕組み

・授業をよくしていく仕組みづくりを、能代支援学校ではシステム化している。関係法令・学習指導要領があって、学校の教育目標、そして年間指導計画がある。今年度は、年間指導計画のベースになるもの（「標準年間指導計画」）を「案」から正案化していく取組が進められている。また、個別の指導計画を支える「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」、さらに、「能代スタンダード」を授業づくりの重要なツールとして位置付け、新しく来た先生でも具体的なヒントを得られる体制が整えられており、いろいろな学校で参考になる。学習指導案は、授業を実施した後の評価や反省を年間指導計画に反映させていくというサイクルを意識し、年間指導計画と「個別の指導計画」を核として教育課程を編成している点は、特別支援学校の授業づくりの肝を押さえた取組である。

□年間指導計画

・子どもたち一人一人の実態を踏まえて、年間指導計画が作成されている。年間指導計画をベースにしながら、さらに子どもたち一人一人の実態等に応じて個別の指導計画で具体化していくという手続きが特別支援学校の専門性である。現時点では、小学校、中学校、高等学校ではこの個別の指導計画を作成することまでは義務化されていないが、特別支援学校は、この個別の指導計画を作成しなくてはいけない。一人一人の実態に応じた丁寧な具体的な指導をしていくことが特別支援教育であり、その考え方が１時間ごとの授業に反映されていく。

□教育課程

・子どもたちがどのような場面で学習していくのかが指導の形態に表れる。教科別の指導で行う方がよいのか、各教科を合わせた指導で行った方がよいのか、それぞれの特徴を捉えて、そのよさを踏まえた効果的な指導の形態を工夫することが重要である。
・生活単元学習の中でやりきれなかった教科の深まりを、教科別の指導で行う。あるいは逆もある。教科別の学習で学んだことを、生活単元学習の中で応用、活用させていくというような変換を工夫していくことが教育課程の中でできる。

□指導と評価の一体化（評価場面の焦点化）

・指導案を作る段階で評価する場面を焦点化していくとよい。私たちは、学習したことを全て評価しようと思ってしまうが、その学習、あるいは単元の中で、どの教科の何をねらっていくのかということが明確になっていれば、評価する場面も一緒に精選される。評価場面を先に焦点化してしまうと、評価疲れにならない。

□授業デザイン

・「授業デザイン」とは、ゴールを明確にし、クリエイティブに授業をつくっていくことである。デザインを考えるとき、「こう作りたい」という目標に向けて色々組み立てていく。授業において、単元を通して子どもたちが身に付けていく資質・能力を明確にして授業をつくっていくことが大切である。

□授業デザインの視点

視点１：問いに気付く

先生方が問いを投げ掛けることは、もちろん重要である。まずは、問いそのものに子どもたちが気付くこと、そして、その問いを自分なりに解決しようとする姿勢が育つことが大切である。子どもたちが解決へ向かう過程では、必要に応じて多様なヒントを提示し、思考を支えることが求められる。その際、思考ツールを活用することで、これまで見えにく

かった考えの流れや関係性が「見える化」されることが、子どもたちの学習を深める上で、非常に有効である。

視点２：学び方のつながり
学習の内容のつながりや学び方、つまり学習プロセスがどのように構成されているかを共有しながら授業をつくっていくことで、前の単元で身に付けた学び方を次の単元でも活かせるようになっていく。

視点３：多様なアプローチ
いろいろな実態の子どもたちが力を合わせて学んでいくからこそ、多様なアプローチがあってよい。Ａさんに有効であった方法が、ＢさんやＣさんにも同じように有効とは限らない。一人一人の学び方は異なるが、目指す方向は共通している。多様な学び方ややり方があるというところを大事にしていく。これは特別支援学校の教育に一番期待されているところである。目指すべき資質・能力は同じでありながら、その到達にはいろいろな道があるということをおさえておきたい。

□授業の位置付け
・授業は、学校の教育目標を達成するために、法律に基づいて定められた時間的な基準がある。この基準のもと、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容に基づいて行われる教育活動である。１回45分あるいは50分の１単位の授業というのは、単元計画の中の１単位時間であることが大事である。単元を通してどのような資質・能力を子どもたちが身に付けていくのかを明確にした上で、授業は、単元目標を達成するための１時間であるといった見方が大事になる。

□「学習」と「学び」の違い
・「学習」は所定の時間に所定の内容を習得する活動であり、授業の中で学ぶことである。「学び」は、学習のみならず、子どもたちの成長について、子どもたち自身が実感を伴い、生涯にわたる生活に結び付いていくことと意味付けされる。この生涯にわたる生活に結び付くというところが、深い学びと関係がある。

□各教科の「見方・考え方」
・教科のフィルターを通すことで、広範囲な生活にかかる様々な事象や出来事について、学びが焦点化・深化していく。事象の背景に気付くことが子どもたちの学びの深まりにつながっていく。知識の概念的理解や本質的な共通点や違いに気付くことで学びが深まる。教科のフィルターを通すと、学びによりシャープにアプローチできる。

□見方・考え方を働かせる「問い」
・言語指示で「では考えてみましょう」は、非常に抽象的で、何をどうやって考えていったらいいのかが分からない。「リボンの端を揃えて、リボンの長さを比べてみましょう」など、具体的に、その子どもの理解に合わせながら指示を出すことで、理解が深まっていく。また、逆に「何と何を比べてみましょう」と言うだけで、子どもたちが学習に入っていけるようになる。抽象と具体を相互に交換していくということは非常に大事なことである。

□深い学び
・いろいろな学びの中で、教科等に関わる見方や考え方を働かせてより深く考え、学んでいくことが深い学びだということが学習指導要領の解説に書かれている。それが子どもたち一人一人の生涯にわたって、生活につながる学びになっていく。資質・能力を英語ではコンピテンシーといい、この資質・能力につながるという捉え方をしている。ここで大事にしてもらいたいのは、学びというのは一人一人の人生を豊かにするものである。私たちも学ぶことが楽しいと思っているからこそ子どもたちに教えることができる。子どもたちに有意義な学びをしてもらうために、どうやって教えたらよいのかなということを真剣に考えている。学び自体は、浅いも深いもない。とても尊い文化的な営みで、 いろんな学びがあるが、より深く考えられるような学びが求められている。

・子どもたちに何かを身に付けさせるというのではなくて、子どもたちが自ら学んでいけるような環境づくりや支えをすることが大事なことである。考えること自体は学習者である子どもたち自身にしかできない。いかに子どもたちが考えられるようにしていくかというところが、授業を作っていく上での最大のポイントである。

□次期学習指導要領の審議動向より

・「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」、これらを三位一体で具体化していくことが次期学習指導要領のコンセプトである。深い学びの部分をどのように考えていくかというところが、能代支援学校でこれまで取り組んできた研究成果を大いに生かせる内容である。

・好きを育み、得意を伸ばすという部分と、当事者意識をもって自分の意見を形成し、対話と合意ができるという、この二つを大事にしながら、各教科との学びを進めていく。この好きを育み、得意を伸ばすについて、私たちは子どもたちが苦手な部分や様々な困難さの部分に着目して指導をしている。それはそれで大事なことだが、子どもたちの得意な部分やよいところ、興味・関心を最大限に伸ばしていくということも大事なことである。そのような授業が展開できるように、学びをデザインする先生方の専門性が大事になるということが方向性として示されている。先生方は、子どもたちの「学び」をデザインするという高度専門職ということである。

・「学び」をデザインするときに、子どもたち一人一人が学びに向かう力をどのように捉えていくのか、現行の学習指導要領には、「学びに向かう力や人間性等」について、目標には載っているが、内容には一部の教科を除いて載っていないので、非常に分かりにくい。また、学習評価についてもこの学びに向かう力の部分だけは非常に手続きが複雑である。「学びに向かう力と人間性等」の今後の整理のイメージをどのようにしていくのかが議論されている。この中で、「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」が学び始めるときの原動力として重要だと指摘されている。「初発の思考や行動を起こす力」とは、学習の中でさまざまな他者との対話や共同がある。先生方とのやり取りや子どもたち同士のやり取りともうひとつ重要なことは、子どもたちと学習の対象となる題材との対話である。目指すところは、共生社会や持続可能な社会、能代支援学校のキーワードになっているウェルビーイング、一人一人のアイデンティティ、学び続ける意欲や主体的に学ぶことを表したエージェンシーと関連している。この学びを方向付けたり、方向を調整したりすることが目標を立て直す力で、真ん中に位置付けられている。いわゆるメタ認知である。自分が、今どのように学習しているのかということを第三者の目線で見られるようになっていくことが大事だと言われている。

・現行の学習指導要領をさらに充実させていく方向で検討されている。現行の学習指導要領に基づいた実践、すなわち能代支援学校で取り組んでいることを、しっかりと着実に充実させていくことで次期の学習指導要領に対しても全然慌てることはない。

小学部１・２年　日常生活の指導　学習指導案

日　時　令和７年10月15日（月）８：45〜９：30
場　所　小学部１・２年教室　児童数　６名
授業者　渡部大樹（Ｔ１）大髙聡美（Ｔ２）
　　中川朋美（Ｔ３）

１　単元名　朝の活動・朝の会をしよう（10・11月）

２　単元の概要

朝の活動（荷物整理や着替え、係活動、課題学習）を通して、児童が基本的生活習慣を身に付け、一連の流れを自立して行えるようにすることを目指す。また、係活動では、自分の役割を理解し、集団の中で主体的に活動に取り組もうとする姿勢を育む。８・９月は、これまでの活動の定着を踏まえ、「日課・予定」への理解を深めることに指導の重点を置き、児童が主体的に取り組めるようにステップアップを図った。10・11月は、「人との関わり」を主な指導目標とし、これまでの課題学習や係活動の内容を発展させながら身近な人への関わり方や関係作りを促す指導を行う。

３　単元の計画

（１）単元の目標（本単元で扱う主たる各教科の内容のまとまり）

教科・段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
生活１（３名）	基本的生活習慣	持ち物の整理、自分の服や靴など自分の使った物の整理や、決められた場所に置くなど身の回りの整理に関する初歩的な知識や技能を身に付ける。	身の回りの整理に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現する。	身の回りの整理に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとする。
生活２（３名）		衣服の前後が分かる、着脱後の簡単な確認をするなど、身なりについて自分で気付くことができる。	衣服等の着脱に関する基本的な処理と確認の仕方が分かり、行い、できたことなどを表現する。	衣服の着脱に関わる基本的な活動に自ら取り組んでいる。
生活１（４名）	日課・予定	簡単な日課に関心をもつ。	簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動し、できたことなどを表現する。	日課に沿って行動しようとする。
生活２（２名）		身近な日課や予定が分かり、必要に応じて教師の支援を受けながら日課に沿って行動する。	教師と一緒に身近な日課にそって行動し、感じたことを表現する。	絵や写真カードを手掛かりにして見通しをもち、日課に取り組む。
生活１（４名）	人との関わり	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる。	簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしたりする。	積極的に要求したり、挨拶したりしようとする。
生活２（２名）		身近な教師や友達に自分から挨拶をしたり、見聞きしたことや経験したことを話したりできる。	要求や簡単なコメントを自分でできる手段を用いて伝えるなど、コミュニケーションをとろうとする。	積極的に挨拶し、簡単なコメントなどを話そうとする。
生活１（４名）	役割	いろいろな行事に参加し、集団に慣れ、集団の中での役割に気付く。	身の回りの集団に気付き、教師と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現する。	集団の中での役割を果たそうとする。
生活２（２名）		身近な集団活動で簡単な役割を果たす。	教師の援助を求めながら身近な集団活動に参加し、簡単な係や役割を果たし、感じたことを表現する。	学級や学年、異年齢集団等における役割に自ら取り組もうとする。
国語１（３名）	言葉の特徴や使い方（聞くこと・話すこと）	身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じる。	身近な人からの話し掛けに注目し、応じる。	身近な人に注目し、話し掛けに答えようとするなど、人と関わろうとする。
国語２（２名）		身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が気持ちや要求を表していることを感じる。	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をする。	身近な人の話し掛けや会話などに注目し、指示に応じた行動をとろうとする。
国語３（１名）		姿勢や口形に気を付けて話す。	相手に伝わるよう、発声や声の大きさに気を付ける。	正しい姿勢や明瞭に発音すること、相手との距離や場面に応じた声の大きさなどに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。

（２）個別の手立て（配慮事項・支援内容）

児童名	段階	配慮事項・支援内容
A	1	・自分から挨拶をすることが分かるよう、教室入り口に挨拶している様子のイラストを掲示する。 ・安心して学習に取り組めるように、本児と一緒に日課の確認をしたり、手順表を準備したりする。
B	1	・本児が絵カードを使って、自分の行動を教師に伝えてから活動に取り組めるよう、本児と一緒に絵カードを用いたやりとりを繰り返しながら定着を図る。 ・自主的に活動に向かえるよう、物の配置を明確にしたり、次の活動場所に教師が立って示したりするなど、視覚的・身体的な手掛かりを用いる。
C	2	・自分から挨拶をすることが分かるよう、教室入り口に挨拶している様子のイラストを掲示する。 ・自信をもって自分から活動に取り組めるよう、活動ごとに称賛の言葉掛けを行う。
D	2	・声の大きさや話し方が意識できるよう、友達の手本になる機会を設けたり、友達の前で発表したりする活動を設定したりする。 ・落ち着いて朝の活動に取り組めるよう、活動場所を静かに活動できる場所（学習室）にする。
E	1	・挨拶や依頼、報告の仕方が分かるよう、話型を教卓に掲示し、一緒に確認する。 ・朝の活動に気持ちがのらないときは、本児の気持ちを聞き取ったり、活動の順番を変える提案をしたりする。
F	1	・返事や挨拶の仕方をイラストと文字で掲示する。 ・自分から朝の活動に取り組めるよう、机の配置や本児の動線を工夫する。

（３）指導計画（総時数20時間）

小単元名・学習活動	時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
朝の活動・朝の会をしよう	20	
①　移動・挨拶	20	生活１（日課・予定）　生活１（人との関わり） 国語１（言葉の特徴や使い方）
②　荷物整理・検温・着替え・排せつ		生活１（基本的生活習慣）
③　係活動		生活１、２（日課・予定）　生活１、２（人との関わり） 国語１、２（言葉の特徴や使い方）
④　朝の会 ・挨拶　・今日の日付 ・元気調べ・先生の話 ・朝の歌　・合言葉	本時 6/20	生活１、２（日課・予定） 生活１、２（人との関わり） ・呼名の返事 ・入退室の挨拶 ・教師や友達への自主的な挨拶 ・相手に伝わる話し方 国語１、２、３（言葉の特徴や使い方）
⑤　ラジオ体操		体育１、２（体つくり運動）　自立活動（身体の動き）
⑥　課題学習（ぐんぐんタイム）		生活１、２（役割）　生活１、２（日課・予定） 自立活動（心理的な安定、身体の動き）

（４）単元の評価規準

教科・段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
生活１（３名）	基本的生活習慣	持ち物の整理、自分の服や靴など自分の使った物の整理や、決められた場所に置くなど身の回りの整理に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	身の回りの整理に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの整理に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
生活２（３名）		衣服の前後が分かる、着脱後の簡単な確認をするなど、身なりについて自分で気付いている。	衣服等の着脱に関する基本的な処理と確認の仕方が分かり、行い、できたことなどを表現している。	衣服の着脱に関わる基本的な活動に自ら取り組もうとしている。
生活１（４名）	日課・予定	簡単な日課に関心をもっている。	簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動し、できたことなどを表現している。	日課に沿って行動しようとしている。
生活２（２名）		身近な日課や予定が分かり、必要に応じて教師の支援を受けながら日課に沿って行動している。	教師と一緒に身近な日課にそって行動し、感じたことを表現している。	絵や写真カードを手掛かりにして見通しをもち、日課に取り組もうとしている。
生活１（４名）	人との関わり	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができている	簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしたりしている。	積極的に要求したり、挨拶したりしようとしている。
生活２（２名）		身近な教師や友達に自分から挨拶をしたり、見聞きしたことや経験したことを話したりできている。	要求や簡単なコメントを自分でできる手段を用いて伝えるなど、コミュニケーションをとろうとしている。	積極的に挨拶し、簡単なコメントなどを話そうとしている。
生活１（４名）	役割	いろいろな行事に参加し、集団に慣れ、集団の中での役割に気付いている。	身の回りの集団に気付き、教師と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現している。	集団の中での役割を果たそうとしている。
生活２（２名）		身近な集団活動で簡単な役割を果たしている。	教師の援助を求めながら身近な集団活動に参加し、簡単な係や役割を果たし、感じたことを表現している。	学級や学年、異年齢集団等における役割に自ら取り組もうとしている。
国語１（３名）	言葉の特徴や使い方（聞くこと・話すこと）	身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じている。	身近な人からの話し掛けに注目し、応じている。	身近な人に注目し、話し掛けに答えようとするなど、人と関わろうとしている。
国語２（２名）		身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が気持ちや要求を表していることを感じている。	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をしている。	身近な人の話し掛けや会話などに注目し、指示に応じた行動をとろうとしている。
国語３（１名）		姿勢や口形に気を付けて話すことができる。	相手に伝わるよう、発声や声の大きさに気を付けている。	正しい姿勢や明瞭に発音すること、相手との距離や場面に応じた声の大きさなどに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。

４　本時の計画（指導計画　20 時間中の６時）

（１）本時の目標

生活１段階	・A、E、F：教師や友達に対して、言葉や身振りで挨拶や返事をする。 ・B：教師に絵カードを渡して、欲しいものややりたいことを教師に伝える。
生活２段階	・C：名前を呼ばれたら返事をして、教師に近付いてから話をする。 ・D：元気調べで、元気に返事をしたり友達の名前を呼んだりする。

（２）学習過程

時間（分）	学習活動	指導上の留意点 全体	指導上の留意点 個別
8：45（2）	1　靴を履き、教室に移動する。 ・靴の履き替え ・挨拶	・T1 は教室前方で全体の見守り、必要に応じて支援を行う。 ・挨拶を返すことができるよう、児童の近くで元気に挨拶をする。 ・T2 は教室後方から送り手となって T1 の方に移動するよう促したり、スケジュール表などに気付くよう言葉掛けをしたりする。 ・T3 は廊下で係活動やトイレ、学習室での活動を見守り、必要に応じて支援を行う。 ・教室移動の報告や物を借りるときの要求を伝えられるよう、話型やイラストを指さしたり、「どうやって伝えれば良いかな」などと問い掛けたりする。	B：次の活動が分かるよう、活動を表す写真を見せたり、言葉を掛けたりする。また、活動を覚えられるように、活動への移動の際は、T2 が送り手となり、T1 が受けてとなって支援する。 A：途中で活動を止めてしまった場合には、次の活動は何か問い掛けたり、手順表を指差したりする。 F：自分の活動が分かるよう、手順表を机に準備する。 F：集中して朝の準備ができるよう、活動の最後に楽しみなことを設定する。 B：　T2 と一緒に写真カード（トイレ、本、おもちゃ）を選び、T1 へ持って行くよう伝える。
8：47（13）	2　朝の活動①に取り組む。 ・荷物整理 ・検温 ・排せつ ・着替え ・係活動		
9：00（15）	3　朝の会をする。 ・挨拶 ・今日の日付 ・元気調べ ・今日の給食 ・今日の天気 ・先生の話 ・朝の歌 ・合言葉	・朝の会の始まる時間が分かるよう、時間になったら音楽を流す。 ・自分の座る位置が分かるよう、床に印を付けておく。 ・朝の会の流れが分かるよう、活動内容を提示しておく。 ・返事や挨拶を元気にすることを意識できるよう、黒板にイラストを掲示する。 ・呼名をしたときに、返事や応答があるまで待つ姿勢をとる。難しい場合は、T2 が手本を示す。 ・教師からの話し掛けに注目したり応じて答えたりできるよう、先生の話で具体物を提示したりクイズをしたりする。	D：時間を意識して行動できるよう、ラジカセで音楽を流す係を設定する。時間（９時）が分かるよう、デジタル時計を見える位置に置いておく。 C：自信をもって発表できるよう、天気調べが終わったら教師に報告し、発表の仕方を確認する時間を設ける。 E：自信をもって今日の日付を発表できるよう、話す内容を文字にする。 D：姿勢や声の大きさに気を付けて発表できるよう、T1 は教室後方から見守り、相槌や称賛をする。
9：15（10）	4　朝の活動②（ぐんぐんタイム）に取り組む。 教室 ①　みんなでラジオ体操 ②　個別課題 A　階段掃除 B　健康観察簿 C　体幹運動 E　体幹運動 F　体幹運動 D　一日の予定の確認	・自分の活動が分かるよう、モニターでそれぞれの活動場所を示す。 ・ラジオ体操での動きを１つ取り上げ、体の動かし方や体の部位の名称を確認する時間を設ける。 ・ラジオ体操後、T3 は学習室でDと一日の予定を確認したり、家での過ごし方などについて振り返りをしたりする。 ・自分の頑張りを振り返られるよう、がんばったねシールを貼る時間を設ける。	A：見通しをもって活動に向かえるよう、活動内容を掲示したり、本児の好きな活動を設定したりする。 D：安心して過ごせるように、一日の予定や学習活動を一緒に確認したり、家での過ごし方や約束などについて話したりする機会をもつ。 C、E、F：体の使い方が分かるよう、教師が見本を示したり、一緒に運動したりする。また、活動に気持ちが向かうよう、音楽を流す。
9：25（5）	5　次の活動の準備をし、教室移動をする。	・次時の学習の準備をすることが分かるよう、音楽を流す。	

朝の活動・朝の会
～日常生活の指導における生活科の資質・能力を計画的に育む授業づくり～

秋田県立能代支援学校　小学部１・２年担任
渡部大樹　大髙聡美　中川朋美　菊地直枝

発表の流れ

１．単元の概要

２．結果

３．考察

４．まとめ

※発表は、「朝の活動・朝の会をしよう（８・９月）」「朝の活動・朝の会をしよう（１０・１１月）」の実践を基にまとめました。

１．単元の概要　（１）対象と主な活動

・小１男子２人、小２男子３人、小２女子１人…計６人学級
・朝の活動を通して、基本的生活習慣を身に付け、
　一連の流れを自立して行えるように指導を行う。

・学習活動

〈朝の準備〉
・荷物整理
・検温
・着替え
・排せつ
・係活動

▷

〈朝の会〉
・朝の挨拶
・今日の日付
・元気調べ
・今日の給食
・今日の天気
・先生の話
・朝の歌、合い言葉

▷

〈課題学習〉
（ぐんぐんタイム）
・ラジオ体操

～個別課題～
・ダンス
・階段掃除
・健康観察簿を届ける
・教師とやりとり

１．単元の概要　（２）年間計画

・「朝の活動・朝の会をしよう」は１年間を通して、
　継続して指導を行う。

前期（４月～９月）
- 基本的生活習慣
- 日課・予定

後期（１０月～３月）
- 人との関わり
- 役割
- 仕事・手伝い

1．単元の概要　（3）単元で育成を目指す資質・能力

教科・段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
生活１（３名）	基本的生活習慣	持ち物の整理、自分の服や靴など自分の使った物の整理や、決められた場所に置くなど身の回りの整理に関する初歩的な知識や技能を身に付ける。	身の回りの整理に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現する。	身の回りの整理に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとする。
生活２（３名）		衣服の前後が分かる、着脱後の簡単な確認をするなど、身なりについて自分で気付くことができる。	衣服等の着脱に関する基本的な処理と確認の仕方が分かり行い、できたことなどを表現する。	衣服の着脱に関わる基本的な活動に自ら取り組んでいる。
生活１（４名）	８・９月 日課・予定	簡単な日課に関心をもつ。	簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動し、できたことなどを表現する。	日課に沿って行動しようとする。
生活２（２名）		身近な日課や予定が分かり、必要に応じて教師の支援を受けながら日課に沿って行動する。	教師と一緒に身近な日課にそって行動し、感じたことを表現する。	絵や写真カードを手掛かりにして見通しをもち、日課に取り組む。
生活１（４名）	１０・１１月 人との関わり	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる	簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしたりする。	積極的に要求したり、挨拶したりしようとする。
生活２（２名）		身近な教師や友達に自分から挨拶をしたり、見聞きしたことや経験したことを話したりできる。	要求や簡単なコメントを自分でできる手段を用いて伝えるなどコミュニケーションをとろうとする。	積極的に挨拶し、簡単なコメントなどを話そうとする。
生活１（４名）	役割	いろいろな行事に参加し、集団に慣れ、集団の中での役割に気付く。	身の回りの集団に気付き、教師と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現する。	集団の中での役割を果たそうとする。
生活２（２名）		身近な集団活動で簡単な役割を果たす。	教師の援助を求めながら身近な集団活動に参加し、簡単な係や役割を果たし、感じたことを表現する。	学級や学年、異年齢集団等における役割に自ら取り組もうとする。
国語１（３名）	言葉の特徴や使い方（聞くこと・話すこと）	身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じる。	身近な人からの話し掛けに注目し、応じる。	身近な人に注目し、話し掛けに答えようとするなど、人と関わろうとする。
国語２（２名）		身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が気持ちや要求を表していることを感じる。	簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をする。	身近な人の話し掛けや会話などに注目し、指示に応じた行動をとろうとする。
国語３（１名）		姿勢や口形に気を付けて話す。	相手に伝わるよう、発声や声の大きさに気を付ける。	正しい姿勢や明瞭に発音すること、相手との距離や場面に応じた声の大きさなどに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。

1．実践の概要　（4）単元計画

8月・9月

小単元名・学習活動	時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
①移動・挨拶 ②荷物整理・検温・着替え・排泄 ③係活動 ④朝の会 ・挨拶　・今日の日付 ・元気調べ　・先生の話 ・朝の歌　・合言葉 ⑤課題学習 （ぐんぐんタイム）	14	生活１・２「基本的生活習慣」 生活１・２「人との関わり」 国語１・２・３「言葉の特徴や使い方」 自立活動「心理的な安定、身体の動き」 ～主な指導内容～ 生活１・２「日課・予定」
	(4)	・朝の活動の流れを覚える
	(3)	・係活動のやり方を知る
	(3)	・自分から次の活動に取り組む
	(4)	・一人で朝の活動を行う

１０月・１１月

時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
20	生活１・２「基本的生活習慣」 生活１・２「日課・予定」 生活１・２「役割」 国語１・２・３「言葉の特徴や使い方」 自立活動「心理的な安定、身体の動き」 ～主な指導内容～ 生活１・２「人との関わり」
(6)	・呼名の返事をする
(6)	・入退室で挨拶をする
(4)	・教師や友達への自主的な挨拶をする
(4)	・相手に伝わる話し方をする

2．結果　（1）指導上の工夫（8月・9月）

※主な指導内容「日課・予定」

教科・段階	内容のまとまり	知識　及び　技能
生活１	日課・予定	簡単な日課に関心をもつ。
生活２		身近な日課や予定が分かり、必要に応じて教師の支援を受けながら日課に沿って行動する。

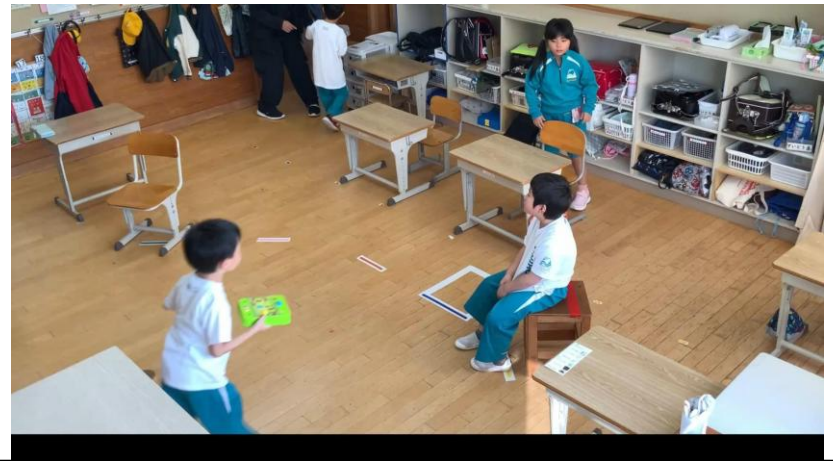
・手順表や音楽などの手掛かりの準備

・意欲的に取り組める係活動の設定

・教師の役割分担

（全体指示、児童の支援、廊下からの見守り）

2．結果　（2）学習の様子（8月・9月）



２．結果　（２）学習の様子（８月・９月）

２．結果　（３）児童の変容（８月・９月）

	実践前	教師の支援・環境設定	児童の変容
A	・朝の会が始まるまで時間いっぱい掛けて、荷物準備・着替えを行っていた。	・朝の会の開始時刻を早める。 ・活動の最後に好きな活動を設定する。 ・「係活動→好きな活動」をイラストで示す。	・朝の準備は１０分程度で済ますようになった。 ・好きな活動（読書やブロック）を励みに係活動に取り組むようになった。
B	・活動の流れが分からず、教師と一緒に朝の活動を行っていた。	・１対１対応で物の収納を行えるよう棚を準備する。 ・T2が送り手となって、T1のもとへ物や写真カードを持っていくよう促す。	・朝の活動の一連の流れを覚え、具体物を見ることで自分から次の活動に移るようになった。 ・朝の準備や着替えで、できることを一人で行ったり、教師に援助を求めたりすることができた。
C	・係活動を忘れたり、次の活動を教師に確認したりしていた。	・下駄箱に係活動をすることが分かる掲示を貼る。 ・手順表を机に準備する。 ・自分から行動できたときは大いに称賛する。	・忘れることなく毎日係活動に取り組んだ。 ・手順表を見ることで、自信をもって素早く朝の準備ができた。慣れてくると、手順表が必要なくなった。
D	・周りの様子を気にし、途中で活動を止めたり、暴言を吐いたりしていた。	・活動場所を別室にする。 ・自信をもって行える係活動を設定する。 ・朝の会の開始を知らせる音楽を掛ける係を設定する。	・一人で落ち着いて朝の日課に取り組んだ。 ・給食の献立を書く係活動に進んで取り組んだり、教師の手伝いをしたりするようになった。
E	・気持ちが乗らない活動（着替え、排泄）で活動が滞っていた。 ・遊び（ブロックやおままごと）をしたい気持ちが強く、活動にむかえないことがあった。	・机に手順表を貼る。 ・教師と一緒に活動を繰り返し行う。 ・排泄や着替えのイラストを黒板に掲示する。	・手順表をきっかけに、すぐに次の活動に移れた ・一人で着替えやトイレができるようになった。 ・係活動や好きな活動（ブロック）を楽しみに、朝の準備を１５分程度で済ませることができた
F	・他の児童の様子や今日の日課が気になり、活動から逸脱していた。	・机に手順表を貼る。 ・机をT1の近くに配置し、言葉掛けをする。 ・今日の日課を掲示する係活動を設定する。	・係活動を楽しみに、荷物整理や着替えを素早く終えられるようになった。 ・他の児童や今日の日課を気にすることはあるがすぐに自分の活動に戻れるようになった。 ・手順表の「トイレに行く」を見て、自分から行く、行かないを選択した。

２．結果　（４）評価（８月・９月）

※観点別学習評価表（学びの履歴シート）より一部抜粋

児童Ｆ

第1段階	日課・予定	簡単な日課に関心をもっている。	◎		簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って動き、できたことなどを表現している。	◎	日課に沿って動こうとしている。	◎

児童Ｃ

第2段階	日課・予定	身近な日課・予定が分かり、必要に応じて教師の支援を受けながら日課に沿って動できる。	◎		教師と一緒に身近な日課をそって動き、感じたことを表現している。	◎	絵・写真カードを手掛かりにして見通しをもち、日課に取組んでいる。	◎

「日課・予定」は概ね達成された

１０・１１月では、「人との関わり」に指導の重点を置く

２．結果　（５）指導上の工夫（１０月・１１月）

※主な指導内容「人との関わり」

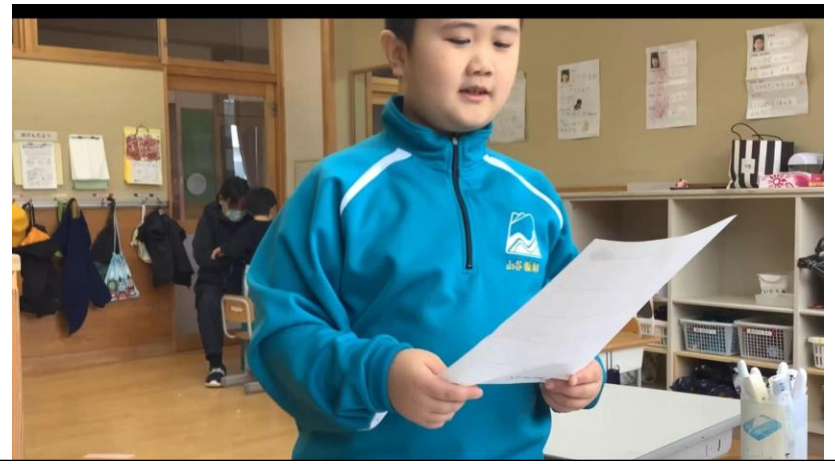
教科・段階	内容のまとまり	知識　及び　技能
生活１	人との関わり	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる。
生活２		身近な教師や友達に自分から挨拶したり、見聞きしたことや経験したことを話したりできる。

- 頑張るポイントを伝える、称賛する
- 児童からの発信を支える手立て
- 教師が見本を示す（挨拶・報告）
- 教師や友達とのやりとりの機会の設定

２．結果　（６）学習の様子（１０月･１１月）

２．結果　（６）学習の様子（１０月･１１月）

２．結果　（６）学習の様子（１０月･１１月）



２．結果　（７）児童の変容（１０月･１１月）

	実践前	教師の支援･環境設定	児童の変容
A	･友達に同じことを繰り返し伝えたり、教師や友達に「静かに」と大きな声で言ったりする。 ･教師からの挨拶に返答する。	･適切な伝え方で言い換え、復唱を促す。 ･教室入口に挨拶をするイラストを掲示する。	･教室に入ってきた際に、自分から挨拶するようになった。
B	･手を合わせることで、「ください」を教師に伝えていた。	･本児の好きな物の写真カードを準備し、写真カードを持って「ください」と伝える場面を繰り返し設定する。	･いくつかの写真カードの中から、「トイレ」や借りたいおもちゃの写真を選んで、自分から教師に手渡すようになった。好きな物やトイレの写真カードを選んで、教師に渡して気持ちを伝えられるようになった。
C	･話したり返事したりするときの声が小さいことが多い。	･教卓に話型を掲示する。 ･声のものさしを掲示する。 ･伝わりやすい声で話すことができたときは、称賛する。	･はきはきと教師に報告することができた。 ･教室に入る際に、声の大きさを意識して挨拶できた。
D	･友達の名前を読んだり、友達と一緒に活動したりするのが難しい。	･自信をもって行える係活動を設定する。 ･教師や友達と一緒に行う活動を設定する。	･教室に入る際に、相手に伝わる声の大きさを意識して挨拶するようになった。
E	･呼名に対する返事がない、または声が小さい。	･教師が返事の手本を示す。 ･即時評価をする。	･朝の会で名前を呼ばれたときに、みんなに聞こえる声で返事をした。 ･友達の様子を見て思い出し、教室に入る際に挨拶できるようになった。
F	･数回名前を呼ばれても応答しないで、自分の活動を続けることが多い。 ･呼名の返事の発声が曖昧である。	･教師が返事の手本を示す。 ･即時評価をする。 ･返事や挨拶の文字とイラストのカードを準備する。	･名前を呼ばれたときに、すぐに返事をすることが増えた。 ･発声をして依頼や要求をすることが増えた。

2．結果　（8）評価（１０月・１１月）

※観点別学習評価表（学びの履歴シート）より一部抜粋

児童Ｅ

第1段階	人との関わり	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる。	◎		簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしている。	◎	積極的に要求したり、挨拶したりしようとしている。	◎

児童Ａ

第2段階	人との関わり	身近な教師や友達に自分から挨拶をしたり、見聞きしたことや経験したことを話したりできる。（絵カードやタブレット等の代替手段の活用を含む）	◎		要求や簡単なコメントを自分でできる手段を用いて伝えるなど、コミュニケーションをとろうとしている。	◎	積極的に挨拶し、簡単なコメントなどを話そうとしている。	◎

「人との関わり」は概ね達成された

3．考察

生活科「日課・予定」「人との関わり」を扱う授業づくりで有効と考えられること

①めあての設定

②指導内容を絞った、段階的な指導

③定期的な指導の見直し

生活科の見方・考え方

※子どもたちの日々の生活と結びつく、子どもにとって必要性がある活動を設定する。

※具体的な活動・体験の機会を繰り返し設けていく。

4．まとめ

①日常生活の指導　計画的な指導の重要性について

指導内容を絞って、段階的かつ計画的に指導することで、児童の資質・能力の育成につながる

４・５・６・７月	８・９月	１０・１１月	１２・１月	２・３月
基本的生活習慣	基本的生活習慣	基本的生活習慣	基本的生活習慣	基本的生活習慣
	日課・予定	日課・予定	日課・予定	日課・予定
		人との関わり	人との関わり	人との関わり
			役割	役割
				仕事・手伝い

4．まとめ

②年間指導計画の見直しについて

・育成を目指す具体的な目標・活動を盛り込む
・適切な時数を配置する

③日常生活の指導における「めあて」と評価の有効性

・児童の意欲向上と、指導内容の明確化
※めあての伝え方、評価の仕方、実態による有効性の差　要検討

小学部５年　生活科　学習指導案

日　時　令和７年11月10日（月）10：40～11：25
場　所　小学部５年教室、小学部プレイルーム　児童数　６名
授業者　田村夏菜（Ｔ１）黒木良介（Ｔ２）杉森利津子（Ｔ３）

１　単元名　しらべよう～ゴムのひみつ～

２　単元の概要

予想を立てる、自分でおもちゃを動かす、気付いたことを表現するという活動を通して、ゴムの力について学習していく。ゴムの力や力の大きさの違いに注目し、試しておもちゃを動かしたり、面白さや気付いたことを表現したりする活動を通して、自分が試したことでおもちゃの動き方が変わることに気付くことを期待する。

３　単元の計画

（１）単元の目標（本単元で扱う主たる各教科の内容のまとまり）

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1 （1名）	ものの仕組みと働き	風やゴムの力によって物が動く様子に関心をもつ。	風やゴムによって物が動くことに気付き、教師と一緒に他者に伝える。	風やゴムの力で物が動くことについて知ろうとする。
2 （1名）		風やゴムの力で物を動かすことができることに気付く。	空気の流れを視覚的に捉えるなどして、風やゴムの働きに気付き、それらを表現する。	風やゴムの働きに関心をもち、実験するなど自ら学習に取り組もうとする。
3 （4名）		風やゴムの力の大きさを変えると、物が動く様子が変わることに気付く。	風の力を利用して動く車のおもちゃなどを通して、風やゴムの大きさによる違いを調べ、気付いたことを表現する。	風やゴムの大きさによる違いに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。

（２）個別の手立て（配慮事項・支援内容）

児童名	段階	配慮事項・支援内容
A	2	・予想や試した結果を言葉で伝えることができるように、選択肢を提示したり手掛かりとなる記録を準備したりする。 ・自分で十分にゴムを使って動かしたり、おもちゃの動きの違いに注目したりすることができるように、活動グループを工夫する。 ・３段階を意識し友達の車の動かし方に注目を促したり、「強い・弱い」「大きい・小さい」などの言葉を意図的に使って比べたりする場面を設定する。
B	3	・自分なりの考えを言葉で伝えることができるように、予想する時間を設定したり、実験の様子を思い出すことができるように「強く引っ張ったらどうなったかな」と具体的に発問したりする。 ・自分で考えたことを試すことができるように、活動時間を設定する。
C	3	・言葉で伝えることができるように、選択肢を提示したり、文章で伝えることができるように、本人の発言を受け止めて正しい文章で返したりする。 ・ゴムの力に注目することができるように、「どのくらい引っ張りましたか？」等具体的にする。 ・めあてに沿った活動ができるように、注目してほしい視点をしぼって伝える。
D	1	・物が動く様子に気付くことができるように、教師が一緒に行ったり、意図的に本人の動きを待ったりする。 ・じっくり活動したり、おもちゃの動きに注目したりすることができるように、グルーピングや物の配置を配慮する。 ・手からおもちゃを離したら動いたことに気付くことができるように、本人の気付きに言葉を添える。
E	3	・一時間の学習に集中して取り組むことができるように、役割と活動を設定する。 ・伝えたいことが伝わる経験を積むことができるように身振りや文字カードを使ったり、ポイントとなる言葉の模倣ができるように、口元を見せて模倣を促したりする。
F	3	・前時の学びや活動で行ったことを思い出すことができるように、実物を提示する。 ・本人の気付きを言語化できるように、教師が言葉で返したり、やりとりしたりする。 ・自分で飛行機や車を動かしたり、動きの違いに注目したりすることができるように、活動グループを工夫する。

（３）指導計画（総時数６時間）

小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う指導内容
第一次	「調べよう～なんの力～」	1	
	・ひも、りぼん、ゴム等身近なもので試す。	（1）	・準備したおもちゃを動かすためには何が必要か知る。
第二次	「調べて伝えよう～ゴムの力～」	4	
	・飛行機で調べよう	（1）	・飛行機のゴムの力の大きさを変えると跳ぶ距離はどうなるか調べる。
	・コツを伝えよう	（1）	・もっと遠くに飛ばすためには、どうすれば良いか試す。 ・先生たちと一緒に飛行機を飛ばして、ゴムの力の大きさを変えると飛ぶ距離が変わることを伝える。
	・車で調べよう	（1）	・車のゴムの力の大きさを変えると、車の動く距離はどうなるか調べる。
	・コツをつかもう	（1） 本時	・ねらったところに車を止めるためには、どうすればよいか試す。 ・力の大きさを変えると動く距離が変わることを伝える。
第三次	「ゲーム会をしよう」	1 （1）	・ゴムを強く引っ張ったり、弱く引っ張ったりしてねらった場所に、車を止める。

（４）単元の評価規準

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
1 （１名）	ものの仕組みと働き	風やゴムの力によって物が動く様子に関心をもっている。	風やゴムによって物が動くことに気付き、教師と一緒に他者に伝えている。	風やゴムの力で物が動くことについて知ろうとしている。
2 （１名）		風やゴムの力で物を動かすことができることに気付いている。	空気の流れを視覚的に捉えるなどして、風やゴムの働きに気付き、それらを表現している。	風やゴムの働きに関心をもち、実験するなど自ら学習に取り組もうとしている。
3 （４名）		風やゴムの力の大きさを変えると、物が動く様子が変わることに気付いている。	風の力を利用して動く車のおもちゃなどを通して、風やゴムの大きさによる違いを調べ、気付いたことを表現している。	風やゴムの大きさによる違いに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。

４　本時の計画（指導計画　第３次　６時間中の５時）

（１）本時の目標

１段階	教師と一緒に車を引っ張り、自分から手を離したり動いた車を見たりする。
２段階	「強い」「弱い」が分かってゴムを引っ張り、結果を「遠い」「近い」という言葉で表現する。
３段階	シートのメモリや言葉を手掛かりにゴムを引っ張ってねらった場所に車を止める。

（２）学習過程

時間（分）	学習活動	指導上の留意点 全体	指導上の留意点 個別
10：40 (1)	1　あいさつをする		
10：41 (3)	2　学習内容を確認する。	・前時の学習内容を思い出すことができるように、ゴムで動く車を提示し振り返る。 ・本時はゴムを引っ張る力の大きさを変えて、車の動き方を調べることを伝える。	Ａ：何を使っておもちゃを動かしたか伝えることができるように、選択肢を提示する。
10：44 (3)	3　めあてを確認する。	めあて ねらった場所に止めるには、どのくらい引っ張ればよいだろう	
10：47 (8)	4　予想する。	・大きさを変えることが分かるように、目安を示したシートの選択肢を提示したり、距離を示した視覚的支援を提示したりする。	
10：55 (20)	5　グループごとに調べる。 Ａ：Ａ・Ｄ （小学部５年教室） Ｂ：Ｅ・Ｆ Ｃ：Ｂ・Ｃ （小学部プレイルーム）	・自分たちでゴムを使って車を動かす活動を設定する。ゴムの力がどのくらいだったか分かるように、補助シートを使う。 ・止める場所の目印を準備する。 ・グループごとに記録用紙を準備し、ゴムの力の大きさを変えると車がどうなったか記録できるようにする。 ・動きが変わったことに気付くことができるように、児童のつぶやきに共感したり、記録したりする。 ・実態によって調べ方を変え、補助シートや目印を使いながら、分かったことを伝えられるようにする。	Ｃ・Ｆ、：やることが分かり、ゴムの力の大きさに気付くことができるように、シートやコースに目印を付ける。 Ｅ：ゴムの力の大きさによって車の動きが変わることが分かるように、発問したり、行動に言葉を添えたりする。 Ｄ：自分で操作できるように、自発的な動きを待つ。 Ａ：ゴムを引っ張る力を変える目安となるシートを準備する。
11：15 (6)	6　分かったことを発表する。	・自分が気付いたこと、楽しかったことや分かったことを発表する場面を設定する。	
11：21 (3)	7　まとめる。	まとめ 青い場所に止めるには、弱く引っ張る。 赤い場所に止めるには、強く引っ張る。	
11：24 (1)	8　あいさつをする。	・児童の言葉でまとめることができるように、まとめは空欄にして提示する。 ・次回の学習を確認して挨拶をする。	

しらべよう ～ ゴムの力 ～

理科につながる
生活科の資質･能力を育む授業づくり

秋田県立能代支援学校　小学部　5年担任
田村　夏菜　　黒木　良介　　杉森利津子

実践発表の内容

1　単元の概要
2　結果
3　考察
4　まとめ

1　単元の概要（1）対象

- 対象
  小学部5年
- 教科名
  生活科
- 単元名
  しらべよう～ゴムのちから

（2）単元観

（3）単元で育成を目指す資質･能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1 （1名）	ものの仕組みと働き	風やゴムの力によって物が動く様子に関心をもつ。	風やゴムによって物が動くことに気付き、教師と一緒に他者に伝える。	風やゴムの力で物が動くことについて知ろうとする。
2 （1名）		風やゴムの力で物を動かすことができることに気付く。	空気の流れを視覚的に捉えるなどして、風やゴムの働きに気付き、それらを表現する。	風やゴムの働きに関心をもち、実験するなど自ら学習に取り組もうとする。
3 （4名）		風やゴムの力の大きさを変えると、物が動く様子が変わることに気付く。	風の力を利用して動く車のおもちゃなどを通して、風やゴムの大きさによる違いを調べ、気付いたことを表現する。	風やゴムの大きさによる違いに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。

(4) 教科の見方･考え方（抜粋）

・<u>生活に関わる見方</u>
自然などの対象と自分との関わり
・<u>生活に関わる考え方</u>
自分自身の生活において思いや願いを実現していく過程で思考すること
自分自身や自分の生活について考えていくこと
・<u>理科の見方（エネルギー）</u>
自然の事物･現象を主として量的･関係的な視点で捉える
・<u>理科の考え方</u>
比較する、関連付ける、条件を制御する、多面的に考える

(5)指導計画の立案

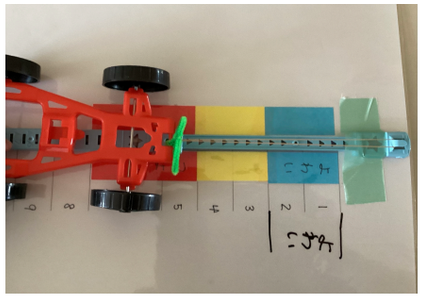
小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う指導内容
第一次	「調べよう～なんの力～」	1	
	・ひも、りぼん、ゴム等身近なもので試す。	（1）	・準備したおもちゃを動かすためには何が必要か知る。
第二次	「調べて伝えよう～ゴムの力～」	4	
	・飛行機で調べよう	（1）	・飛行機のゴムの力の大きさを変えると跳ぶ距離はどうなるか調べる。
	・コツを伝えよう	（1）	・もっと遠くに飛ばすためには、どうすれば良いか試す。 ・先生たちと一緒に飛行機を飛ばして、ゴムの力の大きさを変えると飛ぶ距離が変わることを伝える。
	・車で調べよう	（1）	・車のゴムの力の大きさを変えると、車の動く距離はどうなるか調べる。
	・コツをつかもう	（1）	・ねらったところに車を止めるためには、どうすればよいか試す。 ・力の大きさを変えると動く距離が変わることを伝える。
第三次	「ゲーム会をしよう」	1 （1） 本時	・ゴムを強く引っ張ったり、弱く引っ張ったりしてねらった場所に、車を止める。

(6)1時間の学習の中での工夫

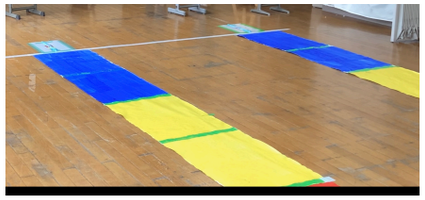
予想する
↓
実際におもちゃを動かして試す
↓
気付いたことを表現する

(7)教材の工夫

①ゴムの力の可視化



②進んだ距離の可視化



2 結果　(1)児童の変容

	実践の始めの様子	学習活動の工夫 教師の支援・手立て	変容
試す場面 A （2段階）	・ひものついた飛行機や車が動くと思うと予想していた。	・使う言葉の精選と気持ちの共感 ・十分に試す時間	・試して動かないと、ゴムの付いたおもちゃで試すようになった。動くと嬉しそうな表情で繰り返し動かした。 ・単元の最後の授業では、選択肢からゴムの車を選んだ。
試す場面 C （3段階）	・遠くに動かすことに夢中になっていた。	・予想する活動 ・やりとりの工夫 ・力の大きさと距離の可視化	・教師の質問に「青（近く）に止めたい」と話し、教師とのやりとりの中で「弱く引っ張る」と話してゴムを弱く引っ張り、ねらったところに止めた。
発表場面 F （3段階）	・〇〇が楽しかったですと発表していた。	・予想する活動 ・比べる活動 ・やりとりの工夫	・「ゴム強く引っ張ると・・・」や「弱く引っ張ると・・」と分かったことを発表するようになった。

(2)児童の様子

ゴムをもっと弱く引いたらどうなるだろう

(3)児童の様子

青に止めたいな

（4）評価 観点別学習評価表より一部抜粋

児童A

生活科	第２段階	ものの仕組みと働き	風やゴムの力で、物を動かすことができることに気付いている。	◎		空気の流れを視覚的に捉えるなどして、風やゴムの働きに気付き、それらを表現している。	◎	風やゴムの働きに関心をもち、実験するなど自ら学習に取り組もうととしている。	◎

児童 C

生活科	第３段階	ものの仕組みと働き	風やゴムの大きさを変えると、物が動く様子が変わることに気付いている。	◎		風の力を利用して動く車のおもちゃなどを通じて、風やゴムの大きさによる違いを調べ、気付いたことを表現している。	◎	風やゴムの大きさによる違いに関心をもち、積極的に学習に取り組もうととしている。	◎

概ね達成された

(5)身に付けた力

・ゴムを使うとおもちゃが動くことが分かる

・ゴムの力の大きさを変えるとおもちゃの動き方が変わることに気付く

・おもちゃを自ら動かし主体的に学習に向かう力

・気付いたことや考えたことを他者に伝える力

３ 考察

①育成を目指す資質･能力を確認する

②理科の見方･考え方を働かせるための活動の設定

③障害特性や発達段階に応じた支援や手立ての工夫

４ まとめ

理科につながる生活科（ものの仕組みと働き）の学習においては

・理科の見方･考え方を働かせることを想定した学習活動の設定

・予測→実験→考察という理科の活動を踏まえて学習を計画する

高等部３年　社会科①グループ　学習指導案

日　時　令和７年 11 月 13 日（木）9：45～10：35
場　所　高等部３年Ｃ組教室　　生徒数７名
授業者　大山崇彦（Ｔ１）

１　単元名　我が国の地理

２　単元の概要

世界における我が国の国土の位置、国土の構成などを、修学旅行で体験した関西大阪万博のパビリオンの国の位置を探したり、位置を説明したりする活動を通して関心を高めさせ理解する。また、我が国の気候や地形について、世界の様々な地域と比べたり、身近な地域や特徴的な地域を題材にしたりしながら学習することで、日本の特徴について、新たに興味をもち、自分の言葉で表現することができる。

この単元を通して、日本と世界の繋がりを感じると共に、今までより自分の国、日本がどのような国なのか興味をもつことができると考え、本単元を設定した。

３　単元の計画

（１）単元の目標（本単元で扱う主たる各教科の内容のまとまり）

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
2	我が国の国土の様子と国民生活、歴史	世界における我が国の国土の位置、国土の構成、領土の範囲など大まかに理解する。	世界の大陸と主な海洋、主な国の位置、海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して、我が国の国土の様子を捉え、その特色を考え、表現する。	世界における我が国の国土や領土について関心をもち、積極的に学習に取り組む。

（２）個別の手立て（配慮事項・支援内容）

生徒名	段階	配慮事項・支援内容
A	2	・日本の国土の特色に興味をもって学習に取り組むことができるように、世界の様々な国と対比させながら説明をする。
B	2	・学習した知識を使って、自分の言葉で表現できるように、得た知識を確認する機会の設定や、教師が説明文の例文を示したりする。
C	2	・教師の発問に対して思考する際、思考するべき焦点がずれないように、焦点を具体的にいくつか示す。
D	2	・学習した知識や技能が断片的な記憶にならないように、単元のなかで、定期的に振り返りの場面を設定する。
E	2	・学習した知識を活用して思考しやすいように、焦点を絞って発問したり、ワークシートを工夫して、焦点を絞って記入できるようにしたりする。
F	2	・自分の答えに自信をもって発言できるように、机間巡視の際に答えが正しいことや、良い気付きしていることを伝える。
G	2	・自分の意見を文字にして表出できるように、タブレット端末へ意見を記入できるようにしたり、発言を教師が板書や付箋紙に書き起こしたりする。

（３）指導計画（総時数５時間）

小単元名・学習活動	時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
世界から見た日本の位置	2 本時１／２	社会２（我が国の国土の様子と国民生活、歴史） 大陸名や海洋名、方角を理解し、活用しながら、世界地図における日本の位置や地形を知る。
		社会２（我が国の国土の様子と国民生活、歴史） 緯度や経度、赤道など、地図上に示された線の意味を理解し、活用しながら、世界地図上での日本の位置や領土の範囲を知る。また、緯度の高低差が気候に関係している事を知り、日本やその他の国の地形や自然環境、気候等にも興味をもつ。
日本の国土の様子	3	社会２（我が国の国土の様子と国民生活、歴史） 小単元「世界から見た日本の位置」で学習した知識を活用しながら、我が国の国土や領土の特徴を、世界の様々な地域と比べながら理解し表現する。
		社会２（我が国の国土の様子と国民生活、歴史） 日本の地形や自然環境の特徴を知り、前時で学習した我が国の国土や領土の特徴と関連させながら、気候や地形、自然環境に合わせた生活をしていることを理解し、自分の言葉で表現する。
		社会２（我が国の国土の様子と国民生活、歴史） これまで学習してきた内容をもとに、それぞれが感じた日本の魅力（地形、島国、自然環境など）についてタブレット端末を活用して調査し、ワークシートにまとめる。

（４）単元の評価規準

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
2	我が国の国土の様子と国民生活、歴史	世界における我が国の国土の位置、国土の構成、領土の範囲など大まかに理解している。	世界の大陸と主な海洋、主な国の位置、海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して、我が国の国土の様子を捉え、その特色を考え、表現している。	世界における我が国の国土や領土について関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。

４　本時の計画（指導計画　５時間中の１時）

（１）本時の目標

２段階	世界地図や地球儀を使って、示された国を探したり、国の位置を説明したりする活動を通して、大陸名や海洋名を知り、世界地図上における日本の位置を理解する。

（２）学習過程

時間（分）	学習活動	指導上の留意点 全体	指導上の留意点 個別
9:45 (2)	1　挨拶をする。 ・単元の学習内容を確認する。	・この単元で学習する内容を大まかに理解できるように、教師が示すスライドで確認をする。	
9:47 (8)	2　地球儀や世界地図を使って、示された国の位置を探す。	・興味をもって学習に取り組むことができるように、修学旅行で見学した万博で、生徒が見学したパビリオンの国を題材として扱う。	Ａ：興味をもって学習に取り組むことができるように、修学旅行の万博見学を話題にし、写真を示したり、見学したパビリオンやその特徴を質問したりする。
9:55 (1)	3　学習課題の確認をする。	万博で見学したパビリオンの国の位置を説明しよう	
9:56 (5)	4　大陸名、海洋名、方角について確認する。	・大陸名と海洋名の名前と場所について、理解しやすいように、全員でテレビに映し出された大陸名、海洋名の場所を、地図で確認しながら印をつける活動を行う。	
10:01 (10) 10:11 (10) 10:21 (4)	5　国の位置を大陸名や海洋名、方角を使って探す。説明する。 （１）探す。 ・チリ（例題） ・マダガスカル （２）説明する。 ・ノルウェー （例題） ・その他 （万博で見学したパビリオンの国） （３）説明文を全員で共有する。	・日本と世界の関わりを感じる事ができるように、例題として扱うチリやノルウェーについて、災害や産業などの既習した内容から、日本との関連性を想起させる。 ・大陸名、海洋名、方角を用いて国の位置を説明できるように、フラッシュカードで「大陸名」「海洋名」「方角」と示したり、それぞれ色を分けて示したりする。 ・自分で説明文を考えることに取り組めるように、友達同士で説明文を共有する前に、個人で説明文を考える時間を確保する。 ・説明文を共有しやすいように、説明文を短冊に記入し、発表と同時に黒板に掲示する活動を行う。	Ｂ：自分の言葉で国の位置を説明できるように、教師が示した説明文を参考にするよう伝える。 Ｄ：大陸名や海洋名、方角を活用して国の位置を説明することを忘れないように、忘れている場合は指差や言葉掛けをする。 Ｆ：自信をもって発表できるように、机間巡視の際に記入内容を確認し、賞賛したり助言したりする。 Ｃ：大陸名、海洋名、方角を活用して説明できるように、フラッシュカードで「大陸名」「海洋名」「方角」と示し、確認する。
10:25 (9)	6　まとめ ・全員で、学習した国の位置の説明方法をまとめる。 ・日本の位置を説明する。	世界地図で国の位置を説明するときは 大陸名や海洋名、方角を使って説明するとわかりやすい ・まとめの文章や、日本の位置の説明文を考えやすいように、本時で何を頼りに国の位置を探したり、説明文を考えたのか、授業の思考の流れを確認したりする。	Ｅ：大陸名、海洋名、方角を活用して説明できるように、ワークシートの記入欄を３つに分け、一つずつ焦点を絞って考え、記入しやすいようにする。
10:35 (1)	7　挨拶をする。 ・次時の学習内容を確認する。	・次時に見通しをもてるように、次時で扱う緯度や経度について予告する。	

高等部社会科

「我が国の地理」

～社会科の見方・考え方を働かせた
深い学びを目指して～

秋田県立能代支援学校
高等部　大山　崇彦

実践報告の内容

1　単元の概要
2　結果
3　考察
4　まとめ

1 単元の概要

（1）本単元で育成を目指す資質・能力

内容のまとまり：我が国の国土の様子と国民生活、歴史

段階	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
2	世界における我が国の国土の位置、国土の構成、領土の範囲など大まかに理解する。	世界の大陸と主な海洋、主な国の位置、海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して、我が国の国土の様子を捉え、その特色を考え、表現する。	世界における我が国の国土や領土について関心をもち、積極的に学習に取り組む。

1 単元の概要（2）単元計画　～習得・活用・探究～

小単元名	時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
世界から見た日本の位置	2 本時 1／2	世界の主な国の位置を大陸・海洋名・方角を使って表す。
		世界の主な国の位置を、経度・緯度、本初子午線、赤道を使って表す。
日本の国土の様子	3	気候と経度・緯度等の知識を関連付ける。 日本の気候と他国の気候とを比較し、特色を表す。
		地形や自然環境と国民生活との関連を知る。
		日本の魅力を表現する。 （地形、自然環境、島国など）

１ 単元の概要
（３）授業づくりの留意点

社会科の見方・考え方を働かせた授業の工夫

見　方：地形、位置、範囲、空間的に捉えるなど
考え方：関連付ける、比較する、総合する

・地球儀や世界地図を活用して、国の位置関係を空間的に捉える。
　気候の違いと関連付けながら比較する。

・本単元で習得した知識を生かして、日本の地域を空間的に捉える。
　地形や気候、自然環境などを比べ、関連付けながら理解できるようにする。

・習得した知識や見方、考え方を活用して、自分の言葉でまとめる。

～習得・活用・探究のプロセスを通して学ぶ～

１ 単元の概要
（４）本時のねらいと学習活動

①本時のねらい

世界地図や地球儀を使って、示された国を探したり、国の位置を説明したりする活動を通して、大陸名や海洋名を知り、世界地図上における日本の位置を理解する。

②本時の学習内容

・万博で見学したパビリオンの国の位置を世界地図から探す。
・学習課題を確認する。「国の位置を分かりやすく説明するには？」
・大陸名、海洋名、方角を知る。
・大陸名、海洋名、方角を使って国の位置を探したり、位置を説明したりする。
・まとめる。

２ 結果
（１）地図の読み取り
～知識を習得し、活用しながら表現する姿①

２ 結果
（１）地図の読み取り
～知識を習得し、活用しながら表現する姿①

国の位置の説明の仕方

▪ 知識の習得前

上手く伝えられない
「そこら辺」
「地図のオレンジ色のところ」
「中間あたり」という表現

▪ 知識の習得後

「ユーラシア大陸の･･･」
「太平洋の西側」

2 結果
（1）地図の読み取り
～知識を習得し、活用しながら表現する姿②

日本の位置を説明しよう。

ユーラシア大陸で太平洋に面していて大陸の東にある島国

日本の位置は

緯度は 北緯20度～北緯45度

経度は 東経123度～東経153度

2 結果
（2）地図の読み取り
～生徒同士の共同、共有する姿

生徒同士で話し合い、気付きを共有する姿

2 結果
（4）自ら問いを立てる姿

確かな知識の定着、興味・関心の高まりを感じる生徒の声

「同じ緯度なのに、どうしてこっちの国のほうが暖かいのか？」

「日本の地形や気候は、他の国に比べて過ごしやすそう。」

「赤道付近は降水量が多いのはどうして？」

地理に対する関心や、学習意欲の高まり

2 結果
（4）学習評価　～観点別学習評価表～

段階	内容のまとまり	知識及び技能	評価	思考力・判断力表現力等	評価	学びに向かう力人間性等	評価
2	我が国の国土の様子と国民生活、歴史	世界における我が国の国土の位置、国土の構成、領土の範囲など大まかに理解している。	◎	世界の大陸と主な海洋、主な国の位置、海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して、我が国の国土の様子を捉え、その特色を考え、表現している。	◎	世界における我が国の国土や領土について関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	◎

3 考察～授業づくりの配慮点（工夫）の評価

社会科の見方・考え方を働かせた授業において
習得・活用・探究に有効であったこと

① 習得・活用・探究のための、環境設定

② 習得・活用・探究のための、活動設定

3 考察～授業づくりの配慮点（工夫）の評価

社会科の見方・考え方を働かせた授業において
習得・活用・探究に有効であったこと

① 習得・活用・探究のための環境設定の工夫

〇障害の程度や特性に配慮した地図資料の選定と提示方法の工夫
・大陸名や海洋名は残し、不要な地域や海流の名前は削除
・方角の記号を追加

〇ディスプレイで資料の常時掲示
・習得した知識を使って、活用・探究できるように、大陸名や海洋名、方角が記された地図を、常時ディスプレイに掲示

3 考察～授業づくりの配慮点（工夫）の評価

社会科の見方・考え方を働かせた授業において
習得・活用・探究に有効であったこと

② 習得・活用・探究のための、活動設定の工夫

〇興味・関心をもてるように修学旅行を題材にした学習活動（導入時）の工夫

〇習得を目指す知識である大陸名、海洋名の名前と位置、方角を地図で確認

〇大陸名や海洋名、方角を使って表現できるように、国の位置を探したり、説明したりする活動経験の保障

〇前単元「自然災害と対策」や「日本の産業」での学びを活用しながら、気付き、考える機会の設定

4． まとめ

見方：「位置や空間的な広がり」（地理的視点）
「時期や時間的な経過」（歴史的視点）
「事象や人々の相互関係」（公民的視点）

考え方：比較・分類
総合
関連付ける

・資料の活用方法を身に付け、社会的事象に関する様々な情報から、正しい情報を読み取ることができるように指導する。

・社会的事象について、意義を理解し、問いを立て、課題を把握し、課題の解決に向けての社会への関わり方を選択、判断できるように指導する。

身に付けた知識を活用して、自分が社会にどのように関わるのか、どのように参加していくのかという学びへ発展させる。

生活科	地域の特産品から学ぶ社会の仕組みと公共施設

小学部　嶽石　涼

1　単元の概要

対象は小学部６年生４名である。地域の特産品である「白神ねぎ」を題材に、自分たちが住む地域の公共施設や商店、そこで働く人に関心をもち、自分たちの暮らしとのつながりに気付くことをねらいとする。インターネットや資料を活用して調べ、プリントにまとめる活動を通して、白神ねぎがどのような過程を経てお店や私たちのもとに届くのかを知る。

これらの学習を通して、店の名称や扱っている商品名について知り、商品の生産地や輸送などについて調べ、気付いたことを表現するなどの資質・能力を育成する。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
2	社会の仕組みと公共施設	身近な地域のいろいろな種類の店やそこで販売している商品を知る。	教師と一緒に店で買い物をするなどして、気付いたことを他者に伝える。	身近ないろいろな種類の店やそこで売っている商品などに関心をもち、知る。
3		いろいろな店の種類が分かり、店の名称や扱っている商品名について知る。	商品の生産地や輸送などについて調べ、気付いたことを表現する。	工場や農家などへの関心をもち、学習に進んで取り組む。

3　実践の概要

「白神ねぎ」が地域の特産品であることに気付くように、能代市役所観光振興課が発行しているパンフレットを提示した。パンフレットには白神ねぎを扱った販売店や飲食店が数多く紹介されており、児童はその所在地を地図に示す活動を通して、能代市内には白神ねぎを扱う販売店や飲食店があること、そして市内だけでなく遠くのお店でも取り扱われていることに気付くようにした。

児童の「白神ねぎはどこで作られているのか」「どうやって遠くの店まで運ばれているのか」という疑問から、白神ねぎの生産地や輸送などについて調べる学習を展開した。

本時では、これまでの学びを生かし、白神ねぎの生産過程に焦点を当てて学習を行った。タブレット型端末等を活用し、市役所のホームページ、白神ねぎのPR動画から、生産 → 出荷 → 輸送 → 販売という流通を視覚的に捉え、農家や店など、能代市で働く人々の仕事や商品の運ばれ方について関心をもった。調べ学習を通して、白神ねぎがどこで育てられ、どのように収穫され、店に届いているのかを知ることで、身近な店や働く人と自分の生活とのつながりに気付くことをねらいとしている。

4　成果（児童の変容等）

児童は「白神ねぎがどのように私たちのもとへ届くのか」というめあてについて、確かめながら学習を進めた。地域の特産品を扱ったことで、児童は身近な店や農家の人に対して関心をもち、自分の生活と地域の仕事とのつながりを感じ取った。

本時の学習では、児童は白神ねぎが「畑で育てる → 収穫する → 店に運ぶ → 私たちのもとに届く」という流れを、能代市の白神ねぎPR動画を見ながらたどり、プリントにまとめた。児童は白神ねぎの流通について、写真や地図を使って順に追いながら理解した。また、PR動画から、能代市内の店だけでなく、東京や台湾といった遠い地域や国にも運ばれていることを知り、商品の移動の広さに驚き、「こんなに遠くまで行くんだ」と発見を共有した。児童は東京や台湾への輸送方法にも関心をもち、「近いところはトラック」「遠いところは船や飛行機」といった予想を立てた。後日、市役所の職員にインタビューを行って、自分の予想が正しかったかどうか確かめようとする姿が見られた。

これらの活動を重ねることで、児童は「店に並ぶ前には、育てる人や運ぶ人など、たくさんの仕事がある」ということを実感し、白神ねぎが自分たちの食卓に届くまでの流れと、それに関わる人々の働きを理解した。地域の産業と、自分たちの暮らしを結び付けて考える力が育ってきた。

5　考察

地域の特産品の白神ねぎは本校高等部でも生産しており、これを題材にしたことは、児童の関心や日常の経験に即しており、予想しやすい題材であった。インターネットの活用や動画を視聴して調べ、プリントにまとめるという方法は、児童にとって分かりやすく、効果的であった。

本単元では現地調査は行えなかったが、実際に販売店や飲食店に行って調べたり、白神ねぎに関わる人々にインタビューをしたりする活動ができると、さらに学習が深まると感じた。

単元全体で育成したい資質・能力を明確化し、学習のねらいとして本時との関連を児童にも分かる形で提示することが望ましい。実際に住んでいる能代市や特産品の白神ねぎを題材としたことで、児童が「社会の仕組みと公共施設」という学習を身近に感じ、生活科における見方・考え方「生活や地域と結び付けて考える」を具体的に達成できると考えられる。

6　まとめ

生活科では、児童が実際に経験したことを基に学びを広げ、生活や地域と結び付けて理解することが重要である。本単元においても、自分の住んでいる地域の特産品を題材にすることで、児童が自身の生活や経験と結び付けながら予想し、学びを深めることができた。児童が生活科の学びを自分の暮らしに結び付け、公共施設や地域社会への理解を深めるためには、本単元で行ったように、インターネットを活用して調べる学習や、テレビ電話によるインタビューなど、自ら情報を集めて、まとめる活動が効果的であると感じた。

このような学習を通して児童は「社会の仕組みと公共的な働き」について、抽象的な知識としてではなく、自分たちの暮らしに根ざした具体的な知識として理解することができた。地域を題材とした探究的な学びは、生活科や社会科における「生活や地域と結び付けて考える」見方・考え方の育成に有効であり、今後の授業づくりにおいても重要な視点である。

国語科	みて・きいて・やってみよう～おべんとうばす　しゅっぱつ！～

小学部　　菊地　直枝

1　単元の概要

対象は、小学部１年２名である。本単元では、絵本「おべんとうばす」の読み聞かせに合わせて登場人物のせりふや動きをまねる劇遊びを通して、呼名に対して返事をすることや食事のときの挨拶について楽しみながら学んでいく。絵本に出てくるお弁当の具材に加えて、児童の好きな具材も取り入れ、語彙を広げる。また、「おべんとうばす」の模型に乗って教室を一周した後に、お弁当具材のマッチングの活動を通して、言葉で表現する学習へとつなげていく。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1	言葉の特徴や使い方 （聞くこと・話すこと）	身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを知る。	教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現する。	教師の話や読み聞かせに応じて、模倣や表現をしようとするなど、人と関わろうとする。
1	我が国の言語文化 （読むこと）	遊びを通して、言葉のもつ楽しさに触れる。	絵本などを見て、次の場面を楽しみにし、登場人物の動きなどを模倣する。	絵や記号で表された意味に応じて行動しようとする。

3　実践の概要

- 本単元では、絵本の読み聞かせを繰り返す中で食べ物の名前を聞いて理解し、言葉での呼び掛けに対して答えることができることを目指した。
- 国語科の学習の初期段階であり、対象児童の障害特性に配慮し、学習の流れを一定にしたり劇遊びでのやりとりの仕方をパターン化したりするなど、安心して学習に向かうことができるようにした。
- 授業の導入・展開・まとめの全てを、絵本「おべんとうばす」に関連させることで、学習に対する意欲をもち続けられるようにした。
- 絵本の読み聞かせを聞いて教師の呼び掛けに応じて返事や挨拶をすることができるように、登場人物の名前を確認しながらイラストカードを配ったり、児童がバスに乗り込む場面で児童の名前を呼ぶ時間を設定したりした。
- 本時はこれまでに習得した知識・技能を活用する段階であり、食べ物の名前が分かって、その名前が呼ばれたら返事をすることができる姿の育成を目指した。
- 児童が好きな活動である「バスに乗り込む前に呼名に対して返事をする場面」を設定し、習得した知識・技能を活用できているかを確認できるようにした。
- 登場人物のイラストと文字カードをマッチングする平仮名の学習では、児童が一人でできるよう、文字カードを貼る位置に枠を付けたり、ヒントとなる平仮名に印を付けたりするなどの工夫をした。

4　成果（児童の変容等）

- 読み聞かせが始まると、児童はお話しの流れに合わせて自分の持っている登場人物（食べ物）のイラストカードを手にし、名前が呼ばれるのを待っていた。呼ばれると「はい」と返事をして前に出ることができていたため、本時の目標は達成されたと言える。
- 国語の学習だけでなく、朝の会や帰りの会、道徳の時間など、学校生活の様々な場面で呼名に対して「はい」と返事をする姿が見られるようになり、習得した知識・技能が実際の生活場面でも活用できるようになっている。
- 読み聞かせや劇遊びを繰り返す中で、イラストカードの操作やイラストカードを使ったやりとりを十分行い分かりやすさや楽しさを感じることができたため、その後のイラストカードと平仮名のマッチング活動もスムーズに行うことができた。
- 「おべんとうばす」に登場する最後の「みかんちゃん」は返事だけではなく、「まってー」と言い走ってくる展開となっている。児童らはその場面を楽しみにしており、「みかんちゃん」を担当するときには教室の後方から走って来るという演出を子ども達から行うようになった。学習を繰り返す中で、お話の楽しさを感じながら、主体的に友達や教師と関わる姿が見られるようになった。

5　考察

- 入学間もない１年生の学習グループであることを踏まえ、返事や挨拶、友達や身近な教師と一緒に学習する楽しさを積み重ねられるような指導目標や指導計画を立てたことで、時間いっぱい学習に向かう姿が見られるようになった。
- 題材については、教科書の内容や目標と児童の興味・関心を照らし合わせて扱う絵本を選定したことで、児童が主体的に学習に向かう姿が多く見られた。
- 「おべんとうばす」は名前を呼んで返事をする、という単純な繰り返しでお話が構成されているため、児童にとって活動の見通しがもちやすく、活動内容も分かりやすかったため、名前を呼ばれたら「はい」と返事をするという本時の目標を達成した姿が見られた。
- 児童が学習に意欲的に参加することができた一方、学びの深まりについては、より短い間隔で発展させる必要があった。分かったことやできたことを活用する場面を設定したり、新たな知識・技能を習得する学習を展開したりすることで、児童の学びをさらに深めることができたのではないかと考える。

6　まとめ

国語の学習の初期段階である小学部１年生の児童が、言葉の意味や働き、使い方等を習得していくには、児童の興味・関心に基づいた題材を選び、お話の世界に入り込むことで学習意欲を引き出すことが重要である。「おべんとうばす」のように単純な繰り返しのお話は、児童に見通しと安心感を与えることができ、習得させたい言葉の意味や働きが予想しやすくなり成功体験につながる。また、お話の展開を生かした演出を取り入れることで、児童がお話の世界を楽しみながら学習に取り組む姿勢を育むことができる。さらに、学校生活の様々な場面に学習内容を取り入れ、繰り返し行うことで、学びの定着や児童の自信につなげることができる。加えて、児童が一人でも主体的に取り組めるような文字カードやマッチング活動などの自立課題を準備することが、視覚的・身体的な能力を高めることにも効果的であると考える。

国語科	好きな本の魅力を伝えよう～【能代版】ビブリオバトルに挑戦！～

高等部　　成田　彩瑛

1　単元の概要

対象は、高等部３年生７名である。アンケートでは「本が好き」と答える一方で、実際に読書に親しむ機会が少ない生徒がほとんどである。本単元では、生徒がこれまでに読んできた本の中から自分が最も面白いと感じ、他者に薦めたいと思う本を紹介する学習を行う。生徒は、本に書かれている事実と自身の感想を交え、相手が「読んでみたい」と思えるように伝え方を工夫しながら発表する。選んだ本の魅力をお互いに発表し合うことで、生徒が自己の考えを広げたり深めたりするとともに、読書への関心を高め、学びの広がりにつなげていくことを期待する。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
2	言葉の特徴や使い方 (聞くこと・話すこと)	表現したり理解したりするために必要な語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、語彙を豊かにする。	話の内容が明確になるように、話の構成を考える。	目的や意図、状況を考慮し内容をまとめ、伝えたいことを明確にすることについて関心をもち、積極的に学習に取り組む。
2	言葉の特徴や使い方 (書くこと)	文と文の接続の関係、話や文章の構成や種類について理解する。	目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見と区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する。	文章全体の構成を捉え、要旨を把握することに関心をもち、積極的に学習に取り組む。
2	我が国の言語文化 (読むこと)	日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付く。	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。	文章から必要な情報を取捨選択したり、整理・再構築したりすることについて関心をもち、積極的に学習に取り組む。

3　実践の概要

学習の導入としてビブリオバトル全国大会の字幕付き動画を視聴し、チャンプ本に選ばれた高校生の発表原稿を読みながら発表に共通する要素について考え、意見を共有した。

生徒の意見を集約し、「本の魅力を伝えるためのポイント」として「問い掛け」「具体的な説明」「一番伝えたいこと」の３点を共通事項として整理した。生徒はこれらのポイントを基に発表原稿を作成し、タブレット型端末のフリーボード機能を活用して、原稿の加除修正をしやすいようにした。

発表原稿の作成には３時間を充て、小グループで「ミニ発表会」を行った。ミニ発表会では、相手の発表を聞いて、「本の魅力を伝えるためのポイント」が含まれているかどうかや、「よかった点」「もっと知りたいこと」を付箋に書く評価シートを準備した。評価シートは発表者に渡され、グループの仲間からのアドバイスを基に自分の発表原稿の推敲を行った。

一人の生徒の発表原稿を取り上げ、全員で「本の魅力を伝えるためのポイント」がどの部分に表現されているかを確認し、発表の構成や伝え方について理解を深めた。

4　成果（生徒の変容等）

生徒一人一人が自分の思いや考えを自分の言葉で表現していた。また、読んだ本の内容をより深く理解しようとする意欲が高まり、本に書かれている言葉の意味を自分から調べるなど、主体的な学びの姿勢が見られた。

発表原稿の作成においては、「問い掛け」が聞き手の心をつかむことに気付き、それを積極的に取り入れようとする様子が見られた。さらに、「本のあらすじや内容を全て伝えない方が、相手が読みたくなる」という友達のアドバイスを参考にして、本の内容の要点を絞って原稿を構成する工夫が見られた。

発表に向けては、文と文のつながりにふさわしい言葉を選ぶことに苦戦する生徒が多く、教師による助言が必要な場面もあったが、発表のイメージを明確にもっている生徒が他の生徒にアドバイスする姿も見られ、お互いに学び合う関係が築かれていた。

タブレット型端末のアプリを活用することで、文章構成に関する推敲や記述を効率的に進めることができた。

発表会では、発表原稿に書かれていることを淡々と読むのではなく、メリハリをつけた話し方で発表する生徒の姿から、自信をもって取り組んでいる様子がうかがえた。

また、単元のまとめの振り返りでは、「自分一人で原稿を考えるよりグループでアドバイスし合えてよかった」や「読んでみたいと思える本を見つけることができた」という生徒の声があり、本単元を通して協働的な学びができたことや読書への興味関心が高まったことがうかがえた。

5　考察

単元の導入として実際のビブリオバトルの動画を視聴したことで、発表の仕方について具体的なイメージをもつことができた。また、チャンプ本に選ばれた高校生の発表を参考にして、本の魅力を伝えるためのポイントを「問い掛け」「具体的な説明」「一番伝えたいこと」の３つに絞って整理したことは、生徒が原稿を構成する上での指針となり、効果的であった。

本の紹介をする対象を学習グループ内でなく他グループの友達や教師にしたことで、グループ内で発表原稿を読み合い、お互いにアドバイスをし合う活動が自然に生まれ、学び合いの姿勢が育まれた。

発表原稿を作成する際に、タブレット型端末のアプリを活用することで、文章構成の推敲や修正が容易になり、生徒が意欲的に原稿作成に取り組むことができた。

自分の思いや考えを言葉として表出することが難しい生徒が多く、グループ内でも実態差が大きく出てしまった。個々の生徒の思いに近い言葉を代弁したり選択肢にしたりして支援する学習機会が必要である。

6　まとめ

本実践では、読書を通して得た知識や感想を自分の言葉で表現し、他者に伝える力を育むことを目指して授業を展開した。導入では、ビブリオバトルの動画や優れた発表原稿を活用し、発表の構成や話し方のイメージを共有することで、生徒の理解と意欲を高めた。

「本の魅力を伝えるためのポイント」を明確にしたことや、タブレット型端末を活用した推敲支援、グループ内での発表会による協働的な学びの場の設定など、学習活動全体を通して、生徒が主体的に表現を工夫し、互いに学び合う姿が見られた。これらの取り組みにより、生徒は言語活動への関心を高め、読書の楽しさや伝えることの意義を実感することができた。

今後も、生徒の興味・関心を起点に、ＩＣＴ機器の活用や対話的な学びを取り入れながら、表現力を育む授業づくりを継続していきたい。

理科	植物の栽培と観察～育てて気付く！比べて分かる！植物の成長～

中学部　　諏訪　寿昭

1　単元の概要

対象は、中学部１年８名である。植物を実際に栽培する過程を通して、栽培や成長の順序、子葉や葉の特徴について学習する。形や大きさの変化だけでなく、植物ごとに葉の形が異なることなどの差異点にも着目し、比較を通して理解を深める。学習活動として、夏生一年生の双子葉植物であるミニトマト、枝豆、唐辛子の３種類を栽培する。生徒は、どのように育つのかを予想し、観察を通して検証することで、自分で考え、気付き、確かめる力を身に付けていく。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1	生命	植物などの生き物は、色、形、大きさなど、姿に違いがあることを理解し、初歩的な観察、実験などの技能を身に付ける。	栽培などを通して、身の回りの生物について調べ、差異点や共通点に気付き、生物の姿についての疑問をもち、表現する。	生物の姿の違いに関心をもち、観察、実験などの学習に積極的に取り組む。
		植物の育ち方には一定の順序があることを理解し、初歩的な観察などの技能を身に付ける。		生物の育ち方に関心をもち、観察、実験などの学習に取り組む。

3　実践の概要

【学習計画について】

・種子から結実までの過程を教科書に沿って学習し、発芽、子葉、葉、花といった植物の育ち方には一定の順序があることを学習する。
・植物の色、形、大きさなどの共通点や差異点に気付き、植物の姿の変化を捉えられるようにする。
・ミニトマト、枝豆、唐辛子の３種類の植物を観察用の鉢に植え、収穫まで定期的に観察や記録を行いながら学習を進める。

【授業の工夫】

・植物の成長過程が分かるように植物ごとの草丈、葉の数、写真をまとめた掲示物を作成した。
・葉の数を数えやすくするために付箋を活用し、草丈の計測には紙テープを用いるなど、生徒が観察や記録をしやすいように工夫した。
・３種類の植物の観察をグループで分担して行うことで、生徒一人一人の活動量を確保した。
・グループ内の話し合いが活発になるように、メンバーの組み合わせや８人の学びの履歴を考慮した。
・前時までの学習内容等を振り返りやすくなるように、単元計画表に各時間のまとめを記載するようにした。

4　成果（生徒の変容等）

・前時の植物の写真と本時の実際の植物を比較し、観察を通して成長が進んでいることを理解しており、本時のねらいは達成されたと言える。
・単元計画表へのまとめの記載を繰り返すことで、生徒がまとめの欄に書く言葉を考えて発言するようになった。
・発芽からの観察を重ねることで、葉の数だけでなく、葉の大きさや色の変化にも気付く生徒がいた。
・ミニトマトの葉や茎にもトマトの香りがすることに気付いた生徒の発言をきっかけに、枝豆や唐辛子の香りにも着目する学習に発展した。

5　考察

・植物によって成長の速度が異なるため、３種類を取り扱う場合には、その違いを考慮する必要があった。
・前時の写真との比較や異なる植物の育ち方の比較など、観察時に比べる対象があることでスムーズに学習が進行した。
・教科書に沿って進めることで、実際の植物と教科書の写真等を見比べることや関連動画を活用することができ、学びを深めることにつながった。成長の要因や気候との関係など、生活と結び付けた学びにするためにはさらに工夫の余地があった。
・指導と評価の一体化に迫るため、単元計画表へまとめの言葉を記載するようにしたところ、生徒が各時間の学習内容を自分たちでまとめて文章にし、振り返りにも活用するなどよい結果につながった。

6　まとめ

理科の「考え方」にあるように、以前との比較や他の植物との比較をすることは生徒にとって分かりやすく、観察をスムーズに進めることができた。「植物の姿の変化に気付く」という本時の目標に迫る効果的な活動だった。

葉の枚数や草丈の記録、グラフの作成など数学科との関連が大きい単元であった。春～夏の時期で難しい面もあるが、同時期の数学科で長さや高さの測定、グラフの見方などを扱うなど、教科間の連携により効果的な学びにつながると考えられる。

本単元を進めたところ、植物の成長を待つ必要があり計画どおりに進められない時期があった。夏季休業後に「太陽の光やかげ」を扱う単元があり、天候面での制約も生じたことで１０月まで学習が延びた。植物の成長を待つ期間に平行して他の単元を進めるなどの工夫により、「太陽の光やかげ」などの内容を適切な時期に終えられるように学習計画を調整したい。

体育科	安心・意欲・協働を育む体育授業のデザイン～ピン倒しボールゲームの実践から～

小学部　大髙　聡美

1　単元の概要

対象は小学部１～３年生９名である。本単元では、教師と一緒にボールを使って楽しく活動しながら、身体の部位を意識的に動かしたり、簡単な合図や指示に従って基本的な運動に取り組んだりすることをねらいとする。秋田県特別支援学校総合体育大会の種目である「ピン倒しボールゲーム」を教材とし、手・腕・肩などの動かし方を学びながら、体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。また、友達と一緒に運動することを通して、簡単な決まりを守り、安全に運動する態度の育成につながるように展開する。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1	ボール運動遊び	教師と一緒に、ボールを使って楽しく体を動かす。	ボールを使って体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。	簡単な合図や指示に従って、ボール遊びをしようとする。
2	ボールを使った運動やゲーム	教師の支援を受けながら、楽しくボールを使った基本的な運動やゲームをする。	ボールを使った基本的な運動やゲームに慣れ、その楽しさや感じたことを表現する。	簡単決まりを守り、友達とともに安全に楽しく、ボールを使った基本的な運動やゲームをしようとする。

3　実践の概要

各児童の目標に応じて一部グループに分け、学習活動や活動場所を設定した。

１段階の児童には、様々な種類のボールを準備し、弾む感触を楽しむ活動を設定したほか、ボールを転がすと音が鳴る教材を用意することで、感覚的な興味を引き出す工夫を行った。さらに、ボールを転がす動作を繰り返し行えるよう、教師が言葉掛けをしたり、転がす場所が分かりやすいように場の設定を工夫した。

2段階の児童には、人体の各部位を模造紙に描き、名称との一致を図る活動を通じて身体認識を促進した。また、学習内容を積み重ねて定着させるために、児童の思考を促す問い掛けを行い、ピン倒しボールゲームに向けた技術的な練習とともに、記録への挑戦意欲を高めた。

4　成果（児童の変容等）

○１段階の児童
・「いろいろなボールを何度も転がす」活動を通して、児童が自らボールに手を伸ばし、繰り返し転がす姿が見られるようになった。
・音が鳴る教材や弾む感触の違いに反応し、笑顔や発声などの情緒的な反応が増えた。
・教師の言葉掛けや場の工夫により、活動への参加頻度が高まり、自発的な行動が引き出された。

○２段階の児童
・「よく見る」「転がす」「座り方」などのポイントを押さえて指導を繰り返すことで、動作が安定し、ピンを倒す成功率が向上した。
・投球時間が初回の３１秒から３回目には２２秒と短縮され、児童自身が記録の変化に気付き、達成感をもって取り組んだ。
・児童の腕の動きを観察し、「大きく振っていた」動作から「小さくコンパクトに振る」動作へと修正指導を行った結果、ピンを倒すスピードの向上につながった。
・模造紙に描いた人体図と視覚的支援を活用することで、「どの部位を使うか」「どこに注意するか」など、児童が身体の部位を意識しながら活動できるようになった。
・投げ方の動画撮影により、児童が自分の動きを客観的に見ることで、「強く投げたら２本倒せた」といった自己発見を言葉で表現できるようになった。
・成功体験をもとに「次はこうしてみよう」と考える姿が見られ、成功や失敗の要因を考えることへとつながった。

○全体
・児童一人一人の実態と発達段階を踏まえ、「興味・関心の喚起」から「具体的な技能の獲得」、「身体意識の向上」、そして「自分の行動の振り返り」へと段階的に学習を進展させることができた。

5　考察

児童が自分でできたことを実感できるような言葉掛けや授業展開が重要である。「上手だね」といった結果の評価だけでなく、「今、ボールを投げる時に肘がしっかり上がっていたから遠くに飛んだよ。」といった、知識につながる気付きを促す具体的なプロセスを承認する言葉掛けを意識することで、児童の主体的な意欲を引き出し、「学び」の実感につながると考える。

教材が多すぎると、児童が混乱したり、活動の焦点が曖昧になったりする可能性がある。教材の量について、いたずらに選択肢を増やすのではなく、児童にとって本当に必要なものが適切に配置されていたかを十分留意する必要がある。今後は感覚遊びから教科の指導へのステップ、目的別に活動に取り組めるように、目的に応じた教材の選定と配置の工夫を意識していく。

共同学習へとつながるように、友達の動きを「見てまねる」機会が重要である。他児の動きを見ることは、運動技能の習得だけでなく、社会性やコミュニケーション力の育成にもつながる。一緒に学習する場面やペアで行う活動などを意図的に取り入れ、模倣の機会を十分保証することが大切である。

6　まとめ

本実践では、児童の発達段階に応じた活動設定や教材の工夫により、運動への興味や知識・技能の定着を促すことができた。特に感覚を楽しむ教材で興味・関心を高めながら自発的な活動を促進し、感覚遊びから教科指導へのステップアップしていくこと、それにとどまらず、環境設定や重点指導による動作の安定、視覚的支援による身体意識の向上が効果的であった。

また、活動エリアの明確化や視覚的手掛かりの活用など、整理された環境設定により児童が安心して集中して取り組むことができた。今後、一層充実した授業をつくるためには、模倣の機会を設けること、教材の精選や配置、工夫等を図る必要がある。

保健体育科	運動やスポーツの関わり方を広げる体育理論の授業づくり

高等部　　市川　尭

1　単元の概要

本単元では、高等部１年生９名を対象に、生徒が運動やスポーツに対して多様な視点をもつことを目指し、運動やスポーツとの関わり方を「する」「みる」「支える」「知る」の４つに分類して指導する。運動やスポーツは参加するだけでなくメディアを通して観戦したり、ボランティアとして関わったりするなど、様々な形で楽しむことができる。こうした多様な関わり方を通して、魅力を幅広く理解し、主体的にスポーツに関わる姿勢を育む。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1	体育理論	運動やスポーツの多様性、効果と学び方、安全な行い方及び文化としてのスポーツの意義に気付く。	運動やスポーツの多様性、効果と学び方、安全な行い方及び文化としてのスポーツの 意義についての課題を発見し、その解決のための方策を工夫したり、仲間と考えたり したことを他者に伝える。	運動やスポーツの多様性、効果と学び方、安全な行い、及び文化としてのスポーツの 意義についての学習に積極的に取り組む。

3　実践の概要

単元計画における本時の取扱いについては、「運動やスポーツの多様な楽しみ方を知る」という知識の習得段階の授業であり、ねらいは、運動やスポーツの「する」「みる」「支える」「知る」の４つの楽しみ方を具体的に知るということである。

前時の授業では、「運動」「スポーツ」と聞いて思い浮かぶ自分の好きな運動やスポーツについて生徒同士で話し合いを行った。本時では、その話し合いを踏まえ自分の好きな運動やスポーツを基に、スポーツに関わる人々の写真を「する」「みる」「支える」「知る」の４つの楽しみ方に分類する活動を行った。多様な運動・スポーツの存在や、様々な関わり方を具体的に知ることができるように、興味のあるスポーツの写真を多く準備した。また、写真カードに着目して思考・判断・表現を引き出すために競技名や何をしているかなどを記入する欄を設けた。

4　成果（生徒の変容等）

提示した運動やスポーツの多様な関わり方の写真を「する」「みる」「支える」「知る」の４つの視点で分類する活動を通して、クラスの仲間と意見交換を行い、自分の興味がある写真を選択し分類した。生徒一人一人が、運動の得意、不得意に関わらず、スポーツへの関心をもつきっかけとなった。「スポーツ＝行うこと」と考えている生徒が多かったが、分類する活動や生徒同士でやりとりする活動を通して運動やスポーツの様々な関わり方を知り、「運動は苦手だけどテレビでスポーツを観るのは好きだ」「こんな関わり方があることを初めて知った」「バスケの街能代を知ることができた」「様々なスポーツを調べてみたい」などの気付く姿があった。

5　考察

本実践では、単に運動やスポーツに関する知識を得るだけでなく、生徒自身が卒業後も運動やスポーツに関わり続けることを目的として行った。生徒がイメージできるように、具体的な場面や人物の写真カードを用いたことで生徒が運動やスポーツの多様な関わり方を理解することができ「する」「みる」「支える」「知る」の観点で分類する活動は有効的であった。また、グループ活動を軸として、写真カードに記入できる欄を設けたことで、生徒同士が考え、伝え合う姿が見られ思考・判断・表現を引き出すことにも有効であった。

6　まとめ

体育理論は、座学で行うことが多いが、体験的な活動や生徒たちにとって身近な学習内容を設定することが重要である。例えば、生徒自身で球技大会やスポーツ大会の企画・運営をすることで、「する」「みる」「支える」「知る」の４つの関わり方を体験的に理解して「体育の見方・考え方」を働かせることにもつながる。体育理論の授業では、運動やスポーツの得意、不得意に関わらず学ぶことで、運動やスポーツへの主体的で継続的な取組につながる単元を構成することができる。

福祉科	介護の基本を体験から学ぶ～移動・移乗と言葉掛け～

高等部　佐藤　尊

1　単元の概要

対象は高等部２年生３名である。生徒は介護職員初任者研修の資格取得を目指している。本単元では、介護サービス利用者をベッド上で水平移動し、車椅子へ移乗する介助の実技練習を行う。介護サービス利用者と介護者の双方が安全に介助できるように、ボディメカニクスの基本原理について知り、実践する。また、介護サービス利用者の残存能力を生かす言葉掛けや協力動作について学び、実践を通して介護サービス利用者の自立支援を意識した介護方法を習得する。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

教科	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
福祉	こころとからだのしくみと生活支援技術(基本知識の学習)	介護に関するからだのしくみの基礎を理解する。	介護に関するからだのしくみの基礎を人間の生命の維持・恒常性の仕組みやバイタルサイン等を踏まえて考え、表現する。	介護に関するからだのしくみの基礎に興味をもち、積極的に取り組もうとする。
福祉	こころとからだのしくみと生活支援技術(生活支援技術の学習)	移動・移乗に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護について理解する。	移動・移乗に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護について、加齢や障害、意欲の低下などが移動や運動に及ぼす影響を考え表現する。	移動・移乗に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護について興味をもち、積極的に学習に取り組もうとする。
福祉	こころとからだのしくみと生活支援技術(総合生活支援技術演習)	事例による展開を通して一連の支援技術を習得する。	事例による展開を通して個人情報保護やリスクマネジメント等の課題を考え、解決する。	事例による展開に興味をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。

3　実践の概要

- ボディメカニクスの基本原理を習得し、ベッド上から車椅子への移乗までの工程で活用する段階である。
- 本時のめあては「安全な移動と移乗をすること」、「利用者が自立できるような言葉掛けをすること」である。実技練習の様子を動画撮影し、生徒が客観的に自分の動きを振り返る機会を設けた。また、生徒が相互にアドバイスする活動を通して、互いに学びを深められるようにした。
- 写真や動画を活用し、自分の動きや言葉掛けを思い出しながら振り返りを行った。また、最後まで教師の話を聞けるように、説明内容や量を調整した。
- 利用者役と介護者役を交代しながら相手の気持ちに寄り添う対応を行った。

4　成果（生徒の変容等）

- ボディメカニクスの基本原理を活用できていたこと、残存能力を活用するために「〇〇することはできますか」等の言葉掛けが出来ていたことから本時のねらいは達成されたと考える。
- 生徒Aが「足の向きがまっすぐになっていない」と自ら気付き、二回目の実践でその点に注意して取り組む様子が見られた。
- 生徒Bが車椅子のブレーキに違和感が有ることに気付いたことをきっかけに、「安全」というめあてについて改めて確かめ、さらに深く考える姿勢が育まれた。
- 相手の気持ちを理解するのが難しい生徒において実技の内容を体験的に学ぶのが効果的であった。

5　考察

- 生徒同士で意見交換をしたり、アドバイスを出し合う活動を設定したりしたことで、友達の実技にも注目することができ、友達からもらったアドバイスを意識して実技練習に取り組むことができたと考える。
- 主に個人で振り返ることが出来るように実技練習の様子を動画撮影する際、撮影を行ったが、共有方法を工夫することで全員で視聴しながら学びを深める機会にもつながった。

6　まとめ

- 実技の練習で介護者役、利用者役を交互に行ったことで「どんな気持ちだったか」「相手はどう感じたか」を考える姿につながった。
- 生徒同士でアドバイスをし合う活動と自分の動きを動画で振り返る活動を取り入れたことで友達の様子をよく観察したり、自分の課題を自ら発見し解決策を考えたりする姿につながった。

職業科	作業学習清掃ビルクリーニングにおける基本的な技能や態度を主体的・共同的に学ぶ授業づくり

高等部　　今井　理

1　単元の概要

本学習グループは、作業学習における総合サービス班に所属する高等部１～３年生の生徒６名からなる。本単元では、校外での清掃活動を見据え、校内での窓清掃を通して基本的な知識や技能と職業的態度を習得する。作業の正確さや適切な言葉遣い、立ち居振る舞いなどを学びながら、周囲から感謝の言葉を掛けられたり、清掃を依頼されたりする経験を通して、仕事のやりがいや自己有用感の育成を図る。

2　本単元で育成を目指す資質・能力

段階	内容のまとまり	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1（1名）	職業生活 職業	職業生活に必要な基本的な技能や態度を身に付ける。	作業や実習における役割を踏まえて、自分の成長や課題について考え、表現する。	職業生活に係る自分の成長や課題に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。
2（5名）		職業生活に必要な基本的な技能や態度を身に付け実施する。	作業や実習において、自ら適切な役割を見いだすとともに、自分の成長や課題について考え、表現する。	職業生活における自分の成長や課題に関心をもち、積極的に学習に取り組み、実践しようとする。
1（1名）	職業生活 職業	作業で使用する道具や機械等の特性や扱い方を理解し、作業課題に応じて正しく扱う。	作業課題に応じて道具や機械等の使用方法について考え、表現する。	作業で使用する道具や機械等の特性や扱い方について関心をもち、積極的に学習に取り組む。
2（5名）		作業で使用する道具や機械等の特性や扱い方を理解し、作業課題に応じて効果的に扱う。	作業課題に応じた道具や機械等の効果的な使用方法について考え、表現する。	作業で使用する道具や機械等の効果的な扱い方について関心をもち、積極的に学習に取り組み、実践しようとする。

3　実践の概要

・生徒は、窓清掃に必要な資機材の種類や用途、扱い方を習得し、それらを正しく活用し、準備から清掃、片付けまでの一連の流れを習得している。本時は、清掃後の出来栄えを意識し、清掃技術を高める探究初期段階である。

・本時は窓清掃における自分の成長や課題について考え、それを生徒同士で伝え合って清掃技術の向上を図ることをねらいに、生徒がペアを組んで互いに清掃する姿を撮影し、振り返る活動を行った。

・参加と学びを促すための指導・支援上の配慮点として、体験する場面の設定、タブレット型端末の活用、意見交換の場の設定を行った。

・主体的・対話的で深い学びを促せるよう、動画を見ながら、「きれいな仕上がり」をキーワードに互いの良かった点や改善点を伝え合う場を設けた。

・知識及び技能面のねらいを達成するために、この授業後、同じ週に清掃会社から外部講師を招き、作業手順や所作を確認したり質問の場面を設定したりした。

4　成果（生徒の変容等）

・タブレット型端末で撮影した動画を見て、スクイジーの操作時にタオルで床への水滴を防ぐなどの友達の清掃動作の工夫に気付き、それを言葉で伝えられるようになった。

・友達からのフィードバックを受けて、自分の課題に気付き、改善点を考え、次の清掃に生かそうとする姿勢が見られた。

・ペア活動や意見交換を通して、互いのよさを認め合いながら学び合う姿が育まれた。

5　考察

ビルクリーニングは資機材の使い方や作業手順、所作が定まっている。その１つ１つは、清掃作業における効率や仕上がり、職業人としての立ち居振る舞いにつながっており、「なぜそのようにするのか」といった意味がある。これらの意味を理解し、生徒たちが「利用者にきれいな場所を提供するためにはどうすればよいか」という問いをもって主体的に活動できるようにする必要がある。そのためには、自分たちで考えたり、調べたりする場を設け、教師側からの働き掛けを最小限にすることが大切だと考える。単元を通して子どもたちの学びを深められるよう、教師側から答えとなるものを提示せず、生徒たちがこれまで学んできたことの中から答えを見付けられるようにしたい。

6　まとめ

ビルクリーニングを通して、「使用する道具や機械等の特性や扱いを理解し、作業課題に応じて正しく扱うこと」「作業の確実性や持続性、巧緻性等を高め、確実に作業すること」といった知識・技能を身に付けられるよう、作業中の動き、作業後の出来栄えを可視化することが有効である。そのために映像で振り返ったり相互評価したりすることが大切だと考える。また、「作業や実習における役割を踏まえて、自分の成長や課題について表現すること」「作業上の安全や衛生及び作業の効率について考え、改善を図ること」の思考力、判断力、表現力等を身に付けられるよう、作業面での振り返りと言語活動を含んだ振り返りの充実を図ることが大切だと考える。

道徳科	知的障害特別支援学校における道徳科の授業づくり

小学部　　堀江奈美子

高等部　　鈴木　亜希

１　発表の概要

教育課程の改善・充実を図るカリキュラム・マネジメントにより、本年度から、全学部に道徳教育の中核として「道徳科」を時間割に置き、実践を開始した。道徳科の年間指導計画の基準として「内容項目の指導の観点」を参考にしている。知的障害の障害特性や発達段階等に応じた道徳教育の中核としての「道徳科」の在り方について、高等部３年の実践から気付いたことを報告する。

２　事例

(1)　本題材の概要

・対象：高等部３年生１９名

・題材の内容項目：自分自身に関すること～「節度、節制」

・題材名：フードロスラに立ち向かえ

・本時のねらい：食品ロスとその原因について知り、自分にできることを考える。

(2)　指導・支援上の配慮等

・高等部における道徳科の学習に当たって、生徒達に次のとおり伝え、徹底した。
①「道徳科の学習は、みんなが幸せだと感じて生きていくために、どうしたらよいかを考える時間。」
②「答えはあるけれど、ひとつではない。」
③「自分でよく考えること。ほかの人の話を聞くことを大切にしよう。」

・参加と学びを促す指導・支援上の配慮点
①視覚教材やＩＣＴ機器を活用して、理解や課題解決を支える。
②協議（対話的な学び）を通して理解と気付き、思考を促す。
③生徒の意見は全て肯定的に受け止め、修正しない。必要に応じて価値付けて言語化する。

・主体的・対話的で深い学びを促す手立て・工夫等
①啓発ポスター「フードロスラに立ち向かえ」の提示（題材の道徳的価値の理解を促進する手立て）。
②啓発ポスター「空の皿とスプーンのポスター」の提示（題材を多角的に考え、他者理解を促す手立て）。
③フードロスが起きてしまう原因を考え協議する（題材を多面的に考え、内省と自己理解を促す手立て）。
④自分にできることを考え、他者と共有する（自己の生き方について考えを深めるための手立て）。

(3)　成果（児童生徒の変容等）

生徒から「食品ロスについて、これまで食べ残しについて考えたことがなかったが、これからは自分でできることをやっていきたい」「食べられなくて死ぬ子どもがいるのは嫌だ」「自分たちは恵まれている」「給食を残さないようにしたい」「食品ロスがないように家族と相談したい」「賞味期限を確認して買ったり、食べたりしたい」などの意見がでた。

多くの生徒が時間いっぱい集中して学習に参加した。題材に関心をもって自分事として考え、自分の意見を積極的に話し、他者の発表に耳を傾ける姿が多く見られた。

(4)　考察

これまで道徳科の授業で一貫してきたのは、みんなが幸せだと感じて生きていくためにどうすればよいか考える学習であり、答えはひとつでないということである。だからこそ、自分でよく考えることや他者の話を聞くことを大切にしてきた。これは、生徒一人一人の心理的安全性を保障することにつながり、活発な発言や協議を支えてきた。多くの題材で生徒達は、興味をもって学習に参加し、意見交換をしながら自らの考えを深めてきた。二者択一の答えではなく納得解を見いだす姿や、学んだことを日々の生活に生かそうとする姿も散見されるようになった。グループ協議をリードする生徒が育ち、生徒間で認め合いながら学びを進める姿が芽生えてきた。これらは、題材を超えて育まれた道徳的心情であり、道徳的態度ということができる。

３　まとめ

道徳科は児童生徒の「内面の成長」を扱う教科である。それゆえ、学習の評価に当たっては「道徳的価値の理解」や「考え方の深まり」を捉えることが肝要である。授業に表れた「道徳的価値の理解」「多面的・多角的な見方による考えの深まり」「学習に向かう態度、自己の生き方についての考察や自覚など」に関する生徒の言動を見取っていくことが大切である。指導と評価の一体化を図る上で、事例に示したように、これらの観点を踏まえて学習活動を計画することが有効だと考えられる。

寄宿舎	寄宿舎における参加と学びを促すための指導方法の実践

寄宿舎　　髙橋　雅俊

1　研究の目的

児童生徒が自分から進んで取り組んだり、考えや気持ちを伝えたりする力を育てる生活指導の在り方について明らかにする。

2　目指す姿

日々の寄宿舎生活において、自分から日課や生活課題に進んで取り組んだり、考えたことや気持ちを必要に応じて支援を得ながら伝えたりすることができる児童生徒。

3　実践の概要

能代スタンダード（本校で作成した、児童生徒の参加と学びを促す効果的な指導方法をまとめたもの）を基に、寄宿舎における参加と学びを促すための指導方法を作成、活用することで、児童生徒の目指す姿の実現につながると考えた。全職員で検討、作成し、まとめたものを「効果的な生活指導方法」とし、これを活用して、児童生徒集会を研究対象とし、指導方法の改善を図ることとした。

集会における児童生徒の実態として、集中力が続かない、私語が目立つなどの課題が挙がり、「効果的な生活指導方法」から手立てを検討し、以下のように実践した。

・児童生徒が集中して話を聞くことができるように、職員から要点をまとめて短く話すこと、提示するスライドの数を減らすことにした。また、話す人やスライドに注目して話を聞くことができるように、児童生徒の座席の配置を、半円形にした。

・話やスライドの内容を理解したり、集会中の姿勢を正したりするために、配慮が必要な児童生徒のそばに、職員を配置した。

・パソコンの操作が得意な生徒がスライドの操作をしたり、人前で話すのが得意な生徒が話し方のルールをお知らせしたりするなど、児童生徒が活動する場面を設定し、役割を分担した。

4　成果（児童生徒の変容等）

・職員が伝えたいことをまとめ、短く話したり、児童生徒が前後に並ばないように座席を配置し、話す人やスライドを見やすくしたりなどしたことで、集会中に周囲を見回したり、隣の生徒と話したりしていた児童生徒が、集中して話を聞いたり、話す人やスライドに注目したりするようになった。

・児童生徒のそばに配置した職員が集会中に適宜、話の内容を補い説明することで、職員の話を聞き取れなかったり、理解できなかったりした児童生徒が、話の内容を理解して、集会に参加することができた。

・児童生徒が活動する場面を取り入れたことで、集会への参加が消極的な児童生徒が、集会に関心をもって参加したり、意欲をもって自分の役割を果たそうとしたりする姿が見られた。

5　考察

「効果的な生活指導方法」を活用し、児童生徒の座席の配置など環境設定を整えたり、児童生徒の活動場面を設定したりしたことが、最後まで集中して話を聞くことなどにつながった。従来の指導方法を改善し、刺激の調整をしたり、理解することが難しい児童生徒への支援をしたり、活動の設定をしたりしたことで、待たせず、分かって、参加、活躍できるようになり、集会への参加を促すには有効的であった。集会のほか、部屋会や役員会の少人数での話合いの場、また、個別の生活課題についての指導でも、「効果的な生活指導方法」を活用していきたい。

6　まとめ

集会において、「効果的な生活指導方法」の活用が児童生徒の参加を促すために有効であることが分かった。今年度は、「効果的な生活指導方法」を実践する場面が限定的であった。次年度は、日常の生活指導への活用や、学びを促す指導の実践、検証を行い、児童生徒の目指す姿の実現に向けて、引き続き全職員で取り組んでいきたい。

参加者アンケート（抜粋）

1　研究内容について

・標準年間指導計画を活用した年間指導計画の作成が参考になりました。合わせた指導の教科の視点がより明確になり、児童生徒一人一人の目標が絞りやすくなると思いました。

・教職員全員で研究を行い、深い学びにつながる要点を明確にして、授業実践を積み重ねてきたことが分かった。学びの履歴シートを活用して学びを積み重ねていくことで、より根拠のある明確なゴールを設定することができると感じ、自校でも活用できればと思った。

・本校で次年度目指していきたい授業改善のポイントが示されていて、気付きの多い大変学びのある研究報告でした。標準年間指導計画や観点別評価については、学習指導要領を網羅することで、根拠のある授業づくりの土台を構築しており、先生方はこの「縛り」の中で授業を組み立てることが求められている。しかし、この「縛り」があることによって、先生方一人一人の個性（見方・考え方）が各教科、単元で発揮されているのだろうなと想像できました。先生方の個性を体感しながら学びを進める子どもたちは、自分の学び方をそれぞれ体得していくことができると学ばせていただきました。

・授業づくりの仕組みにおいて、「学びの履歴シート」を指導案とリンクさせて評価し、それが丁寧に記載されていることで、一単位時間の学習が積み重なっていることがとても分かりやすかったです。各教科等の「見方・考え方」を働かせた授業づくりに関しても大変参考になりました。

・観点別学習評価表学びの履歴シートはとても良いと思いました。特に、目標にそのまま活用できるところが、経験の少ない教員でも正確な目標を立てられることで、指導もより良いものにつながると感じました。

・特別支援学校における各教科等の指導計画を作成する、各教科の内容をきちんと取り扱うということから「標準年間指導計画（案）」を作成されたようで、大変素晴らしい取り組みだと思いました。我が校（小学部だけの分校です）では、単元、題材の年間学習活動計画というのはあるのですが、時間配分や各教科の取り組みがまだまだ（生単、遊びが主です…）です。各教科をどう扱っていくかが我が校の課題ですので、ぜひ参考にさせていただきたいと思いました。

・授業づくりのしくみが整備されていました。指導者が替わっても指導内容や方法を共通理解できるツールになっていると思います。こうしたツールがあることで、根拠の明確な指導ができます。ただ、教育課程上、教科だけでなく合わせた指導も行っていますので、そのあたりの学ぶ量・時数・定着度・合わせた指導との関連についての経過や成果・課題も知りたいです。

・学習指導案の活動目標をなくし、観点別学習評価表（学びの履歴シート）から単元の目標や評価規準をそのまま記載して、指導と評価の一体化を図っているところ、時間をかけずに誰もが学習指導案を作成できるところが、とても良いと思いました。

・授業に至るまでの流れが整理されており、各計画や指導案等を検討する際のツールもあって、共通の物差しで授業づくりができていることがうかがえ、参考になりました。

・学びの連続性を保証するための仕組みと、「深い学び」を促す授業改善を丁寧に取り組まれている研究内容に多くの学びがありました。授業の根拠のある明確なゴールが設定され、子供達の成長が見られたことが興味深かったです。

・標準年間指導計画（案）の完成したものは、本校での実践でも参考にさせていただきたいと思います。観点別学習評価表学びの履歴シートはとても良いと思いました。特に、目標にそのまま活用で

きるところが、経験の少ない教員でも正確な目標を立てられることで、指導もより良いものにつながると感じました。

2　実践発表について

・子どもたちの変容がよく伝わってくる、力のある実践発表でした。
・単元で育成を目指す資質・能力は何か、どの教科の「見方・考え方」を働かせるのかを明確にすることで、確実に育成を目指す資質・能力を身に付けることにつながることを、実践発表を通して改めて知ることができた。
・日常生活の指導でめあてを設定していることに驚いた。何を頑張るかを明確にすることで、学びのステップアップが分かりやすいと感じた。また、児童生徒が自ら問いを発して、主体的に授業に取り組む姿が印象的で、児童生徒の発する問いを大切にしていきたいと思った。
・教科の「見方・考え方」がとても大事だと気付かされました。教員もしっかりとこれを意識した支援をし、児童生徒に「味方・考え方」を学ばせることが大事だと分かりました。それらが児童生徒の深い学びの姿につながっており、すばらしい研究発表だなと思いました。
・特に小学部の日常生活の指導について、非常に参考になる内容だった。生活科の基本的生活習慣や日課、予定を自立して行えるように繰り返し取り組むことで児童の変容が見られ、主体的な活動につながっていた。指導の工夫の積み重ねが、改めて大切だと感じた。
・小学部生活科の発表について。「調べる、予想する、確かめる、理解する」ことによって、学校だけでなく、身近な地域や社会に目を向けたり、結びつけて考えたりする力につながっていくのだなと分かりました。ここでも改めて「見方・考え方」が大事なのだと分かり、とても勉強になりました。
・高等部の社会科について、習得した知識を生徒が活用しよう、もっと学ぼうという様子が見られ、とても素晴らしいと思いました。

3　ポスター発表について

・ポスターの中に目指す資質・能力があり、観点別評価表と見比べさせていただけたことで、目標・指導・評価の具体的な流れについて学ぶことができました。
・動画や視覚教材、自作教材等を活用して、素晴らしい実践をされているのがよく分かる研究ばかりでした。
・理科、道徳科を拝見しました。分かりやすく実践や変容がまとめられていたので大変勉強になりました。時間に限りがあったのでポスターだけでなく、教科を学習している子どもの動画などがもっと見てみたかったです。
・各実践が丁寧になされていて参考になった。また、資料の作成について AI を活用していて上手に業務負担を軽減されていると感じた。
・国語科「おべんとうばす」の実践について、学習で学んだことが日常生活にも般化されておりとてもよいなと感じました。わたしも実践してみたいです。
・知的障害特別支援学校で道徳科を指導している学校はかなり稀なので、実践発表をポスター形式で参照できたのは貴重でした。

4　講評・講演について

・今までは教科の「見方・考え方」を働かせる、ということに少し分かりづらさがあったが、教科フィルターを通して学びを可視化する、ということで、児童に気付いてほしいことをより明確にした指導へつなげることができそうだった。

・学びのつながりも大切だが、学び方のつながりや思考・判断・表現と学びに向かう人間性等の目標が教科横断的な視点から大切だと知ることができた。

・例を用いながら、丁寧に分かりやすく御講演していただき、大変勉強になりました。児童生徒の「深い学び」や「気付き」の過程について理解を深めることができました。普段の自校の授業において、生徒が深く学んだり問いを発したり、教科等の「見方・考え方」を働かせた授業ができているか、自身の授業を省みるよい機会となりました。講演で学んだことを活かし、日々の授業づくりに取り組んでいきたいです。

・「学び方」「授業デザイン」等々、具体的な学習例、分かりやすい例示で講話していただき、本校の研究にも生かしたい内容がたくさんありました。大変参考になりました。能代支援さんの研究との関連からも次年度の本校の研究の参考になるところが多々あり、講演を聞かせていただき、大変勉強になりました。

・御校の実践についてのご講評に加えて今後の学習指導要領についての審議の動向まで難しくもためになるご講演でした。「学び」の深まりを見る視点での気付く、知る、分かる、分かって使える、活用できる段階を図示したり、いくつもの思考ツール（言葉を見たことはあるのですが、具体的に何にどう活用するのかを初めて知りました）で例示したりするなど、視覚的に分かりやすく提示してくださってありがたかったです。各教科等の系統性については、もっと勉強しなくてはいけないなと改めて思いました。３つの柱や学び方について分かったようでいて分かっていないのだなと感じました。

・これまで各教科において各部の系統性などを意識することは意識してきたが、それは学習の内容が中心であったことに改めて気付いた。授業デザインの視点として、「学び方のつながり」を意図することの大切さを学ぶことができた。

5　その他

・当日までのご準備だけでなく、オンデマンドまでやっていただき、皆さんのご苦労はいかばかりかと思います。おかげ様で他県の教員である私も勉強させていただくことができました。ものすごく刺激を受けました。こんなに素晴らしい実践やまとめができるのだと。やる気に少し火がつきました。ありがとうございました。

・オンデマンドで学ばせていただいたことや「観点別評価表」について本校の教務主任や研究主任に話したところ、もっと学ばせていただければといった話がでました。今後、貴校の研究や観点別評価表等についてお尋ねをすることがあるかもしれませんので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。また、次年度はぜひ本校からも直接参加させていただければと思いました。ありがとうございました。

各 資 料

【資料１】「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」　※小学部生活科第１段階より抜粋

資質・能力	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価の観点等	活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴に関心をもっているとともに、身の回りの生活において必要な基本的な習慣や技能を身に付けている。	自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて関心をもち、感じたことを伝えようとしている。	自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学ぼうとしたり、生活に生かそうとしたりしている。
基本的生活習慣	食事前の手洗いや配膳、食後の片付けを含んで食事の初歩的な行動が分かり、行うことができる。	食事に関する初歩的な手順に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	食事に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	用便の手順にしたがって用を足すことや、用便後に手を洗うことなどが分かり、教師の援助を受けて行える。	尿意や便意などを伝えたり、支援を求めたりすることができる。	用便に関わる初歩的な手順にしたがって用を足そうとしている。
	必要な支援を受けながら着替えをし、気持ちを落ち着けて一人で就寝することができる。	就寝に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	就寝に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	洗面や歯磨きなど清潔に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	清潔に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	清潔に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	持ち物の整理、自分の服や靴など自分の使った物の整理や、決められた場所に置くなど身の回りの整理に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	身の回りの整理に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの整理に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
	簡単な衣服や靴の着脱の仕方などの初歩的な知識や技能を身に付けている。	衣服等の着脱に関する初歩的な処理に気付き、教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	衣服の着脱に関わる初歩的な学習活動を通して、自分のことに取り組もうとしている。
安全	危険な場所を知り、身の回りのある玩具等を口に入れない、階段や段差などに注意して歩くなど、自分の身を守る適切な行動に気付いている。	自分の身を守る適切な行動に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	危険防止に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を避けようとしている。
	信号や標識に従うことや安全な道路の渡り方など、交通安全の初歩的な知識や技能を身に付けている。	道路の安全な歩き方に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	交通安全に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を避けようとしている。
	避難訓練の初歩的な知識や技能に気付き、落ち着いて指示に従って避難することができる。	教師と一緒に避難訓練に取り組み、できたことなどを表現している。	避難訓練に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を避けようとしている。
	教師と一緒に活動しながら危険な場所や事故につながる行動に気付いている。	身の回りの危険な場所や行動に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組み、できたことなどを表現している。	防災や事故に関する初歩的な学習を通して、危ないことや危険な場所等を避けようとしている。
日課・予定	簡単な日課に関心をもっている。	簡単な日課に気付き、教師と一緒に日課に沿って行動し、できたことなどを表現している。	日課に沿って行動しようとしている。
遊び	教師の働き掛けを受け入れて、まねをしたり、ごっこ遊びをしたり、遊具を使った遊びをしたりするなど、安定した気持ちで身体を動かして遊んでいる。	身の回りの遊びに気付き、教師や友達と同じ場所で遊び、遊んだことを表現している。	自分の好きな遊びを選び、教師や友達と同じ場所で遊ぼうとしている。
	遊具の準備から片付けまでの一連の活動に自分から取り組んだり、教師と一緒に取り組んだりしている。	簡単な遊具の準備や片付け方に気付き、教師と一緒に取り組み、感じたことを表現している。	簡単な遊具の準備や片付け方に関心をもち、教師と一緒に取り組もうとしている。
人との関わり	自分自身や家族のことが分かり、簡単な自己紹介をしたり、呼び掛けに答えたりすることができる。	教師や身の回りの人からの働き掛けに気付き、身振りや表情、挙手や発声、絵カード等で応答している。	簡単な自己挨拶や呼び掛けへ応答を積極的に行おうとしている。
	身近な教師に簡単な要求を表情、身振り、絵カードなどで表現したり、お辞儀や手を振るなどして挨拶したりすることができる。	簡単な要求を自分でできる手段を用いて伝えたり、挨拶などを通してコミュニケーションをとろうとしている。	積極的に要求したり、挨拶したりしようとしている。
	人の来訪や電話に気付き、関心をもっている。	人の来訪やかかってきた電話に気付き、身近な大人に伝えようとしている。	電話や来客の取次に関心をもち、伝えようとしている。
	気持ちを表す言葉があることが分かり自分なりに表現したり、挨拶したりすることができる。	気持ちを表す言葉を用いて表現したり、教師の促しに応じて「ありがとう」「ごめんなさい」などの気持ちを表す言葉を表そうとしている。	気持ちを伝える応対に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。
役割	いろいろな行事に参加し、集団に慣れ、集団の中での役割に気付いている。	身の回りの集団に気付き、教師と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現している。	集団の中での役割を果たそうとしている。
	地域の行事へ参加し、楽しみ、自分の役割を果たすことに気付いている。	地域の行事へ参加し、身近な大人と一緒に役割を果たし、できたことなどを表現している。	身近な大人と一緒に地域の行事の中での役割を果たそうとしている。
	簡単な作業を共同で行い、作業において分担された個人の役割を果たすことに気付いている。	共同で取り組む作業での分担された役割に、教師と一緒に取り組み、できたことなどを表現している。	教師と一緒に共同作業の中での役割を果たそうとしている。
手伝い・仕事	物の配達や伝言、作業の手伝いなどの喜びに気付いている。	身の回りの簡単な手伝いや仕事を教師と一緒に行い、感じたことなどを表現している。	身の回りの簡単な手伝いや仕事をやろうとしている。
	所持品の整理や友達や学級の物の整理、不必要な物の選別と廃棄の仕方などについて気付いている。	身の回りの整理整頓を教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの整理整頓をやろうとしている。
	窓や扉の開閉を繰り返しながらその意味に気付くこと。	窓や扉の戸締まりを教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの戸締まりをやろうとしている。
	ごみを拾って捨てたり、掃除用具を使って簡単な掃除をしたりすることに気付いている。	身の回りの簡単な掃除を教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの簡単な掃除をやろうとしている。
	手伝いなどが終わったら、使用した道具や材料などの片付けを行い、教師に報告することなどに気付いている。	身の回りの簡単な後片付けを教師と一緒に行い、できたことなどを表現している。	身の回りの簡単な後片付けをやろうとしている。

【資料２】個別の指導計画（実際に作成したものを一部抜粋　中学部２年）

教科	段階	資質・能力	知識・技能		思考・判断・表現			主体的に学習に取り組む態度	
社会	第１段階	評価の観点等	身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動、地域の産業と消費生活の様子及び身近な地域の様子の移り変わり並びに社会生活に必要なきまり、公共施設の役割及び外国の様子について、具体的な活動や体験を通して、自分との関わりが分かるとともに、調べまとめる技能が身に付いている。			社会的事象について、自分の生活や地域社会と関連付けて具体的に考えたことを自分の言葉で表現している。		身近な社会に自ら関わろうとする意欲をもち、地域社会の中で生活することの大切さについて自覚している。	
社会	第１段階	社会参加ときまり	学級や学校の中で、自分の意見を述べたり相手の意見を聞いたりするなど、集団生活の中での役割を果たすための知識や技能が身に付いている。	○		集団生活の中で何が必要かに気付き、自分の役割を考え、表現している。	○	社会参加するために必要な集団生活に関わる学習活動に関心をもち、身近な社会に自ら関わろうとしている。	○
社会	第１段階	公共施設と制度	身近な公共施設や公共物の役割が分かっている。			公共施設や公共物について調べ、それらの役割を考え、表現している。		公共施設や公共物に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	
社会	第１段階	公共施設と制度	身近な生活に関する制度が分かっている。			身近な生活に関する制度について調べ、自分との関わりを考え、表現している。		身近な生活に関する制度に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	
社会	第１段階	地域の安全	地域の安全を守るため、関係機関が地域の人々と協力していることが分かっている。			地域における災害や事故に対する施設・設備などの配置、緊急時への備えや対応などに着目して、関係機関や地域の人々の諸活動を捉え、そこに関わる人々の働きを考え、表現している。		地域の安全を守るための関係機関や地域の人々の活動に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	
社会	第１段階	産業と生産	生産の仕事は、地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることが分かっている。			仕事の種類や工程などに着目して、生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え、地域の人々の生活との関連を考え、表現している。		生産の仕事と地域の人々との関わりについて関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	
社会	第１段階	産業と生産	販売の仕事は、消費者のことを考え、工夫して行われていることが分かっている。	○		消費者の願いや他地域との関わりなどに着目して、販売の仕事に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え、表現している。	○	販売の仕事と消費者との関わりに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	◎
社会	第１段階	我が国の地理や歴史	身近な地域や自分たちの市町村の様子が分かっている。	○		都道府県内における市町村の位置や地形、土地利用などに着目して、身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現している。	△	身近な地域や自分たちの市町村の様子に関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	○
社会	第１段階	我が国の地理や歴史	身近な地域や自分たちの市町村の様子、人々の生活は、時間とともに移り変わってきたことを知っている。	○		交通や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市町村や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現している。	△	身近な地域や自分たちの市町村の様子、人々の生活の移り変わりに関心をもち、積極的に学習に取り組もうとしている。	△

令和７年度　年間指導計画［教科別の指導用］

教科名	数学	年間時数	予定７０時間／実施〇〇時間
部・年・組・グループ・（人数）	中学部２年Aグループ（３名）	作成者（指導者数）	しののめ太郎（他１名）

月	題材名/単元名・学習活動	予定時数（実施）	指導内容	題材/単元の目標 ※【知識・技能】のみ記載	実施状況
	計算をしよう ・２位数の加法 ・２位数の減法	12 (10)	・数と計算（整数の加法及び減法）	・２位数の加法及び減法を理解し、計算する	計画通り実施できた。２位数の加法はワークを繰り返し実施したことで定着した。減法は定着までに予定時数が不足した
		()			
		()			
		()			
		()			
		()			

何を学習するか、分かるように記載

内容のまとまりを記載
※観点別学習評価表から抜粋

観点別学習評価表を参考に、【知・技】の目標を記載
※実際は【知・技】【思・判・表】【主】の三観点で目標設定と評価を行うが、紙面上には【知・技】のみを記載する。

★国語科について・・・

『国語で理解し表現する上で「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」は共に必要となる資質・能力である。
　また、「知識及び技能」を身に付けるために、思考。判断し表現することを通じて育成を図ることが求められる。』
学習指導要領解説より
→よって、**国語については、「知・技」と「思・判・表」の両方を記載**する

・計画時数に対して実施時数がどうだったか（計画通り／時数多すぎた・足りなかった場合はその理由）
・主な資質・能力に関して特記事項があれば記入する。（学習の様子・効果的だったことなど）

・２ページ目（裏面）に記載
・能代スタンダードの考え方に基づき、年度末に評価として**効果的だった**指導方法や、支援方法（個別の配等）について選択しプルダウンでレ点をチェック

指導の方法

分類	項目	参加と学びを促すための手立て　※特に効果的であった内容をチェック					
環境設定　物的支援	配置や環境	机の位置や向き		並び順や並び方		人や物との距離感	
		安全で動きやすい動線・空間		用具類の置き方の工夫		板書の工夫	
		時刻や時間の提示		印やマークの使用			
		その他の工夫					
	教材・教具	単元計画表の工夫		本時の流れの提示		前時までの内容の掲示	
		見本の提示・活用		実物の提示・活用		ワークシート様式の工夫	
		写真・動画の活用		カードの活用		扱いやすい道具	
		その他の工夫					

環境設定　人的支援	ティームティーチング	支援方法・内容の共有		役割分担の工夫		教師数の調整	
		教師の立ち位置		個や場面に応じた支援量の調整			
		その他の工夫					
	教師の働き掛け（発問や評価）	１指示１動作		適切な説明内容と量		声量や話す速度の工夫	
		気付きを促す問い掛け		思考を促す問い掛け		思いを引き出す問い掛け	
		学びを確かめるための工夫		タイミングのよい確認		即時評価	
		称賛方法の工夫		自立活動の課題に応じた支援			
		その他の工夫					

活動内容や場面設定	グループ、役割の設定	グルーピングの工夫		得意やよさを生かした役割分担		全員での役割分担	
		リーダー役の設定		グループや役割の固定			
		その他の工夫					
	活動内容	適切な時間配分		適切な活動順		活動量の確保・調整	
		分かりやすい活動		一人でできる活動		試行錯誤できる活動	
		安全に取り組める活動		効率よく取り組める活動		協働的な活動	
		その他の工夫					
	場の設定	自力思考の時間確保		繰り返しの場面の設定		体験する場面の設定	
		意見交換の場面の設定		グループ同士の学び合い		学習成果を見合う場面の設定	
		その他の工夫					
	※導入場面で	見通しや意欲につながるしかけの工夫		前時を振り返る場面の工夫		写真や演示を取り入れた説明	
		子どもが活動する場面の設定		めあての確認・共有方法の工夫			
		その他の工夫					
	※まとめや振り返り場面で	子どもが活動する場面の設定		互いの考えを共有する場面の設定		発言や考えを残して生かす	
		最後まで集中できる内容・展開		記録や日誌の工夫			
		その他の工夫					

ＩＣＴ機器の活用	電子黒板の使用		タブレット端末の使用		意思表出ツールとしての活用	
	スライドや作品づくりでの活用		話し合いでの活用		振り返りやまとめでの活用	
	発表での活用		その他の活用			

令和７年度　年間指導計画［各教科等を合わせた指導用］　例：中学部

指導の形態等		生活									予定210時間／実施〇〇時間
部・年組・グループ・人数		中学部　年　組									しののめ花子　他２名
月	単元名 ・主な学習活動	予定時数（実施）	国	社		理	音	美	保体	職家	他	実施状況
4	新年度スタート ・学級の目標決め ・掲示物づくり	8（7）	〇 言語文化・書く	〇 参加	〇 測定（長さ）			〇				計画通り実施できた。活動に参加し、協力し合う力の育成では掲示物作づくりでを通して自然と手伝しあう姿につながった。
5 6	宿泊学習へ行こう ・活動内容の確認 ・目標決め ・係の仕事の準備 ・日程表の作成 ・結団式、報告会	100（111）	〇 特徴や使い方・話す書く	〇 きまり施設地理	〇 測定（時刻）	〇 自然				〇 家庭健康食事	特活道徳	
7 8												
9 10												

★年間標準恣意同計画により「扱う教科」に〇をプルダウンで選択。作業学習は全作業班が同じ教科になるように学部で統一すること

★「内容のまとまり」をプルダウン選択
・最大２～４つまで選択可（必要に応じて行を増やす）

２桁以上は半角で入力

★「扱う領域等」をプルダウンで選択

・指導内容は学びの履歴シート（個別の指導計画）と学習指導要領解説の内容を参考に「内容のまとまり」をプルダウン選択する

★国語科について・・・
『国語で理解し表現する上で「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」は共に必要となる資質・能力である。また、「知識及び技能」を身に付けるために、思考。判断し表現することを通じて育成を図ることが求められる。』学習指導要領解説より
→よって、**国語については、「知・技」と「思・判・表」の両方を選択**する

指導の方法

・
・

・２ページ目（裏面）に記載
・能代スタンダードの考え方に基づき、年度末に評価として**効果的だった**指導方法や、支援方法（個別の配等）について選択しプルダウンでレ点をチェック

【参考】 主要教科の主な内容 （内容のまとまり）		国	社		数		理	職家	職家
		使い方・特徴	社会参加ときまり	産業と生産	数と計算	測定	生命	職業生活	家族・家庭生活
		語・文章	公共施設と制度	地理や歴史	図形	データの活用	地球・自然	情報機器の活用	衣食住
		言語文化	地域の安全	外国の様子			物質・エネルギー	実習	消費生活・環境

【資料４】令和７年度　学習指導案（正案）様式

＜書式について＞
・余白は上下左右 20㎜、文字数は 45 字を基本とする。※表についてはこの限りではない。
・フォントについて、本文はＭＳ明朝 10.5p（数字含）とする。各見出しはＭＳゴシック 10.5p とし、タイトルのみ 12p とする。
・(1)・(ｱ)・２桁以上の数字は、全て半角で作成する。
・箇所に応じて必要なスペースを空ける（□：全角スペース　－：半角スペース）。

＜確認＞
・各内容を関連付けながら読むことができるように、**Ａ３サイズ見開き（両面）**を基本とする。

Ａ３（表面）

〇学部〇年　指導の形態名　学習指導案　（記入例）

様式内の「児／生」について
→小「児童」　中・高「生徒」
に各自で修正

日　時　令和　年　月　日（　）00：00～00：00
場　所　〇〇〇〇　→児／生数　　名
授業者　〇〇〇〇（Ｔ１）〇〇〇〇（Ｔ２）

１□単元（題材）名

２　単元の概要

２単元の概要：
これまでの学習履歴や中心となる学習活動の**要旨**を記載する。（３行程度まで）

教科指導の場合は、段階のみ記入。合わせた指導の場合は、対象とする各教科等を記入。

３　単元の計画

□（１）単元の目標（本単元で扱う主たる各教科の内容のまとまり）

教科・段階	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
職・家１（　名）	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付ける。		
職・家２（　名）	調理に必要な材料の分量や手順などが分かり適切に調理する。		
社会１			

３（１）目標：
単元において中心的に扱う各教科等から順に記載する。
観点別学習評価表（評価規準）の内容を「**目標**」**としての表現**にして記載する。

□（２）個別の手立て（配慮事項・支援内容）

児／生名	段階	配慮事項・支援内容
〇・〇	1	

３（２）個別の手立て：**個別の教育支援計画**や**個別の指導計画（自立活動）**を参考に、単元に関連する事柄を記載する。

□（３）指導計画（総時数〇時間）

小単元名・学習活動		時数	小単元で扱う各教科等と指導内容
第一次	「〇〇をつくろう」		
	□①役割分担	（２）	職・家１（調理の基礎） 職・家２（手順の理解） 社１（役割）
	②調理実習Ⅰ	（６）	職・家１（簡単な調理） 職・家２（手順を理解して調理する）
	③作り方の紹介	（４）	社１（自分の意見を述べる）
第二次	「食べてもらおう」		
	①調理実習Ⅱ	（４） 本時 1～4/6	職・家１（簡単な調理） 職・家２（分量を理解して調理する）
	②感想の聞き取り	（２）	社１（相手の意見を聞く）
第三次	「　　」		

３（３）小単元で扱う各教科等と指導内容：
小単元において**単元目標のどの部分を指導・評価するか**を記載する。

Ａ３（裏面）

（４）単元の評価規準

教科・段階	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
職・家１ （　名）	簡単な調理を通して、調理の基礎的な知識と技能を身に付けている。		
職・家２ （　名）	調理に必要な材料の分量や手順などが分かり適切にできる。		

３（４）評価規準：観点別学習評価表から内容を**抜粋する**。

４　本時の計画（指導計画　第〇次　〇時間中の〇時）

（１）本時の目標

教科名 〇段階	
教科名 〇段階	

★４（１）本時の目標：
３（３）指導計画の第〇次〇時間中の〇時の指導内容と、各教科の見方・考え方を踏まえ、本時で何を身に付けるのか具体的に記載する。

教科指導の場合は、段階のみ記入。合わせた指導の場合は、対象とする各教科等を記入。

（２）学習過程

時間（分）	学習活動	指導上の留意点	
		全体	個別
	１□前時までの振り返りをする。	・１回目の調理実習の要点を全員で確認できるように・・・・を提示する。 めあて ○○・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。	

★4（2）学習過程：

・本時のめあてを達成するための手立てや指導の工夫を記載する。
　　→視点　能代スタンダード（参加と学びを促すための３つの柱）
　　各教科の見方・考え方
　　主体的・対話的で深い学び
・「個別」欄　　めあての達成や参加と学びを促すために、本時の学習活動全体を通して（実態によっては学習活動の場面において）どのような手立てを講じるか記載する。各生徒一人一人について記載する。
・表の幅は各自で調整する。

★本時の評価規準について：評価規準は目標と一体であることから、様式への記載は省略するが、評価規準の設定と評価は必ず行う

★配置図・板書・ワークシート様式は、余白スペースを活用して作成または別添資料とする。（参観において必要な場合は添付する）。

小学部１年　生活科　標準年間指導計画

［１段階］			内訳	
指導内容	指導の形態／単元名等	時数	教科	合わせた指導
基本的生活習慣 ・簡単な身辺処理に気付き，教師と一緒に行おうとすること。 ・簡単な身辺処理に気付き，教師と一緒に行おうとすること。関する初歩的な知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導 食事、着脱、用便、寝起き、清潔、身なり等	60		60
安全 ・身の回りの安全に気付き， 教師と一緒に安全な生活に取り組もうとすること。 ・安全に関わる初歩的な知識や技能を身に付けること。	特別活動（行事） 「避難訓練」 「交通安全教室」	5		5
日課・予定 ・身の回りの簡単な日課に気付き， 教師と一緒に日課に沿って行動しようとすること。 ・簡単な日課について， 関心をもつこと。	日常生活の指導 「朝の会」 「帰りの会」	45		45
遊び ・身の回りの遊びに気付き， 教師や友達と同じ場所で遊ぼうとすること。 ・身の回りの遊びや遊び方について関心をもつこと。	日常生活の指導、生活単元学習 「あそびがいっぱい」	35		35
人との関わり ・教師や身の回りの人に気付き，教師と一緒に簡単な挨拶などをしようとすること。 ・身の回りの人との関わり方に関心をもつこと。	日常生活の指導、生活単元学習 「わたしとかぞく」「せんせい ともだち なかま」 「ありがとう ごめんなさい」	35		35
役割 ・身の回りの集団に気付き， 教師と一緒に参加しようとすること。 ・集団の中での役割に関心をもつこと。	日常生活の指導、生活単元学習 「ちいきのぎょうじ」	30		30
手伝い・仕事 ・身の回りの簡単な手伝いや仕事を教師と一緒にしようとすること。 ・簡単な手伝いや仕事に関心をもつこと。	日常生活の指導、生活単元学習 「せんせいのてつだいをしよう」	30		30
金銭の扱い ・身の回りの生活の中で，教師と一緒に金銭を扱おうとすること。 ・金銭の扱い方などに関心をもつこと。	生活単元学習 「かいもの」「おかねはたいせつ 」 「じどうはんばいき」	5		5
きまり ・身の回りの簡単なきまりに従って教師と一緒に行動しようとすること。 ・簡単なきまりについて関心をもつこと。	日常生活の指導、生活単元学習 「だれのもの」「かして、ありがとう」 「みんなでつかうばしょ」「どうろをあるくとき」 「つかうときのきまり」「のりもの」	30		30
社会の仕組みと公共施設 ・身の回りにある社会の仕組みや公共施設に気付き， それを教師と一緒にみんなに伝えようとすること。 ・身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心をもつこと。	生活単元学習 公共施設の利用（ぽんぽこ山、子ども館等） 教科書☆	15		15
生命・自然 ・身の回りにある生命や自然に気付き， それを教師と一緒にみんなに伝えようとすること。 ・身の回りの生命や自然について関心をもつこと。	生活単元学習 季節（春夏秋冬）　教科書☆ 植物を育てよう　　教科書☆	15		15
ものの仕組みと働き ・身の回りにあるものの仕組みや働きに気付き， それを教師と一緒にみんなに伝えようとすること。 ・身の回りにあるものの仕組みや働きについて関心をもつこと。	生活単元学習 風とゴムの力　教科書☆ 重い・軽い　教科書☆	10		10
	合計	315		315

小学部５年　生活科　標準年間指導計画（案）

［３段階］

指導内容	指導の形態／単元名等	時数	教科	合わせた指導
基本的生活習慣 ・必要な身辺処理や集団での基本的生活習慣が分かり，日常生活に役立てようとすること。 ・日常生活に必要な身辺処理等に関する知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導 食事、着脱、用便、寝起き、清潔、身なり等「一人でやってみよう」	50		50
安全 ・日常生活の安全や防災に関心をもち，安全な生活をするよう心がけること。 ・安全や防災に関わる知識や技能を身に付けること。	特別活動（行事） 「避難訓練」 「交通安全教室」	5		5
日課・予定 ・日常生活の日課・予定が分かり，およその予定を考えながら，見通しをもって行動しようとすること。 ・日課や身近な予定を立てるために必要な知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導 「朝の会」 「帰りの会」	45		45
遊び ・日常生活の遊びで，友達と関わりをもち，きまりを守ったり，遊びを工夫し発展させたりして，仲良く遊ぼうとすること。 ・きまりのある遊びや友達と仲良く遊ぶことなどの知識や技能を身に付けること。	生活単元学習 「いろいろな遊び」「向能代小交流」 「道具の準備・後片付け」	35		35
人との関わり ・身近な人と自分との関わりが分かり，一人で簡単な応対などをしようとすること。 ・身近な人との簡単な応対などをするための知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導、生活単元学習 「自分自身と家族」「買い物」 「気持ちを伝えよう」	45		45
役割 ・様々な集団活動に進んで参加し，簡単な役割を果たそうとすること。 ・集団の中での簡単な役割を果たすための知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導、生活単元学習 「集団参加や集団内での役割」 「かいをひらこう」	45		45
手伝い・役割 ・日常生活の手伝いや仕事を進んでしようとすること。 ・手伝いや仕事をするための知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導、生活単元学習 「手伝い」「整理・整頓」「戸締まり」「掃除」「後片付け」「アイロンをかけよう」	45		45
金銭の扱い ・日常生活の中で，金銭の価値が分かり扱いに慣れること。 ・金銭の扱い方などの知識や技能を身に付けること。	生活単元学習 「金銭の扱い」 「かいをひらこう」	15		15
きまり ・日常生活の簡単なきまりやマナーが分かり，それらを守って行動しようとすること。 ・簡単なきまりやマナーに関する知識や技能を身に付けること。	日常生活の指導 「自分の物と他人の物の区別」「学校のきまり」「日常生活のきまり」	45		45
社会の仕組みと公共施設 ・日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設が分かり，それらを表現すること。 ・日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設などを知ったり，活用したりすること。	生活単元学習、生活科 「仕事を知ろう」「学校」いろいろな店」「公共施設で働く人（駅、スーパー）」「図書館の使い方」	30	10	20
生命・自然 ・日常生活に関わりのある生命や自然の特徴や変化が分かり，それらを表現すること。 ・日常生活に関わりのある生命や自然について関心をもって調べること。	生活単元学習、生活科 「自然とのふれあい」 「動物の飼育」「植物を育てよう」	35	15	20
ものの仕組みと働き ・日常生活の中で，ものの仕組みや働きが分かり，それらを表現すること。 ・ものの仕組みや働きに関して関心をもって調べること。	生活単元学習、生活科 「物の重さ」 「風とゴムの力」	25	10	15

高等部３年　社会科　標準年間指導計画

［２段階］

指導内容	指導の形態／単元名等	時数	内訳 教科	内訳 合わせた指導
社会参加ときまり ※高等部２年で取り扱う				
公共施設と制度 ※高等部２年で取り扱う				
我が国の国土の自然環境と国民生活		9	4	5
・自然災害から国土を保全し国民生活を守るために国や県などが様々な対策や事業を進めていることを理解すること。 ・国土の環境保全について，自分たちにできることなどを考え，表現すること。	「自然環境と国民生活」 教科４時間 「避難訓練事前事後学習」 生単５時間		（４）	（５）
産業と生活	教科／生単	24	14	10
・我が国では様々な工業生産が行われていることや，国土には工業の盛んな地域が広がっていること及び工業製品は国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解すること。 ・工業生産に関わる人々は，消費者の需要や社会の変化に対応し，優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして，工業生産を支えていることを理解すること。 ・工業の種類，工業の盛んな地域の分布，工業製品の改良などに着目して，工業生産の概要を捉え業生産が国民生活に果たす役割を考え，表現すること。 ・製造の工程，工場相互の協力関係，優れた技術などに着目して，工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え，その働きを考え，表現すること。	「我が国の工業生産」 教科１０時間 「修学旅行事前学習」 生単１０時間		（１０）	（１０）
・大量の情報や情報通信技術の活用は様々な産業を発展させ，国民生活を向上させていることを理解すること。 ・情報の種類，情報の活用の仕方などに着目して，産業における情報活用の現状を捉え，情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え，表現すること。	「我が国の産業と情報」 教科４時間		（４）	
我が国の地理や歴史	教科	22	12	10
・世界における我が国の国土の位置，国土の構成，領土の範囲などを大まかに理解すること。 ・世界の大陸と主な海洋，主な国の位置，海洋に囲まれ多数の島からなる国土の構成などに着目して，我が国の国土の様子を捉え，その特色を考え，表現すること。	「我が国の地理」		（４）	
・我が国の歴史上の主な事象を手掛かりに，世の中の様子の変化を理解するとともに，関連する先人の業績，優れた文化遺産を理解すること。 ・世の中の様子，人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して，我が国の歴史上の主な事象を捉え，世の中の様子の変化を考え，表現すること。	「我が国の歴史」 「修学旅行事前学習」 生単１０時間		（８）	（１０）
外国の様子	教科／生単	15	5	10
・我が国は，平和な世界の実現のために国際連合の一員として重要な役割を果たしたり，諸外国の発展のために援助や協力を行ったりしていることを理解すること。 ・地球規模で発生している課題の解決に向けた連携・協力などに着目して，国際社会において我が国が果たしている役割を考え，表現すること。	「外国の様子」 教科５時間 「世界の中の日本」 生単１０時間		（５）	（１０）
	合計	70	35	35

あとがき

御存じのとおり、今年度の本校の研究主題は、「児童生徒の学びが『見える』授業づくり２」です。「授業づくり」ということから、私自身、たくさんの研究授業を参観する機会を得ました。数えてみたところ、２０数回でありました。特筆すべくは、教科の授業が多かったことです。それには今年度、本校の教育課程の中で、週時程が大きく変わったことが影響しています。具体的には、小学部では、図画工作科、生活科、中学部では職業・家庭科、理科、社会科、高等部では、理科、社会科、家庭科、全学部で道徳科が週時程上に明記され、教科の指導の時間が増えました。それに伴い、いわゆる「合わせた指導」の時間が減っています。

実際の授業に向けては、事前に教科毎のグループ研究の時間が設定され、その中で協議してから提示されていることから、指導案もシンプルで分かりやすいものになっています。また、単元や本時の目標が観点別学習評価表から転記され、どの段階のどの内容を教えるかが決まっていることにより、学習活動について十分に検討する時間が取れたり、教材研究をしたりと「授業づくり」に集中することができているように見えました。１２月の研究発表会では、これまで行ってきた授業の中から、３つの実践発表、１０のポスターセッションを行っております。こちらにつきましても、教科毎のグループで十分に検討し、提示しました。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の丹野哲也先生からは、実践発表やポスターセッションに御講評いただいたほか、本校の「授業づくりの仕組み」についても、システム化している点、「標準年間指導計画（案）」や「観点別学習評価表（学びの履歴シート）」が重要なツールとして位置づけられている点、「能代スタンダード」が大変具体的であり、他校でも参考になるといった点にお墨付きをいただきました。

本研究は令和５年度、６年度とつながりのある内容となっており、今年度は２年次研究の１年目を終え、多くの成果を得ることができました。また、研究発表会に御来校していただいた皆様、オンデマンドで御参加いただいた皆様からも、本校の実践や研究についてたくさんの御意見、御感想をいただいております。次年度も、これまでの成果や課題を踏まえ、更に実践を積み上げ、これまでと同様に、研究発表会等を通して本校の研究の取組を発信していきたいと考えております。その際は、ぜひ御来校いただき、御意見、御助言をいただけますと幸いです。

教頭　　佐藤　香代子

研　究　同　人

校長　佐藤　圭吾
教頭　佐藤　香代子
教頭　小玉　慎也

研究部主任　髙橋　沙織
小学部　田村　夏菜
中学部　鈴木　迪菜　　大山　裕子
高等部　佐藤　尊　　鈴木　亜希
寄宿舎　髙橋　雅俊　　吉田　淳一郎
佐藤　初子　　小林　八生

【小学部】
船山　真生
髙橋　沙織
堀江　奈美子
渡部　大樹
大髙　聡美
菊地　直枝
中川　朋美
朝香　若奈
白瀬　喬彦
佐藤　輝美
原田　知加良
田村　夏菜
黒木　良介
杉森　利津子
嶽石　涼
熊谷　花菜
佐藤　明子
淡路　碧海

【中学部】
伊藤　友和
中村　堅一
舘山　奈穂子
高澤　衣久子
佐藤　礼子
諏訪　寿昭
井潟　直子
大山　裕子
澤井　裕子
鈴木　迪菜
渡邉　正徳
加藤　真理子
安田　幸道
菊地　操
港　哲子
保坂　周子
熊谷　晃太

【高等部】
畠山　幸司
幡宮　明
由利　和也
畠山　智子
伊東　大樹
市川　尭
菊地　昭子
佐藤　尊
原田　公子
落合　幸美
大和　路子
今井　理
澤田　真実
大山　崇彦
髙橋　聖佳
鈴木　亜希
成田　彩瑛
平塚　朋子
宮田　豪
石井　悟
中川　祥
村岡　静香

【寄宿舎】
安保　友希
菅野　倫子
山田　眞由美
桧山　環
阿部　洋
髙橋　雅俊
吉田　淳一郎
盛　真菜美
小鹿　友里絵
大高　尚子
佐藤　初子
三浦　陽香
太田　里香
小林　八生
鈴木　智恵美

研究紀要　しらかみ　第３２号

令和８年３月 発行

発行者　秋田県立能代支援学校
〒016-0005　秋田県能代市真壁地字トトメキ沢１３５番地
ＴＥＬ　０１８５－５５－０６９１
ＦＡＸ　０１８５－５５－０６８１
E-mail　noshiro-s@akita-pref.ed.jp
ホームページ　https://noshiroshien.ed.jp